ランドファーマー旅行記

きーち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ランドファーマー旅行記

【Ｎコード】
Ｎ１８０７Ｗ

【作者名】
きーち

【あらすじ】
架空の世界の架空の大陸で、とある若者が旅をするお話です。
２０代から中高年のための小説投稿　＆ａｍｐ；　レビューコミュニティ
に投稿しているものですが、とりあえずこちらでもまとめて置こうと思います。

最初の話

とある大陸がある。海岸線には砂浜や絶壁、内陸に進めば草原や砂漠、深く未開な森林を見ることができた。大小様々な姿を見せる山脈も大陸を彩る特徴の一つだ。

特徴と言えば、そこには生命が溢れているという物がある。小さな物から大きな物まで、海や湖を泳ぐ物、野山を駆ける物、大空を飛び大地を見渡す物、地中に潜む物までいた。

そんな中、一風変わった物がいる。知恵を持つ物達だ。知恵を持つ物達は、何かを作るのが上手かった。道具を作り、家を作り、家族を作り続け、自ら国と名付けた物を大陸に幾つも作り上げた。

物語の舞台はその一つ、シライと呼ばれる国から始まる。

シライは知恵を持つ物達の内、人間という種族が作った国である。偉大な１２５人の英雄が開国したとか、天地開闢の後、神によって生み出されたといった幾つかの神話や歴史があるが、それはあまり関係の無い話である。どれも人間が作った話であり、この物語の主人公は人間では無いからだ。

シライは人間が作った国であるが、人間だけが住む国では無い。国外から来る商人や冒険者の中には人間以外の種族が多かったし、国が出来る前からその土地に住む種族や国が出来た後に土地に住んだ種族もその国の構成員だったからだ。

その中で、国が出来る前から住んでいたランドファーマーと言う種族の一人こそが主人公、アイムである。

ランドファーマーは土地を開拓し、肥やし、耕し、様々な作物を収穫する事に長けた種族であり、皆、農業や牧畜を営む事を生業としていた。ランドファーマーの若者であるアイムもその例に漏れず、鍬を持ち、土地に打ち付ける事で日々の糧を得ていた。

「外の世界に憧れる事くらいはあるんだけどね。」

そうやって若者にありがちな夢を独りごちているアイムは、鍬を

振るいながら、再び言葉を続ける。
「それでも生活ってのは大切さ、どんなに退屈でも、命の危険があるって事に比べたらさ、アレだよ、うん、良いものなんだよ。」
今度は若者にありがちな諦めを語りながら、やはり鍬を振るい続ける。農作業中は一度も手を休める事が無いというのがランドファーマーの特徴だ。
「だけど、この手に握る鍬が剣で、当てる相手が土じゃなく魔物やドラゴンだったら、なんて思う事は悪い事じゃないよね。」
良いことでもないけどさ―
鍬の一振り事に夢と現実を交互に思い浮かべるが、次の瞬間にはそろそろ作物の種をまく時期だな。という考えが頭に過ぎる自分を見れば、結局、この国の人々が自分たちを指して言う、ランドファーマーらしい生き方とやらが一番似合っているのだろうとアイムは結論付けた。

家へと帰る道のりでアイムの足は重かった。精神的にでは無く、肉体的に疲労しているのだ。
ランドファーマーは自らの仕事を休みなく行う事ができる。それができるからこそ、彼らはランドファーマーと呼ばれるのであるが、だからと言って疲労を感じないという訳では無い。
「だけど、我慢ができるって事は疲れないって事じゃないんだよね。それでも僕らを見て人間なんかは感心するんだから可笑しな物だよ。」
人間の国であるシライにおいて、人間以外の種族は人間より位置付は下である場合が多い。差別や特権といった物としての意味でもあるが、概ね人間と人間以外の種族としてこの国では見られるという意味である。
そんな中で他種族よりランドファーマーのシライでの地位は他の種族より地位は高い。農作業や牧畜を主な生業とするランドファーマーは一部の人間の産業を奪う物ではあるが、それ以上に人間の社

会に益をもたらす存在として見られるからだ。
「まあだから、不満が有るわけじゃないよ。ただちょっと、平凡な生活の中で夢を見たいだけさ。疲れて家へ帰る道のりに、ちょっとした非日常があれば満足はできるんだ。」
だが、これまでそんな事は数える程しか起こったことがない。それも近所の羊が集団で逃げ出した事件や、子供が小さな猪を森に潜む巨大なドラゴンと勘違いして逃げ回るのを見た程度の事を含めての数である。
「期待したって仕方無い事だしね。家に帰って夕食を食べて寝る。そのことに幸せを感じるように努力したほうが現実的だよ。」
再びあきらめの言葉を嘆くアイムであるが、そんな彼の考えはほんの少しだけ裏切られる事になる。
「うん？」
彼が疲れた足で向かう目的地である自宅の前に、見知らぬ人影が佇んでいたからだ。

「ランドファーマーは休まずに土地を耕す事ができるというのは本当の事なんだな。仕事の能率の良さから来た逸話だと思い込んでいたが、少なくとも君は俺の見ている限り、一度もその手を止める事は無かった。」
そうやってアイムに話かける男はリュンという名前らしく、アイムの仕事を一日中観察した後、アイムより先にアイムの自宅へと急ぎ、アイムを待っていたそうだ。
それはさぞ疲れた事だろうと考えたアイムは、彼を自らの家へと招き、来客に白湯を入れているわけだが、徐々に自分が不安を感じ始めている事に気が付いた。
（だって話を聞いた限りじゃあ、怪しさしか感じ無いじゃないか。なんだよ、一日中観察してたって。強盗とかじゃないよね。強盗はそんな回りくどい事はしないよね。）
にじみ出る不安感を少しでも払おうとアイムは、遠慮なく椅子に

座る—本当に遠慮なく—リュンと名乗る男をもう一度見た。
（長い耳をしてる。エルフ？いや、形が丸いからツリストかな？変わった服を着てるし。）
ツリストとは大陸に住む知恵を持った種族の一つであり、丸く長い耳に動物の刺繍が入った服を好んで着ている事が特徴の種族だ。一所に定住しない種族でもあり、よく行商人や冒険家を生業にしている事が多い。もっとも、さらに荒事向きな仕事を職業にしている者もよく見るが・・・。
「どうぞ」
とりあえず、コップに入れている白湯が溢れてしまう前にアイムはリュンに白湯を差し出した。
「ああ、助かる。もう春も近いとは言え、外は肌寒い季節だ。こういった暖かい飲み物はたとえ水だとしてもありがたいものだからな。」
もしかして少し嫌味を含んでいるのだろうか？しかし家に茶などという上等な物が無い以上、アイムにはどうしようもない。
「それで、一日中僕を観察していたそうですが、いったい何のために？家にまで来て何の意味も無くって訳じゃないでしょうね？というか僕は仕事中、あなたに気付く事は無かったんですが。」
目の前の男が不安で仕様がないアイムは矢継ぎ早に質問を繰り返すが、リュンは慌てた様子も無く、口元を白湯の入ったコップから話して答えた。
「当然、用があったから君に会いに来た。もっと正確に言えばこの国に住む若いランドファーマーにな。ちなみに仕事中、君が俺に気付かなったのは、俺がかなり遠くから君を観察していたからだ。目は良いほうなんでね。」
そういえばツリストは視力がかなり良いと聞いたことがある。しかし、それでも気付かない距離とはどれ程のものだろうか。自分の畑の周りには目立った起伏も無く、多少離れていても人影があれば気付くはずだが。

「若いランドファーマー？もしかして人さらい！？」
ランドファーマーをさらう野盗がいるというのは噂で聞いた事があった。農奴として優秀なランドファーマーは目をつけられやすいとも。
もしかして、目の前の男はそういった人種なのだろうか。
「人さらいとは心外だな。まあ似たようなことを考えてはいるが。」
やはり物騒な人間のようだ。どうしよう、扉には自分の方が近いから、逃げる事はできるだろうけど。
そうやって、身構えるアイムを尻目にリュンは続ける。
「正確には人買いかな？賃金を払って、本人に労働して貰おうと思ってる。個人の労働力を対価に金銭を受け渡しするって点は人さらいと同じだろ？」
大分違う気がするが。それに、そういう事ならそれは人雇いと言うべきだろう。人買いという言葉に好印象を持つ人間なんて少数派なのだから。
「労働？ランドファーマーに目をつけてるって事はそれに関係する仕事って事ですか？」
「ああ、主にやって貰う事は農作業に近い内容でな、そういった事が得意な奴を雇った方が上手く行くんじゃないかと考えたわけだ。」
なるほど、それならランドファーマーを探しているという理由も納得がいく。
「でも若いって部分の理由にはなってませんよ。こういった仕事は経験が物を言うんだから、多少なりとも年配の方が効率的にできるはずです。」
「仕事内容だけの話ならな。だが仕事をする場所が若い奴の方が向いてるんだ。」
ふむ、年齢を選ぶ仕事場とは、かなり特殊な場所で仕事をするらしい。どうにもリュンという男は自分を雇いたい様子なので、その点を注意して聞きたいが。
（うん？そもそも、相手に雇って貰いたいのかどうかも決めて無い

のに、なんで仕事内容が気になってるんだ？もしかして僕、少し乗り気になってる？）
　自分自身の感情に困惑しているアイムであるが、リュンにはそれが伝わっていないらしく、構わず話を続けてくる。
「なんせ、否応無く国外に出てもらう事になるだろうからな。年を重ねてるとその点になかなか承諾して貰えないだろう？」
　なるほど、確かにそれなら若い年齢に限定して探しているのも理解が・・・。
「って、国外！？」
　思わず相手の目の前にある机に乗り出しながら、アイムはリュンを見た。
「ああそうだ、なんでそんな驚く？」
　確かに、少し驚き過ぎたかもしれない。
（けど、外の世界を見てみたいなんて夢を見ていたら、いきなりそんな話がくるなんて思ってもみないじゃないか。）
　アイム自身にとっては驚くに値する出来事なのだ。
「というか国外じゃないと意味が無いんだ。俺がやろうとしている仕事はな。」
「農作業の仕事なんて、どこの国でもあると思いますけど。」
　一次産業というのはどんな国でも人手不足があたりまえである。
「農作業に近いって言ったろ？つまりそのままの意味じゃないってことさ。」
「つまり変わった仕事をさせるつもりなんですね？」
　この男が怪しい男である以上、話の内容がまともな可能性の方が少ない。
「おいおい、随分な言い草だな。まあ普通では無い事は確かだ。お前は俺みたいな種族がどんな仕事をしているか知ってるか？」
　ツリストがどんな仕事を普段しているかを聞いているのだろう。
　それならば。
「一つの場所に定住しないのがツリストなんですから、それに合っ

た仕事でしょう？」
「そうだ、旅商人に冒険家、傭兵なんかも仕事にしている奴がいるな。」
「あと、強盗や盗賊、追剥なんかもしてるらしいですね、聞いた話じゃあ。」
　既にアイムは相手が何かを話すと、それを疑ってかかる事に決めていた。話の内容にこちらが惹かれる物があった以上、おいそれと聞き流す事もできなくなったのだ。
「辛口な表現ありがとう。まあ否定はしない。実際、旅をしていると、そういう事をしている奴等にも会うからな。」
　こちらは噂話程度のつもりだったのだが、本当らしい。この仕事内容もやっかいな物である事を考慮しなければならない。
「だがはっきり言って、まともな方も物騒な方も他人が先に手を付けてるって事には変わりないんだ。利益と損害を考えたら、前者の方はいきなり始めようなんて考えられんし、後者なんて言わずもがなだろ？」
「それって誰もした事が無いような事を始めようって話に聞こえてくるんですが。」
　となると、やっかいな仕事で間違いないようだ。
「そうだな、まさしくその通りだ。仕事を始めようとする時にデメリットが必ずあるのなら、その分メリットはでかい方がいいじゃないか。」
　まるでデメリットの大小は関係ないような言い方だ。自分には到底できそうにない。
「始めるとしたら、まず俺達ツリストの強みである、旅を繰り返すって点を考慮にいれた。だが、すぐ思いつくような仕事は先駆者がいる。なら俺達が普通やろうとは思わない仕事にまず目を当ててみようと考えた。」
「それが農業？」
「ああ、俺みたいなツリストがやろうなんて考えもしない仕事だろ

？」
当たり前だ。一ヵ所に定住しないってだけでも駄目なのに、こんな考え方をするような奴に農業は勤まらない。ひたすら地味な作業と、精神を擦り減らすかのような細目な努力があってこそ、農業というものを生活の糧にできるようになるのだ。
「旅を繰り返す。農業という仕事。この二つをキーワードにあちこちの国を回ったよ。そしてある事に気が付いた。」
話の確信に迫ってきたようでリュンはアイムを見てニヤリと笑った・
「ある事？」
だがこちらから見れば、聞き返して欲しくて仕方がないような顔に見えたので、仕方無く聞き返してやった。
「随分と非効率的な事をやってるなって思ったのさ。」
「なんですかそれ？農業従事者を馬鹿にしてるんですか？」
かなり頭に来る物言いだった。若いといってもアイムは生まれてこの方ずっとそういった仕事をしてきたのである。それを非効率などと言われては、あって無いようなプライドも傷つくというものだ。
「ああ、悪い。そういう意味じゃなくてさ、仕事をする上での技術さ。」
「技術？鍬の持ち方とか水の蒔き方とかですか？そりゃあコツはありますけど、そこまでの事かな。」
そんな物で商売ができれば、自分はそこそこの金持ちになっているところだ。
「それもあるが、範囲はもっと広い。どんな作物を育てるのか。土地はどのような状態が優れているのか。それぞれの国での気候の差は？それらの相性を本当に理解しているのか？そういった技術がそれぞれの国でブレがあるように思えた。素人の俺がそう感じるんだ。お前みたいに農業を仕事にしている奴が国外に出て、別の国を見ればそのギャップは相当な物に感じるだろう。」
確かにそうかもしれない。農業者は世界が狭いのだ。職人気質なところも多々あり、仕事を覚える上で教えられず、目で見て覚える

という事がまかり通る部分もある。なにせ子供の時からこういった仕事をしている者が殆どなのだから。教えずとも知らず知らずの内に覚えている事の方が多い。
「だけど、それが商売になるってのは疑問ですね。実際、隣のトム爺さんが育てる野菜は凄く長いって評判ですけど、真似しようなんて考えたことがありませんもん。」
「それはちょっと興味深い話だが、物事はその程度の事じゃあない。例えば昼間使ってた鍬、いったい何で出来ている？」
「鍬？そりゃあ木ですよ。先端だけは鉄で補強してますけどね。」
　そんな自分の言葉を聞いて、リュンはまたニヤリと笑った。どうにもこの男は言いたい事があると顔に出るようだ。癖なのだろうか？
「それをしてない国があるって言ったら信じるか？それとは逆に持ち手から先端まで全部金属で出来ている鍬を使う国もある。」
「それ本当ですか？どっちも凄く不便そうなんですけど。」
「そうだ、前者の国じゃあ金属は貴重でね、農具に鉄を使うって発想が無い。」
「じゃあ後者の国は金属資源が豊富なんですね、だから農具に木を使う発想が無い。」
なんとは無しに言って見たが、その発言にリュンは多いに頷いている。どうやら正解だったらしい。
「まあでも、どちらの国もそこまで金属不足だったり過多だったりするわけじゃない。ただ、この国よりも金属の生産量が少し違っているだけだ。ただそれだけの違いでこんな風に発想の違いが生まれたんだ。それが重要でね。」
　つまるところその発想の違いは埋める形で、その分出るであろう利益の一部を頂戴するという訳か。
「発想や技術の交換というのは昔から行われていた事だがな、農業や牧畜といった一次産業の間ではまだ大々的に行われていないのが現状だ。それでいて、作業内容自体は国事に複雑だ。複雑って事は外からの考えが入り込む余地が幾つもあるってことだ。」

「そこには商売になる可能性が複数埋まってるって事ですか。」
どこか詐欺師に騙されているような感覚がある。だが、リュンの言葉を信じる限り現実味があるのは確かだ。
「そう、あなたの言葉をすべて信じるって条件ならですけど。」
その点を間違えないようにしておきたい、この男とは今日あったばかりなのだから。
「おいおい、ここまで仕事内容を話してそれで全部嘘でしたってわけにもいかないだろ？」
そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ただ・・・。
「何か、何か信じる事ができる言葉が欲しいんです。正直に言います、僕はあなたの言葉に惹かれてる。若さって奴もあるんだと思いますけど、外の世界をずっと見てみたいと思って来ました。そんな仕事が突然舞い込むなんて、もっと浮かれても良いはずなんです。」
しかし、だからこそ、そんな話を信じるな、騙されるぞ。という考えが頭の中を過ぎってします。
「ふむ、大胆なのか臆病なのか良くわからん奴だな、君は。」
「下手を打てば一生に関わる内容です。そうもなるでしょう？」
ここからは自分の本音を話す事に決めたのだ。なら少しくらい自分の言葉に整合性が無くてもいいじゃないか。
「ああそうだな、なら俺は俺がこの仕事を始めようと決心した時の事を教えてやろう。」
昔語りでもするのだろうか。それで心が揺さぶられるような状況でも無いと思うのだが。
「そんなに昔の話じゃない、今日の朝の出来事だ。」
どうも考えた事が顔に出ていたようだ。それともただ単に自分の思考と相手の考えが偶然合っただけなのだろうか。
「俺は一人の少年を観察していた。ある噂が気になっていてね。」
その少年とは自分の事だろう。いったい何を話すつもりなのか。
「その少年は農作業を始めたんだが、どうにも変でね。」
「変？少なくともいつもと変わらず作業をしていたはずですけど。」

それは本当だ、この男が家の前に立っていた事以外は、今日一日、少しも変わった事は起きていない。
「ああ、君にとっては日常だっただろうが、俺にとってはとても可笑しく見えたんだよ。」
リュンは一拍置いてから再び口を開いた。
「随分と独り言が多いんだな、君は。」
!?何を言っているんだ、この男は。まさか・・・。
「どうにもランドファーマーは種族的にそうらしいな。一人きりの時に限って、ぼそぼそと独り言を言う。まあそうでなければ独り言なんて言わんがな。」
ずっと隠してきたはずの事だ、他の種族にその事をできうる限り話さないと。
「ある噂とは、ランドファーマーという種族の特性の事だ。なんでも大地と話せるそうじゃないか。最初は半信半疑だったが、今日、君を観察して良くわかった。君は一人で喋っていたんじゃない。ずっと大地に向かって語りかけていた。」
リュンはじっとアイムを見る。今日一日の観察とはまさにそのためにあったのだろう。
「僕らは地霊って呼んでいます。大地なんて大げさですよ。彼らはそこら中に沢山いるんですから。」
「ふん?」
リュンはアイムに次の言葉を続けさせるように相槌を打つ。
「地霊は僕らに、どうすれば自分たちが増えるかっていうのを教えてくれるんです。僕らはその地霊の言葉に従って、地霊を増やします。すると。」
「土地が越え、作物や動物が良く育つようになるんだな?」
この男は良く知っている。僕を観察する前から、随分と情報を集めていたのだろう。
「ええそうです。僕らは地霊と共存して他種族よりも、多く土地の事を知る事ができるし、それに地霊を増やそうと専念してると、不

思議と疲れないんですよ。どうにも彼らが力を貸してくれているそうで。」
「なるほど、ランドファーマーの種族としての長所は農作業が上手いのでは無く、地霊を見る事ができるという事か。」
だからこそ隠していたのだ。この能力の事は種族の者以外に知られたら、自分たちの長所を利用されたり、他種族からの優位性を奪われかねない。
「それが、僕に決心を促すための内容ですか？そこまで僕たちの情報を集めたからこそ、自分は本気だと信用させるために。」
こんどは自分がリュンと言う男をじっくりと観察する番だった。もうこの男の言葉を信用しないわけには行かなくなったのだから。
「そうだ、そっちの決心は出来たか？俺はもうここまで話したんだから、お前が相棒になってくれないと困るんだが。」
「・・・一日だけ。一日だけ待ってくれませんか？それまでには絶対返事をします。」
こうは言ったが、どう答えるかはもう九分九厘決まっていた。
「いいだろう。返事を聞かせて貰う場所はこの国の西側にある関所なんてどうだ？ここからなら半日もかからないだろう。必要な荷物で用意に時間が掛かる物は俺が用意しておく。お前は旅に必要だと思う物を適当にこの家から持ってくるといい、身辺整理も兼ねてな。」
そして、リュンという男にも自分がどう答えるかなど、わかりきった事だったようだ。

旅立つと決めたら、行動は早かったと思う。今までが住んでいた家や国だというのに未練もそんな感じなかったからだ。どちらかと言うと自分の中にある高揚感を抑えるのに苦労した。実際、昨日はほとんど眠る事ができなかった。
「でも、そうだね。これからは平凡な生活からは脱出できるかもしれないけど、平和な生活ともさよならすることになると思う。」

だが後悔は無い。後悔するほどの時間を生きてはいない。
「いったいどんな国に行くんだろうね。シライみたいな国か、もっと騒がしい国か。」
実を言うともう既に自分は国の関所にいる。平和なこの国らしく、番兵が一人もいない。ただ国と国との境目を示すための場所であり、一歩踏み出せばそこはもう違う国の土地だ。
「その一歩を踏み出せないんだよね。だって雇い主がまだ来ていないんだもの。」
一日待ってと言ったが、正確な時間を決めていなかたのに気付いたのは、リュンが自分の家から去った後だった。おかげで早朝には関所に向かい、それからずっとここに立っているという状況だ。あまり寝る事ができなかった原因の一つでもある。
「まあでも、あれだけ人を誘ってきたんだからさ。先に行ってるなんて事はないだろう。ないよね？」
そろそろ不安になってくる程の時間が立つ頃だ。もしや自分の夢はここでいきなり終わるのだろうか。そんな事を考え始めたアイムの目線が、関所からシライに向かう道へと移る。
「ああ、やっぱりまだ来てなかっただけじゃないか。来るのが遅いんだよ。」
そこには道の向こうからリュンが歩いてくる姿があった。
こちらに来るのが遅れた理由も良くわかった、彼は二人分はある旅道具を抱えていたからだ。
おそらく彼が自分で用意すると言った、時間が掛かる荷物だろう。素人の自分が時間を掛けず旅道具を用意できる筈が無い。つまり彼はアイム用の荷物をすべて用意してこちらに向かっていたのだ。
旅に慣れているであろう彼も、さすがに重そうに荷物を背負っている。ここで、彼の居る場所まで走り、荷物の半分を持ってやるのもいいかもしれない。
何故ならこれから共に旅をする相棒になるのだから。

一つ目の国で（1）

シライから大陸を西に向かえばヒゼルという国に着く。それ以上向こうは海になっており、この国は大陸の西端という位置にあると言える。シライからヒゼルに架けては大陸の北方側にあるので、正確に記すなら北西端の国だ。

大陸の北西側は半島のように大陸全体から迫り出すような形になっており、東側以外が海に囲まれた状態にあるヒゼル国は、外側から見ても用意に海洋国家である事を知ることができた。

「ここからは船で旅を続けるんですか？」

ヒゼル国の中央都市であり、第一の商業港と知られる町の正門に立つ二人の青年の片方が、もう一方の青年に話しかけている。

話しかけた側の青年はランドファーマーと呼ばれる農耕を得意とする種族で、アイムという名前の青年である。

「まあそうだが、その前にこの国で何か仕事を見つけたい。新しい商売を始めるんだ。その試金石としては必要だろうさ。」

アイムの言葉に答えた青年はツリストという旅を続ける種族のリュンという青年だ。

「商売ですか・・・。なんというか不安なんですけど。この国ってシライとはそれほど離れていませんよね。そこで知識を売るっていっても、売れるような知識があるかどうか。」

彼らは農耕や牧畜の技術と知識を売り歩き、商売とする事を目的として旅をしている。旅といってもアイムは3日前シライという国から始めたばかりであり、その彼を旅に誘ったリュンも、商売を始めたのはアイムと出会ってからである。

「仕事を探すのは俺がなんとかするさ、それを達成できるかどうかはお前次第だがな。ただ、そこで商売にならなければ、どこに行っても上手くはできんと俺は思うね。」

という事はいきなりここで旅は終了という可能性もあるわけだ。

アイムはそんな事を考えながら。正門の横にある衛兵の駐在所を見た。
彼らは今ここで手荷物検査を受けている。周りを海で囲まれており、唯一東側の陸路にある関所はほぼ素通りで行く事ができるという状況のこの国では、このように町単位で門を設け、旅人の監視をすることで自衛としているのだ。
「それにしても時間が掛かってるみたいですね、荷物検査。そんなに不信な物なんて入ってないんだけどなー。」
アイムは駐在所から目を離し、周りをキョロキョロと見ながら喋る。
（実際はそんなに時間なんて掛かって無くて、ただ僕が緊張しているだけなのかもしれないけどね。）
不安ではあるのだ。まだ短い期間だが、今まで暮らしていた場所を旅立って、知らぬ土地を歩くという行為に慣れてなどいないのだから。
「ああ、荷物もそんなに多くは入ってないはずなんだが。怪しまれる様な物と言ったら、護身用のナイフくらいだが、それくらいなら、だいたいの旅人が持っているしな。」
リュンも時間が掛かっていると考えているようであり、どうやら自分の感覚が変な訳では無いようだ。
そんな事を話している内に駐在所から衛兵の一人が首を傾げながら出てきた。いったいどうしたのかと聞く自分たちに衛兵は、荷物検査が遅れた理由について話し出した。
「いえね、ツリストの方は荷物に問題が無かったのですが、ランドファーマーの方の荷物に鍬が入っているんですよ。いったい何に使うんです？」
「おいどういう事だ。鍬なんぞ持って来いなんて、俺は言ったか？というかシライを出て三日間、お前はずっと俺にも内緒で鍬をその荷物の中に隠しもっていたのか？」

リュンが捲し立てるように話かけてくる。どうやら相当怒っているようだが、どうにも理由がわからない。
「いや、だって農業関係の仕事をこれからしていくんですから、鍬は必須道具でしょう。それになんて言うか寂しいんですよコレが無いと。なにせ長年付き添った相棒って奴ですからね。俺はこいつが圧し折れたとしても、共に旅をするつもりですよ。」
そう鍬はランドファーマーの友。いや命と一緒なのだ。こいつがあったおかげで、これまで自分は生きて来られたのだ。
「そんなもん、どこででも手に入るだろうが。それで門番にいちいち怪しまれてたら面倒この上ないだろ！」
「そんなもん？そんなもんって言いました？こいつを。なら話すしかないようですね、こいつと僕がどんな風にこれまで過ごしてきたかを。」
今この場でも鍬の握り手がしっくりと自分の手に収まってくる。リュンには教えてやらなければならないようだ、こいつがどれほどのものかを。
「いらん、そもそも農業関係の仕事つっても、長期間一ヵ所に留まるわけじゃないんだ。鍬どころか、土いじりする機会だってそんなにないだろうさ。」
なんという事だろう。ならここに自分が存在する意味が無いじゃないか。
「必要なのは発想だ。自分たちにあって、この国に無い。そんな発想を俺達は売り歩くんだ。」
「けど、そんな発想。この国に来てから一度も生まれませんが。」
そもそも自分は農家であって発明家ではない。
「まあ、いきなりそんなもんが生まれりゃあ苦労は無いな。とりあえず観察してみる事から始めてみろ。ただ、見るだけじゃあ駄目だぞ？しっかり、お前の得意分野の目線で見てみるんだ。」
得意分野。当然、農家としての視線という事だろう。もしかしたら、ランドファーマーとしての能力である、地霊が見えるという力

の事かもしれないが。
「けど、そんな目線で見てもやっぱり思いつきそうにないですよ。こんな石畳と海が続く町中じゃあ。」
アイムは町を見渡す。そこには、レンガ造りの家並みと、しっかりと整備された石畳が港まで続く、農業とは無縁に思える商業の町としての風景が広がっていた。
「うーん、そうだな、とりあえずは仕事を探そう。何の発想が無くとも、自分にできそうな仕事なら判断できるだろうし、ハッタリならかませる。」
まったく安心できそうにない言葉をリュンはアイムに喋りながら、すぐ近くにある屋敷へと歩いていく。
リュンの歩く先にある屋敷は、非常に大きな扉があり、扉は開いたままになっていた。そこへは多くの人が出入りしていようだ。扉の横には水色の生地と金色の縁で彩られたタペストリーが掛かっており。その中央には鱗が無く、妙に胴体の長い魚の絵が描かれていた。
「仕事を探すって、その屋敷に何か仕事の当てでもあるんですか？」
「有るとも言えるし、無いとも言えるな。ああ、仕事を探すには格好の場所ってのが一番正しい表現だ。」
そうやってリュンは屋敷の中に入っていく。それを追うようにしてアイムも歩き出すが、疑問が晴れたわけで無かった。
「結局なんなんですか？ここって。」
「扉の横の絵を見なかったのか？あれは海に棲むドラゴンの絵だ。つまり自分たちは海と関係深く、強力な組織だって主張している絵なんだ。そんな絵を飾って文句が出ない屋敷と言えば、この国を牛耳る商船組合の屋敷しか存在しないのさ。」
商船組合とは、大型船を保有しており、海運業を営んでいる者達が作りあげた組織である。ヒゼル国内においてこの組織に所属していない商人と言えば、モグリか外来人、もしくは余程、商業利益と

規模の小さいものしか存在しない。つまり、ヒゼル国内における利益というもののほとんどがこの組織に帰属するという、強大な組織構造を有している。
「それがどれほどの強大さかと言えば、ヒゼル国自体が商船組合が作り上げたものだと言うことだ。国の主権は商船組合にあり、国内でのヒエラルキーは商船組合にどれほど貢献してきたかによって決まる。」
屋敷に入るなり案内された待合室で、設置された椅子に座りながら、リュンは現在いる場所の説明をアイムにしていた。
「つまり商船組合がこの国の王様ってことですか？」
アイム自身、その説明は有りがたい物であったので真剣に聞いていた。
「まあな、だが個人として想像するなよ、組織そのものが王なんだ。例えば組合で一番偉い奴が居たとして、そいつが王様みたいな権力を持ってるわけじゃあないんだ。」
「へえ、でも僕らはそんな凄い組織の屋敷に居ますけど。それほど凄いって感じないようないんですが。」
周りを見渡すと、そこには自分達以外にも多くの人物が椅子に座っており、それぞれ種族や立場もバラバラに見える。だが、どれもそれほどの地位を持った様には見えず、とてもいま説明されたような組織が所持する屋敷に居るとは思えなかった。
「強大な組織という事は、やる事も手広いのさ。実際、ここも商船組合の本館じゃなく、いくつか権限を移した別館でね。移された権限がなんなのかと言えば、商船組合関係の仕事や依頼を、各人の立場や経歴に合わせて斡旋する職業紹介場としての権限ってところだな。」
「なるほど、通りで周りに座ってる方々も、僕らと似たような雰囲気をしてると思いました。」
要は皆、職無しって事か―
自分でも失礼な事を考えているのはわかるが、自分自身そのよう

な立場なので別に罪悪感は覚えなかった。
（旅人なんて、職無しより酷い立場の場合もあるしね。）
事実、自分達を他人から見れば、そんな風に見られるかもしれない。
「しかし仕事を探すって、雑用とかそんな感じの仕事って事ですか？ここで農業関係の仕事なんて紹介してくれそうに見えないんですが。」
何故ならここは、商船組合の仕事案内をしている場所なのだから。第一、あったとしてもただの旅人の自分達が、望むような物を紹介してくれる可能性は低い。
「まあ、そこらは俺がなんとかするさ。口は達者な方だからな。」
「要は出任せとハッタリでなんとかするという事ですか。」
実際それ以外に方法は無さそうではある。
「ここは係員と直接話をして斡旋する仕事を紹介する場所だ。そんなものでもなんとかなるさ。」
そうこうしている内に自分達の順番が回ってきたらしく、係員が待つ部屋までの案内人がやって来た。

案内人は仕事案内の係員も兼ねているらしく、部屋に入ると目の前にある机の向こう側へと座り、その対面に自分達が座るように促してきた。
「えー、それではリュンさんとアイムさんでしたか。お二人は旅を続けている外来人ということですので、当方としては、港での運搬作業などの短期でできる力仕事を依頼したいと考えています。お勧めは商業船内での雑用などですね、お二人はこれからも旅を続けるのでしょう？運賃が浮く上に旅費も稼げて一石二鳥ですよ。目的地へ向かう船に乗れるかどうかについては、こちらが調整しますのでご心配なく。」
自分達が座ると同時に、一斉に言葉の雨を浴びせかけてきた係員。どうも案内される仕事がほぼ決まっている様子で、ここでの話も事

務作業の一部といったところだろう。
（こんな調子じゃあ、仕事探しなんて無理なんじゃあないかな。）
まあ仕事の紹介はしてくれているから、食うに困るという状況にはならないだろうが。
「いやあ、たかが旅人にそんな仕事を紹介してくれるなんて、大変喜ばしい事なのですが、こちらとしては一つ提案があるのです。あなた方組合にとっての利益になるかもしれない、そういう話なのですが。」
係員に変わり、今度はリュンが口を開きだした。しかし、組合にとっての利益なんて、随分大きく出たものだ。彼の言う、出任せとハッタリとはこういう物か。
「我々にとっての利益ですか。大変失礼ですがそのような話を聞き入れる余裕というものは、当方としては持ち合わせていないのですよ。正直なところ、我々は現在特定の仕事に就いてらっしゃらない国民や、当面の費用を必要とする旅人に仕事を紹介する以外の権限というものを、組合本部から与えられていないのです。組合の利益や取り引きといったものに対する話であるのであれば、それ専用の窓口が別の場所にありますのでそちらをご利用に。それでは。」
おっと、いきなり話が終わりそうな勢いだ。おそらく応対相手が仕事案内以外の話を切り出して来た時のためのマニュアルというものがあるのだろう。リュンはどうするのだろうか、付入る隙はあまり無さそうなのだが。
「いや、話を聞いてくれるだけでいいんです。それというのも、こちらの技能についての話ですので、仕事紹介にも無関係という訳ではないのですから。」
なるほど、係員本来の仕事にも関わるというのなら、リュンの話を聞かないという事もできないだろう。
「ふむ、そちらの技能ですか。確かにそれが特殊なものであるのでしたら、こちらが紹介する仕事にも色を付けさせて頂きますが、それだけの事ですよ？その技能がどのようなものであれ、やはりこち

らとしては仕事案内以外の事はできませんので。それでもよろしければどうぞ。」
係員の態度は変わらないままであるが、話自体はすぐに終わるという段階からはある程度離れたようだ。
「いやあ、ありがたい話です。本題の我々の技能についての事ですが、それは農作業に関する知識と能力の事でしてね、私の隣にいる彼は生粋のランドファーマーなのでそういった能力が非常に高いのですよ。」
とうとう、こちらの能力に関しての話が出てきた。実際そこまで自分の能力に自信は無いのであるが、ここでその事を言う訳にも行かず、アイムは冷や汗を隠すのに苦労していた。
「農作業ですか？それは確かに仕事を案内する上で重要な技能と思えますが。ところで、我々がどのような組合であるかはご存じで？」
確かに商船組合が案内する仕事で、農業技能を発揮できる仕事というのは少なそうである。
「ああ、いや、当然商船組合についての知識はある程度こちらにもあります。だからこそ我々の力が必要なのでは無いかと考えたのです。」
どうも話が噛み合っていないように思える。リュンには何か考えがあるようだが。
「私たち商船組合側としましては、必要性を感じているという事は特に無いのですがね。組合の外部である、あなた方にはそれがあると？是非聞いてみたいものですね。」
係員の意見に同意したくなり、頷きかける頭を止めながらアイムもリュンを見る。
「技能に対する需要の無いところにそれを生むというのは、当然我々にも不可能です。ですが、そちらは必要性を感じていないという点で嘘をついてらっしゃる。我々はあなた方組合に対して、ある程度は知っていると言いましたよね？それは、農業に対する知識を持った人物を組合は現在必要としているという状況についても同様で

してね。」
場の雰囲気が変わったような気がする、リュンの言葉で係員の表情が強張ったからだ。一方でリュンはニヤニヤとして、以前、ランドファーマーの能力について自分に話した時のような表情へと変わっていく。そういう表情は余計な諍いを生みそうなので、やめたほうがいいと思うのだが、本人はやめる気がなさそうだ。
「というと？」
饒舌というか事務的であった係員の言葉に感情が籠っていくのを感じる。どうにもリュンという男は話し相手の感情を揺さぶるのが上手いようで、彼が係員と直接話ができるという事だけで自信を持っていた理由がなんとなくわかる。
「おっと、これ以上は組合の利益に関わる話になりますね。仕事案内のみを権限とするこの場では関係の無い話でした。すみません、忘れて下さい。」
なんて嫌な奴だろう。先ほど係員に言われた嫌味をそのまま相手に返すなんて。突然、慌てた表情になる係員が可哀そうになってくる。まあ、ちょっとだけ、ざまあみろと自分も感じたのは内緒だが。
「え、いや、確かに私にはそのような権限しかございませんが。ですが、少々お待ち頂けますでしょうか。先ほどの話について権限を持った人物をこちらへ連れてきますので。」
係員がどんどん慌てだすのを感じる。それと正反対にリュンの顔が生き生きとしだすのも。
「ええ、いくらでも待ちますよ。あなた方は私の話を聞いてくれている側で、我々は聞いて貰っている側なんですからね。」
リュンの言葉を聞いて、係員はすぐこの部屋を小走りで出て行った。どうやらリュンの取引は成功した様子だ。
それにしてもこの男はなんという奴なのだろうか。
「うん？どうかしたか？」
ついリュンを見てしまったアイムであるが、リュンはどうだ、やってやっただろう。という表情をアイムに見せつけながら。余裕を

持った様子でそう喋るだけであった。

その後の展開と言えば、係員の上司であろう人物が部屋にやって来て、リュンが勿体ぶっていた情報を話し、そのまま仕事の契約といったものだった。随分と早い展開だったと思う。

ちなみに現在は組合が用意してくれた宿に泊まっている。こちらも随分と良い待遇である。

「それで、俺達がする仕事がどんなものかはわかったか？」

「いいえ、まったく。」

係員の上司とリュンが会話を始めたあたりで、会話を聞く事を辞めたせいである。ちなみに、場の胡散臭さに嫌気が差し始めたのが会話を聞かないようにしていた理由である。

「掻い摘んで話すとだ。組合は現在、この国で農家を専業としている奴等と対立している。組合側としてはこの対立関係を穏便にかつ、組合有利なように解消したい。そこで仲立ちする人材を必要としているが、農家側が全員、組合を敵視しているのが現状なので、組合側に話し合う上で必要な農業知識を持っている人材がいない。ならば外部から農業知識を持つような人材を雇って、農家達との交渉役にしようと考えたって訳だ。」

そしてその交渉役に選ばれたのが自分達という事だろうか。確かに農家との交渉に必要な知識程度なら自分にはあるだろう。

「疑問点が二つあるんですけど言ってもいいですか？」

「なんだ？」

「一つ目は、組合が農業知識を持った人材を探していたのにそれを隠していた事です。」

確か係員はリュンが農業知識を持っていると言った時、それを必要としていないと言ったはずだ。そもそも、そのような人材を探しているのに、仕事案内では紹介しない事も疑問である。

「その点に関しては、対立しているといっても国内での話だからな。身内の恥を外部に晒したく無かったって事だろう。どうせ、秘密裡

に他国から知識を持った人材を探して交渉役にするつもりだったんだろうさ。」
「だったら僕達に仕事を頼む事も無いと思うんですが。」
身内の恥を晒したくないのなら、なおさら自分達にそういった仕事を紹介しないはずだ。
「俺達が国内の対立を知らなかったのならそうだったろうな。だが、たかが旅人の俺達がそれを知っている以上、隠したところで、自分達の対立は俺達経由で外部にバレてしまう可能性が高い。なら、秘密を知ってる俺達を雇って身内にしてしまえば、秘密がバレる可能性も低くなる。丁度いい事に俺達は組合が望む能力を持っているのだからなおさらそう考えたんだな。」
となると組合側にとって自分達はあまり有り難くない存在になるのだろうか。まあ、仕事を案内されたというよりもぎ取ったと言った方が正しいのだから、仕方の無い事だろう。
それより、今後の行動には多少注意が必要になってくる事を考えた方が良さそうかもしれない。組合側が支援してくれる状況ではまず無いだろうから。
「じゃあ、二つ目の疑問についてです。そもそもなんで組合が農家と対立してるんですか？」
いくら商船組合が海洋系の仕事ばかりしているからと言って、農家を敵に回す必要も無いだろうに。
「そうだな、とりあえずこの国の商船組合が国自体の創設に関わってるって話はしたな？」
確か待合室で話した内容だ。それくらいなら覚えている。
「商船組合が王様なんでしたっけ？」
「概ねそんな感じだな。だから、当然この国では皆組合に貢献したがる。それが自分達の利益になるんだからな。」
まあそうだろう、わざわざ国の創業者に喧嘩を売るより、媚びを売ってお零れに預かった方が良いに決まっている。そもそも、自分達からしてそうなのだから。

「そんな状況ならまず選ばれる仕事は組合と関係深い仕事だ。そちらの方が組合自体に受けが良い。農業なんかの商船業とは関係が薄い仕事ってのは、そういった組合が好む仕事を選べなかった奴がする余り物。そんな考えが国中に出来上がってるのさ。」
なんという事だ。なら自分みたいな元専業農家はこの国では仕事を選べなかった搾りカスとして見られるという事か。
「急にこの国が嫌いになりましたねー。」
「お前にとってはそうでも、商船組合にとっては都合のいい構造さ。それが嫌なら国を出ていけばいい。ここは国外に出ていく為の方法がいくらでもある。というのが商船組合側の言い分なわけだ。」
当然それで納得できるわけが無い。特に農家なんて普通は土地に執着する物じゃないか。
「それでも当初は上手く行っていた、商船組合側が多数派だったからだ。だが、組合が大きくなればなるほど、組合と直接関係無い雑多な仕事が増えてくる。それは不満を持つ側が増える事と同義だ。さらにそれにある問題が拍車をかけた。」
「ある問題？」
「お前はこの国に来てから組合員を何人か見ただろ。」
確か、この町の門番に仕事案内の係員、話は殆ど聞かなかったがその上司、あと組合の屋敷でも何人か見たような気がする。
「全員、結構特徴的な外見してたろ？」
「みんな耳が長く尖ってましたね。」
耳が長いだけなら、リュンもそうだがツリストの耳は尖ってはいない。尖っているのはエルフという種族だ。
「おおよそ、この国で商船組合に直接関係する仕事や、貢献度が高い仕事はエルフ族が指揮している。これは当初、商船組合を立ち上げたのがエルフ族だったというのが理由だが、もう一つに彼らがエルフの中でもシーエルフと呼ばれる種族であるという事に関係している。」
シーエルフとは確かエルフ族の一種であったはずだ。エルフは周

りの環境に対して常に影響を受けやすい種族であり、一所に住み続ければ、たった数世代で子孫の肉体に環境に対する適応できるような特徴が現れだすと聞いた事がある。
　そしてその変化が海に適応する方向に向かったのがシーエルフであるとも。
「彼らの外見的特徴の一つに指と指の間の水かきなんかもあるな。当然泳ぎが得意になる。短時間なら水中で呼吸ができたり、船上でのバランス感覚も優秀らしい。こういったものが個人の才能だったら良いが、種族としての能力になってくると話が別だ。どうやったって他の種族じゃあ太刀打ちできない。組合はそんな能力を重要視する。そして組合にとって利益の大きい仕事はシーエルフに任される事になる。」
　通りで組合員がエルフばかりのはずだ。これじゃあ他の種族は碌な仕事に就いてないのではないだろうか。
「種族が優遇されているんじゃなくて能力で格差が付けられたんじゃあ、どうしようも無いですよね。」
　文句を言いたくても言えない状況になってしまう。不満を発散する機会が無いのだからそれらはどんどん心に溜まってくる。
「一応能力中心に人材を選んでいるんであれば、そういった不満も抑え込む事が普通はできるんだが、その能力で選ばれるのが単一種族のみとなると、不満を抱く側は組合に選民思想が蔓延ってるんじゃないかと勘繰りたくなってくる。結局、両者の対立は外部からの助けが必要なくらいまでは深くなっていたってことだ。今回は国内農家との対立だが、他にもいろいろと問題があるんじゃないかね、この国は。」
　それでもある程度は組合が隠し通せている以上、それが表面化するのはまだまだ先の事かもしれないが。
「そういえば、組合側は隠していた農家との対立ですけど、良く知ってましたね。何か情報源とかあったんですか？」
　この町に来てからは別行動をしておらず、自分が知る限りは情報

を集めていた風でも無かった。もしかしたら前もって知っていたのかもしれない。
「情報源？そんなもんは無い。」
「え？じゃあどこで組合の内情を知ったんですか？」
やはり前から国の情報を知っていたという事だろうか。
「前もって言ってたろ？出任せとハッタリでなんとかするって。組合員に農作業についての話を振った時、何故かそういった仕事を紹介する姿勢を見せてくれなかったんでね、いくら商船組合だって農業についての仕事なんて単純作業が多いんだから何かしらあるはずだろ？不自然に思ったから、組合員にカマをかけてみたら、上手い具合に乗ってきてくれたってところだ。」
「という事は、その後、組合員の上司と話をしていたのも全部、出任せだったって事ですか！？」
いくらなんでも無茶苦茶だ。どんな神経をしていたらそんな事ができるのだろうか。
「相手の言葉が聞こえなかった時、適当に相づちを打って会話を続ける時があるだろ？その要領だ。へたに知識を持って話すより、上手く会話できるぞ。」
どうやら非常に図太い神経の持ち主である事がわかった。
「でも、それでもし失敗してたらどうするんですか？」
「その時はさっさと町を出ればいい、信用なんて俺達みたいな旅人には最初から無いようなもんだからな。痛手にはならないだろうさ。」
あまりにもふてぶてしい事を言うリュンにアイムは頼りにすれば良いのか、不安に思えば良いのかよくわからない心情のまま、今日一日を過ごす事となった。

一つ目の国で（2）

鼻に潮風の匂い漂ってくるのに気が付き目が覚めた。この匂いのせいか海を泳ぐ夢を見ていた気がする。体がまだその気分に浸りたいのか、このままベッドで微睡んでいたい心持ちなのだが、今日は組合の仕事がある日だったのでそのまま寝ているというわけにはいかない気分でもあった。

この宿は組合が用意してくれた宿だ。部屋ごとに鍵があり、大きさもなかなかのものだった。自分が寝ていたベッドも上質とまでは行かないが、清潔感があり、旅で野宿する時の寝袋などとは月とスッポン程の違いだ。

たかが旅人にこんな宿を用意してくれる組合とは、それほど裕福なのだろうか。例えその裏に何か隠された意図があるとしても、自分達にとっては破格の持て成しだった。これでは否応無しにプレッシャーが掛かってくる。

頼りになるかならないか、良くわからない相棒は昨夜、話をしてから部屋に備え付けられた安楽椅子に座りながら寝ている。ベッドは部屋に二つ用意されているが、彼はそのベッドでは寝苦しいと、そちらで体を休めている。反対に野宿をしていた時は、結構ぐっすり寝ている雰囲気があったので、要は貧乏性という事だろうか。

「もう起きたのか？」

どうやら自分が起きる物音でリュンが起きたようだ。安楽椅子から少し背を起こし、自分に話しかけきた。

「なんと言っても初仕事ですからね。柄にもなく緊張してるんですよ。」

本当の事だ。体がまだ睡眠を求めているのに、眠る気になれないのはそのせいだ。

「まあ今回は組合と、それに不満を持つ農家との仲裁だ。口先の技術が物を言うから、ほとんどは俺の仕事だよ。お前は俺が知識を必

要とした時に何か言ってくれればいい。初仕事だって言うのなら、それこそ、そこまで高望みしていない。」
情けない話だが、その言葉に少し安心してしまった。所詮自分なんて、旅を初めて数日しか立っていない、新米とすら言えない旅人なんだと自覚してしまう。
「でも仕事は仕事でしょう？失敗したら、被害が出るのは自分達だけじゃない。」
組合側や交渉相手側にも被害がでる。別に相手の心配をしているわけではなく、被害がでた結果、自分達に対して相手がどのような態度を取ってくるのか、それが心配なのだ。
「俺達がするのは交渉事だぞ？それには１００点満点みたいな結果は無いが、０点なんて結果もない、成功や失敗なんて両極端な結果にはならんだろうさ。心配するならその後の報酬についてだな。これに関しては幾つか要求案があるが、まあそこらへんが今回の仕事の結果次第ってだけさ」。
そうか、所詮自分達は旅人なのだ。仕事の報酬は気にしても、仕事自体にそこまで責任を感じる必要はないのか。
「それじゃあ丁度二人とも起きてしまったんだ。朝飯を食ったら、組合が指定した交渉場に向かうとするか。少々早いが印象が悪くなるという事もないだろう。」
そう言って、リュンは椅子から完全に立ち、荷物をまとめ始めた。大した量では無いが自分の分もやっておこう。仕事がどんな結果に終わろうと、この部屋に戻ってくるという事は無いのだから。

組合が指定した交渉場は町の中心近くに位置する大きな広場だった。広場には多くの椅子が扇状に置かれ、組合と農家達との交渉が始まるまで時間はまだあるが、その椅子には既に何人かが座っていた。
「交渉って閉ざされた密室とかでするものだと思ってたんですが、こんな所でするんですね。周りから丸見えだ。」

実際、広場の周りには交渉を見に来たであろう住人が、疎らではあるが集まっていた。
「組合の伝統でな、自分達の組織運営は出来る限り公開していく事にしているらしい。」
「随分と公平なんですね、昨日下がった評価を少しプラスしてもいい気分になりました。」
まあそれでも農家を冷遇する組合に対して良い印象は抱く訳が無いが。
「組合側の余裕なのさ。交渉といっても始まる前から組合側が優勢だからな。組合は農家が居なくても存続できる上、農家達は組合に自分達の優遇を求めて交渉しているって事はそういう事だ。」
ふむ、なら自分達の仕事も組合側が用意した農家として、ある程度の助言をするだけで上手く行くかもしれない。
「でも、こんなところで交渉をするって事は組合側としても交渉が不利になる訳にはいかないんじゃないですか？」
負けたらそれだけ組合の権威が落ちる事になる。自分達で交渉を公開している以上、言い訳もできまい。
「どうかな？農家側の交渉が上手くいけば、組合側が譲歩する形になるが、それは優位な立場にある側がすると寛大さを示す事と同じになるのさ。実際、組合側だって一方的に農家達を負かそうなんて考えていないのさ。多少、農家側の意見を飲もうと考えたからこそ、この場が開かれたんだからな。」
「でも組合側だって僕達を雇ったんですから、そうそう相手に譲歩するつもりも無いんじゃないですか？」
相手側の知識を知ろうとするのは、相手と対等に渡り合いたいからだろうに。
「逆に俺達旅人を雇ったくらいで開かれる場だったんだ。ある程度の交渉をする努力をしたという格好を見せる必要がある。だが、それ以上の事はするつもりも無いってところじゃないか？」
大した自信だと思う。そこまで組合と農家達との立場は差が広が

っているのだろう。
「まあ、それほど組合側も余裕がある訳じゃないだろうがな。」
「なんでです？聞いた限りじゃ、圧倒的に組合側が有利じゃないですか。」
むしろ農家側が不憫になってくるくらいなのに。
「忘れたか？組合はそもそも農家達との争いを外部に隠すつもりだったんだぞ？こんな場所で交渉するのは組合側だって本意じゃないんだろうさ。」
「ああ、そういえば、もともと内々で処理するつもりだったんでしたっけ。ところが、とある旅人の出任せに騙されてこんな事をするハメになってしまったと。」
たかが旅人に知られてるくらいなら、もういっそ見世物にしてしまおう。といったところだろうか。
「組合側も不憫にな。ここまでやったら、どんな結果でも決着付けるしかないだろうに。」
「そうですねー。ハッタリ野郎は恨まれてるかもしれませんねー。」
こんな状況になってしまった原因の一つが同情する権利なんて無いのである。
「言っとくが、どう見てもお前も共犯だからな。こうなったら、とことんまでやってやろうじゃないか。農家達を泣くまで追い詰めてやろうぜ。」
「農家と敵対なんて元農家としては不本意なんだけどなあ。」
まあ、ハッタリ野郎の相棒にもそんな事を言う権利は無いのだろうが。

「我々は自らの仕事の対価を正当に要求しているだけだ！」
農家側の代表者らしき人物が広場で声高に叫んでいる。交渉が始まってしばらく経つが、農家側の要求は特に変わった様子を見せず、組合側に自分達の立場向上を求めるというものみを訴えている。
「こちらとしては正しく評価しているつもりなのですがね。もしあ

なた方が現状より、報酬をさらに多く要求するのであれば、生産量さらに上げるか、農作業の能率化を図ればよろしい。」
一方、組合側の返答は要約すると、お前たちの要求なんて聞けるかというものである。これも、交渉開始当初からまったく変わっていない方針で、ようするに話し合いは平行線を辿っていると言っていい。
さて、そんな交渉場に組合側の仲介役として雇われた自分達はというと。
「始まってから一切、発言の機会が無いんですよね。」
交渉は両団体の代表者が互いの意見をぶつけ合うだけの状態が続いており、他の人間は静観するか野次を飛ばすかのどちらかであった。
ちなみに前者は組合側が多く、後者は農家側に多い。
「まあ交渉の大半はお互いまったく進歩が無い事を確認する作業みたいなもんだからな。俺達の仕事は両者がそろそろ何がしかの決着を付けたいと考え始めてからだ。」
要するに話し合いに飽きが来たら、まとめ役として出てこいってところか。
「じゃあ、結構重要な役かもしれませんね。今後の方針を左右しかねない立場でしょうし。」
「農家側にとってはそうだな。だが組合側が農家側の要求を拒んでいるのはポーズだからな。別に要求を飲んでしまってもいいって立場だから、まあ俺達がどんな結果を出そうともなんとかなる。」
そう言えばそうだったか。組合側にとって自分達はお飾りみたいなもの。そう考えると癪に障るが。
「それで、どっちに付く？」
「え？どっちに付くって当然、組合側でしょう。僕達の雇用者ですよ？」
「さっき言った通り、その雇用者はどっち有利に転んでも自分達の権威を守れればいいという考えだ。だったら、与えられた裁量の範

囲で好きにやってしまおう。そのほうが楽しい。」
　楽しいときた。せめて自分だけはこの仕事が組合側から貰える報酬のためのものである事を記憶しておきたい。
「で、どっちだ。」
「そうですね。雇用主は組合側ですけど、個人的に好きになれない感じがするし・・・。」
　さてどうしたものか。迷いながらアイムはまだ言い合いを続けている両代表者を見る。
「あんたたちはいつもそうだ！自分達の判断が正しい。不満があるのは怠慢の証拠だとばかりに言う。だが実際はどうだ！」
　農家側の代表者は当初からのエネルギーを維持し続けているかのごとく叫び続けている。
「まるで我々の采配に不正があるかのようにおっしゃりますが。それこそ言いがかりですね。我々は組合員に対して公平に対応しています。」
　そう反論する組合の代表者は少々疲れた様子である。まあその嫌味たらしい喋り方は幾分も衰えていないが。
「ならば、お前たち組合側に座る者達はなんなのだ！そのほとんどの種族がシーエルフでは無いか、これは組合に意図的な選択がある証拠だ！」
「それは純粋に能力で選んだ結果だと何度も申しております。あなた方が言う意図的な選択とはその程度の事ですよ。」
「その能力が種族に由来するものであるのなら、それはより差別的ではないか！」
　話しは平行線どころかお互い反発し合いながらもまだ続いている。こんな話がいつまで続くのか。交渉開始の頃から観客として集まり始めた住人達もちらほらと離れ始めている。
「そちらがそう思っているだけでしょう。我々は種族によって対応を変えた事など、一度として無い。その証拠に今、この交渉の場に置いても、あなた方と対等に話し合うためにシーエルフでは無く農

業知識を持った者達を呼んだのですから。」
　自分達の事だろう。話に出てきたと言う事は、そろそろ発言の機会がやって来たのかもしれない。
「ならば、ここで話すべきはその者達であってお前たちシーエルフでは無いはずだ！」
「ええ、ええ。最初からそうするつもりでしたよ。ですが、あなた達の我々組合に対する考えが非常に偏った物だったので、その改めのために少々、回り道をした程度の事ですが。」
　おたがい、嫌味を言わないと話を進められないのだろうか。そんな事をアイムは考え始めていたが、自分達に関する話なので聞き流す事もできなかった。
「それでは交渉役の方、出てきて下さい。これからは、あなた方が組合の代表として話してもらいます。」
　ついに自分達の出番が来た。席を立ち、広場の中心へと向かう。当然、隣に座るリュンも共にだ。
「えー、今組合に紹介された、ツリストのリュンと、隣はランドファーマーのアイムです。各国を回り、旅を続けているような者ですが、この場で紹介されたように農業に関する知識や技術についての商売もしています。」
　広場の中心に着いたリュンは農家側を向き話し出す。この話し方だと、自分達は長いこと商売を続けているように聞こえるが、実際には今回が初めての仕事なのでペテンである。
しかし、嘘は吐いてはいないのだから、バレても問題無い。
「私はツリストとして旅の先導や、各国でのガイド、交渉を役割としており、隣のアイムがランドファーマーらしく、農業に関する説明などを行っています。ですので、主に話すのは私ですが、専門的な内容ではアイムが交渉していきますのでご了承を。」
　ここまでは農家側からの野次は無い。まあ立場の説明なのだから有っても困るが。
　むしろ自分がランドファーマーと紹介された時、少し興味深そう

な声が上がったくらいである。そういえば、農家側には自分と同じ種族は居ない。この国にはランドファーマーの農家は居ないのだろうか。

「それでは、これから組合側の人間として、あなた方に対する交渉を始めたいと思います。あなた方が求める、農家その他の仕事に従事する者への立場向上に関してですが、客観的に見て、それを全面的に組合が飲むというのは不可能に近いものです。」

交渉場の中心でリュンが続けて喋る。かなり流暢なものであり、少なくともこれからに交渉を無難に進める事ができそうな雰囲気がある。

「ふん、新しい交渉人が来たと思えば、言っている事は同じではないか。そもそも組合側の者でありながら、客観的とは随分と矛盾した表現を言う。」

相手側の代表は変わらず話を続けており、主張している事もまったく同じ。このままでは、組合側の交渉人が変わっただけという事になりそうである。

「いえいえ、こちらとしてはあなた方の言い分も、もっともな物であるとは思うのです。自分達の立場の向上を望むのは、むしろ仕事に対して貪欲な証拠。そしてあなた方の立場も客観的に見て、他の仕事より不遇に扱われているのは明白です。」

という訳で方針変更が行われる。当初予定した通りではあるが、農家側に対してある程度妥協する方針を取るようだ。

「ほう、我々の要求に対して異存は無いという事か？ならば組合側がそれを飲め無いのはどういう訳だ。」

「組合を組合たらしめている物はその名の通り、商船業であるという事です。あなた方は自分達の立場を不遇と言うが、それは商船業を優遇した結果起こるものであり、その優遇を無くしてしまえば、組合は組合で無くなる恐れすらでてくる。」

言っている事は組合が行っている不均衡の正当化なのであるが、ここまでざっくり言われると、農家側もつい納得してしまうという

ものだ。
「ならば我々に現状を認めろと？今ある立場を続けて行けと言うのか？」
「それをしてしまいたい。というのが組合側の正直な考えです。しかし、それではあまりにも差別的だ。ですので、あくまで現状、職業差の不均衡を維持しつつも、あなた方の立場の向上を組合としては図りたい。」
職業差別があると認めてしまっているわけだが、もうこの場では問題点にされる事は無いだろう。
「ほう、現状を現状のまま、我々を満足させる案があると？」
なぜなら、農家側はもう自分達がどのような提案を組合側がしてくるかを争点にし始めているのだから。
「ええ、それは商船関係の仕事において、シーエルフ以外の種族に対して、種族的な能力的な不足を考慮に入れつつ、仕事紹介の際、種族差の分だけ他種族を優遇する。というものです。シーエルフ以外の種族に対して、優先枠をある程度設けると言えば、理解しやすいでしょう。」
結局、これが組合側の予定していた考えである。交渉人としての仕事を紹介される際、この案を組合側の最大限の譲歩として、農家側を納得させて欲しいと依頼をされていたのだ。
実際、組合内では商船業を扱う団体へ、この提案は既に通しており、了承するという旨の返答を幾つかの団体から貰っているのが現在の状況である。
つまり組合にとってこの交渉は、どれだけ効果的に農家側にこの提案を聞かせるか、というものなのである。
「ほう、確かに我々にとってそれはチャンスと成り得るものだ。だがその優先枠というものは、どれほどの範囲で与えられる事になっている？もしそれが、最低限のものであるのならば、我々はその提案に納得しかねるが。」
そう言う農家側であるが、内心は組合側の提案を既に飲むつもり

であろう。内容が自分達がどれほど優遇されるかという物に変わっているのだから。
「それに関しても、組合側に提案があります。」
「ふむ、それはどのような？」
さて、そろそろ自分の出番だ。
「あなた方は今まで農作業に従事して来た訳です。ならば、それによって組合が得たであろう利益をこの場で我々組合にアピールして欲しいのです。我々がそれに共感すれば、するほど、組合員の方々があなた方を優遇する気になる事でしょう。専門知識に関してはご心配無く、そのために私の相棒がいるのですから。」
ここまでは予定通り、リュンが危なげなく進めてくれた。組合側も自分達がある程度依頼を遂行している事を理解してくれている事だろう。そしてここからは自分の仕事、農家側の意見を自分がどのように返すかで、今後の組合と農家達の方針は大きく変わっていく事になるだろう。

「我々がこれまで、どれほど組合に貢献してきたかというなら、この国がどのような位置条件にあるかという事を見れば理解してもらえると思う。」
組合の代表やリュンに向けて声高に叫んでいた農家側の代表が今度はアイムに向けて話しを続けている。
既に交渉場の中心に立っているのはリュンでは無く、自分であるのだから当たり前だが。
「それは、この国が海に囲まれた半島であるという事でしょうか。」
アイムはこのような場で発言するというのは始めての経験である。しかし、思ったよりも緊張していない自分に驚いていた。
「その通りだ。海に面している以上、潮風が内陸に向けて吹き続けている。それが農作業にどれほどの影響を与えるかは分かるか？」
「そうですね、農家にとって塩害は深刻です。作物自体を駄目にするのも勿論ですが、それ以上に土が農作業に適さなくなる。」

塩害は野菜に塩味が付く程度ならむしろ美味しい話だが、塩だけにそのような甘いものではない。そもそもほとんどの作物にとって、多量の塩は毒のようなものである。多くの作物が塩によって成長を阻害されてしまい、当然それらは売り物になることは無いだろう。

塩がやっかいなのはそれだけで無く、水に溶けやすいという点もある。その性質の結果、土中に染み込み、土自体が作物にとって害になってしまうのだ。

「だが、そのような環境で常に我々は組合が要求してきたノルマを達成してきた。それだけでも、評価に値するものだと思うがね。」

「確かに組合の資料でも作物の収穫量は要求通りの成果を出し続けていますね。それでは、収穫作物の内容についてはどうですか？」

いくら収穫量が良くても、それらの内容が悪ければ目も当てられない。

「麦や稲など、国の根幹を支える物ばかりだ。それらが不要だとはもちろん言えんだろう？」

「もちろん不要です。」

「何？」

やはり収穫作物の内容に問題があった。これでは納得なんて出来る筈が無い。

「麦や稲を育てているから、国の根幹を支えているなんて思い上がりも甚だしい。もしかして、そんな内容で組合の支援を得られるなんて考えていたんですか？」

「貴様！我々のこれまでの成果を馬鹿にするのか！やはり貴様等も組合の一員と言うわけか！」

これまで、ある程度落ち着いていた農家側代表が再び怒鳴りだした。だがまあこれくらいは我慢するしかないだろう。これからはもっとヒートアップして行くのだから。

「あたりまえです。だって組合に雇われている訳ですからね。でもそれはあなた達も同じでしょう？そして組合の一員である以上、組合の利益というものを考えるべきだ。でもあなた方はそれをしてい

ない。」
「先ほど言った事を忘れたのか？これまで農家達は組合の要求通りの事をしてきた！」
　農家代表者がこちらを指さしながら、顔を真っ赤にしていく。もう少し近ければ唾が飛んできていることだろう。
「その要求通りというのが問題なんですよ。実際、農家達が皆要求通りの成果を出していても、それほど組合の利益にならないんですから。組合にとって農業は範疇外の仕事なんですよ。だから、その仕事依頼も甘目に出している。それを遂行できたからと言って、優遇策を取っていたら、他の組合員から不満が出てきますって。」
「ならば、どれほどの成果を出せば、貴様等は納得すると言うのだ。結局は難癖を付けて、我々の不満を抑えつけたいだけではないか！」
　その通りである。自分は難癖を付けて不満を押さえつけるつもりなのだから。だが、それに反論の余地を与えなければ、自分達の勝ちである。
「納得するには、そうですね、あなた達の作物でこの国の全国民が飢える必要が無いくらい生産できれば、こちらとしては納得できますね。ちなみに今の生産量からどれほど増やせばできるか、そちらは分かります？」
「そんなもの、今の5倍の量を出荷できたとしても不可能だ！やはり無理難題では無いか！」
「逆に言えば、国内で賄える食料は、せいぜいそれくらいという事です。ぶっちゃけ、この国の食料は殆ど、他国からの輸入に頼ってる状況ですから。これで組合側に農業で利益を出そうとするなら、輸入する必要の無いくらい生産してくれないと無理なんですよ。」
　この状況が不健全と言う訳では無い。ヒゼル国は商船業での交易で国内の利益を得ている以上、他国から何かを買い付けるという形でバランスを取らないと他国ばかりが損をする事になってしまう。その買い付ける物が食料であるのなら、他国でも十分生産可能であるし、国の生命線でもある食料を他国に依存させておくことで、相

手の国に信頼関係を築く事ができるのだ。
　こういった形が既に出来上がっている以上、農業で利益を産もうとするのなら、それがすべてを台無しても欲しくなるような利益でなければ意味が無い。それには少なくとも、国内での食糧事情をすべて解決できるくらいの生産量は欲しいところである。
「国内の状況がどうであろうと不可能である事には変わりあるまい！結局は農家不利の状況を作りだして置きながら、我々を不当に扱う組合に責任があるだろう！」
「それは農家側に何一つ選択肢が無い状況でこそ言える言葉でしょう。でも今、この現状は自らが不利になるようにあなた方自身が選んできた結果ですから、文句を言われる筋合いは無い。」
「我々に選択肢があったと？どこにそんなものあるというのだ。我々は常に組合に管理され抑圧されてきた！」
「組合の命令は必要最低限のものでしか無かったはずです。それは常にあなた方側に余力も時間もあったという事。その時間を使い、国内用では無く、国外に輸出でるような作物を生産できるような体制を作るべきだったんですよ。具体的には贅沢品なんかを生産できるようになっていれば一番良かった。国内の食料を輸入で賄えている現状がある以上、それは可能であったはず。」
　農業での贅沢品とは、生活にかならず必要にはならない、砂糖や香辛料などの調味料類、果実などの甘味などがそうである。牧畜での肉類などもそうだが、こちらは保存が難しいのであまり輸送には向かない。
　ちなみにそれらはすべて生産が難しいから贅沢品なのであるが、この国の農家達には十分に生産してみる価値があるものである。
「だけど、あなた方は挑戦をしてこなかった。それは間違いなくあなた方の怠慢だ。」
　組合にあまり利益をもたしていない農家達が、今この場にいるように一端に生活できている以上、組合は事実上、農家達に支援しているのと同義なのである。ならば、農家として新たな挑戦ができる

力があったはずなのだ。
何故、それを農家達がそれを選択しなかったのか。それはこの国の農家達特有のある思考に関係があると考える。
「結局はあなた方自身も農業が劣った仕事であるって考えているのが問題なんですよ。農業という仕事を押し付けられた時点で、不満を持っているその姿勢があなた方の立場をより一層、悪くしている。」
この国で組合と農家の対立とは最終的にそこに行き着く。農家と自ら名乗っている彼らも本質的には組合の一員なのだ。組合の価値観で縛られている彼らは、自らの立場を向上する。という考えから、農業の改善という方向に意識を向かせる事ができない。
今、この場所で行われている対立はまさしく、組合内部の対立でしか無いのである。
「我々自身が誇りを持っていないと言うのか。今まで組合に蔑まされてきた我々が！」
「なら、なんで組合に仕事斡旋の優遇を提案された時、あなた方はそれを認めようとしたんですか。あれは本当に農家としての誇りを持っていたのなら怒るべき提案だったのに。あなた方はあの時、鍬を捨てろと言われたんですよ？農業よりもっとふさわしい仕事を紹介してやるからと。それをあっさりと受け入れようとしてしまった時点で誇りなんてものは無くなってしまっている。」
アイムから出てくる言葉に農家代表の表情は怒りから悔しさの表情へと変化していく。アイムの言葉が自分達の本質を突いていると肯定するように。
「別に農業が特段素晴らしい仕事であるなんて言いませんよ。他の仕事だって誇りを持ってできるものは沢山ある。そして別の仕事を優遇するというのは、その誇りを奪ったり与えたりする行為なんです。この行為に正当性を持たせるには、仕事に対する自尊心が必要不可欠なのにそれが無い。元農家として、あなた方の優遇というものに高評価を付けるなんて無理ですね。」

交渉役として、農家側を評価するという自分の仕事はこれで終わった。結局は農家達の要求を組合が完全に跳ね除けた形になってしまったが、アイムは初仕事としてはなかなか良かったかもな。と言った考えが頭の中に過ぎていった。言いたいことが言えたアイムにとっては程々に満足感を味わえる物ではあったのである。

一つ目の国で（3）

アイムは船に荷物を運びながら、ヒゼル国を振り返る。結局2日程度しか居なかったので愛着も湧かないが、初仕事を終えた場所として、自分の思い出に残るかもしれない。

今、荷物を運んでいるのは仕事が失敗して荷物運びの仕事で日銭を稼いでいるから。という訳では無く、これから次の国へと向かう船に乗る最中なのである。ちなみに仕事の成否はというと。

「組合からの評価は一応及第点。報酬は目的地へと向かう船への乗船権に携帯保存食料が1週間分ほど、金銭なんかは一切貰わずと。これって成功と言えるんですかね。」

「報酬に関しては、最初からこれくらいで済ますつもりだったさ。組合側にとっては用意し易く、俺達にとっては旅費が浮く。初仕事の報酬としては上々だろ？」

確かにそう言えるかもしれない。しかし、実際に気になるのは組合がどう思って、この報酬を自分達に渡したかなのである。

雇い主として仕方なく渡すことになった。という状況はこちらとしても気分の良いものではないからだ。

「組合としては、最初から農家達に対する優遇策を提案するつもりだったから、その点に関しては失敗と言えるな。つまり組合の半分以上は良い顔をしていないという事だ。」

やはりそうなるか。交渉は組合側が農家達の要求をすべて跳ね除ける形で終わったのだ。当然、原因は評価役の自分が農家達の考えを批判したせいである。

「だが、組合だって一枚岩じゃない。農家優遇に反対だった奴等は、お前の行動を評価している事だろうさ。そのおかげで今、船に乗ることができるんだからな。」

「そう言われると、少しほっとします。でも、やっぱりもうちょっと上手くできたんじゃないか。なんて思ってしまいますね。」

金銭面に関する報酬なんかも貰う事が出来たんじゃないかとも。
「未知の仕事な上に初仕事でもある。満点なんてのは絶対に不可能な状況だったんだ。一定の評価を貰えた。この事は誇っていい事だと俺は思うね。俺が気になるのは、お前が農家達に敵対する方針を選んだ事だ。前職からしてむしろ擁護すると思っていたんだが。」
「うーん。とりあえず、最初から農家達に肩入れしようとは考えていませんでしたね、まあ評価しないと決めたのは、農家達が職業優遇策を持ち出されて、嬉しそうな表情をした時ですけど。」
あれは前職が農家だからこそ怒りが湧いた。これでも農業では苦労も収入も得ていたのである。その仕事を舐められたような気がして、とてもじゃないが肯定的に見る事ができなかった。
「なるほど、しかし最初から肩入れするつもりが無いというのはどういう事だ？中立に物事を考えていたにしては、組合を悪く言っていたじゃないか。」
それはそうである。農作業というものを重視しない組合には好印象持つ訳が無い。しかし、組合の歴史を聞くと商船業を重視する姿勢には理解も納得もできるのである。
姿勢の偏りについては、自分は元農家なので農業の事を良く知っているが、商船の事は良くしらないという事で、こちらも同様に偏っている。嫌な気分にはなるが、批判する気にはならない。
「この国の農家に最初から肩入れしないと決めたのは、この国を地霊の視点で見てからです。」
地霊とは自分の様なランドファーマーが見る事ができる大地の精霊のようなものだ。彼らの量によって土地が肥えているのか、作物に向いているのか、などの事が分かる。だいたいは大量に居れば、そこは良い土地という事になる。
「どうにもこの国には地霊が少ないんですよね。最初は海に近いせいで土地が悪いんじゃないかなと思っていたんですが、農業が発展していれば、土地改良も進むはずで、もう少し居てもおかしくない。それでも少ないという事は、そもそも農家が自分達の仕事を重要視

していないからではないかと。」
　そういった考えで交渉に挑んでみると、案の定、彼らは農業の発展よりも、組合での評価を気にするような者達であったと言う訳である。
「気になるのは農家達の今後ですね。今回の事で彼らの立場って悪くなりますよね。なんだか僕自身が責任を感じてしまいそうでちょっと・・・。」
「まあ当然悪くなるな。これまで職業差別として扱われてきた事が、実はその原因が自分達の怠慢によるものである。なんて言われたらそうなる。農家達は今後、自らの姿勢を変えざる得なくなるだろう。そしてそれは当然、お前の責任でもある。」
　そうだ。例え自分達が雇われ者だとしても、あそこで農家達を評価したのは他ならぬ自分なのだ。自分の責任というものは感じるべきなのだろう。
「でも、今後組合と農家がどうなろうと、僕はその責任について何もできません。だって、僕らはこれからこの国を去る側なんですから。」
　だからこそ、気になってしまう。自分の出した結論がどのような結果をもたらすか、自分は見届ける事ができない。
「国を変えたり、支えたり、見守ったりするのは国に住む者達の責任だ。旅人の俺達が背負い込む事ができる物じゃあない。俺達が何かに責任を感じるのだとすれば、それは今後仕事を今回より上手く運ぶ事によってのみ果たす事ができる。」
　だが、それは無責任とも言えるものでは無いだろうか。問題を深刻化させるだけで、自分達はそこを去っている事になるのだから。
「もし、それでも心に何かが残ってしまうのなら、それを払えるくらいこれからの仕事に自信を持つ事だな。自分は状況を悪くするのでは無く、良くする存在なんだと。」
「そんな考えを持つ事ってできるでしょうか、今回の仕事が終わったとき、僕は満足感を覚えました。けどそれでもこんな風に不安も

感じている。」
　これからの仕事もそうであるのなら、自分自身に胸を張っていくことはできるだろうか。
「なあアイム、今回は俺達の初仕事だ。確かにそれは重要な事ではある。だが、これから俺達は何回も何十回もこういった仕事をして行くんだ。今回の仕事はその中の一つでしか無いんだよ。これから今回の責任を果たす機会が幾つもやって来るはずだ。だからこそ、俺達はその機会に対して胸を張って挑んで行こうじゃないか。」
　そう言ってリュンは胸を張り、荷物を抱えながら船へと向かっていく。当然、そんな恰好をしていれば姿勢が悪くなるので、地面の小石につまずき、バランスを崩していた。
　リュンのそんな姿を見て、アイムはつい笑い出してしまう。今まで心に引っ掛かりがあった事など嘘のように。
　そうだ、今回の事もその程度の事かもしれない。いくら自分達がどうにかしようと、この国を動かしていくのはこの国に生きる者達の仕事だ。自分達が与える事ができる影響なんて、たかが知れた物なのだろう。
　アイムはもう一度振り返り、町の風景を見る。自分自身も、この町の風景を忘れて行ってしまうかもしれない。だがここで、どのような仕事をしたのかは忘れないで置こうと思う。この町でした仕事と、これからの仕事に対して胸を張って挑んで行けるように。

二つ目は海の上（1）

船が海の上を進んでいく。海は潮風に煽られながらもなお穏やかで、空は透き通るような快晴で、まるでそれぞれの境界を無くそうとしているような風景である。

アイム達はヒゼルから船に乗り、大陸の西側を南へと向かっていた。大陸の北西端に位置するヒゼルからは、大陸の北側を東へ向かうルートと、今現在進んでいるようなルートの二つがある。何故、南へと向かうルートを選んだかと言えば、別に大した理由では無く、ヒゼルから東へ向かえば、前に居たシライ国へと逆戻りしてしまうから、といった程度の物であった。

ヒゼルを出て船に乗ってからはもう二日は過ぎており、後さらに二日ほどで目的地である次の国へと着く予定であった。

航海は非常に順調なようで、船員達の顔もどこか余裕を持った様子である。その一方で顔色を悪くして船の欄干にぐったりと体を預けている者もいる。

その顔色の悪い者こそがランドファーマーという種族のアイムである。彼は慣れない船旅にすっかり酔ってしまったのであった。

「なんというか、どうして船って揺れるんでしょうね。それが無かったらこの景色も好きになれそうなのに。」

アイムが隣に居る人物に話しかける。それはアイムと共に旅を続けるツリストという種族の青年、リュンであった。

「揺れなきゃ進めないのだから仕様が無いだろう。それにしても、そこまで船に弱いとは思っても見なかったな。いくら順調な航海でも、目的地に着くのはまだ先だぞ。」

リュンの方は船旅も慣れたものの様で、船員達から次の目的地の情報を聞き出すなど、船の上でも抜かりの無い様子であった。

「当たり前の話なんですが、海の上って地霊が居ないんですよね。今まで見慣れていた物が無くなるってなんか不自然で、この船の揺

れと合わさってより一層気持ち悪く・・・。」
　ランドファーマーには地霊と言う、大地の精霊を見る能力が備わっている。そして当然、海の上では大地の精霊が見える筈が無い。
「まあ、部屋で横になっていれば揺れもあまり気にしないで済むんで大丈夫なんですけどね。でも、一日中部屋に籠るのもちょっと嫌だったので出てきたんですが。」
　組合が用意してくれた船の個室は、それほど悪く無い物であったが、陸地の宿などに比べるとやはり狭く、つい外に出たくなる物でもあったのだ。
「それで再び気持ち悪くなってしまったと。気持ちはわかるが、部屋でじっとしていた方が良いんじゃないか？このままじゃあ海の魚に二度目の餌をやる事になるぞ。」
　それは朝食を自分の口から魚達に提供する行為であり、気分的に絶対したくない行為でもある。ちなみに、一度目は初めての航海に気分が高揚し、自分が船に弱い事にも気が付かず、船の上をはしゃぎ回っていた時にする事になった。
「いえ、まあ、これからも旅を続けていく訳ですから、少しは船旅にも慣れておかないと、いや、でも、そうですね、それは部屋でもう少し休んでからの話ですね、うん」
　意地を張ろうとしたが失敗する。どうにも自分は船での酔いと相性が悪い。我慢が出来ない様な気持ち悪さが襲ってくるのだ。このままでは確かに魚の餌やりをしてしまう可能性がある。
「部屋に戻ったら、横になって目を瞑ってろよ。それで大分マシになるはずだ。船での酔いってのは、視覚が揺れているせいでもあるんだからな。」
　そんなリュンの助言を背後に聞きながら、アイムはよろよろと自分達の部屋に戻り始める。
せっかくの船旅なのだから少しでも海の風景を楽しみたいと思って部屋から出た訳だが、今のところ、アイムにとっての関心はその助言を実行するまでに魚の餌をやる事になるかもしれないという点の

みに集中していた。

なんとか部屋のある場所まで着いたアイムはふと目線を上げる。部屋への入口は二つある。当然、二つ部屋があるという事なのだが、自分とリュンとで一つずつなんて贅沢な状況では無く、二人で一部屋を使っている。ならば、もう一つの部屋には誰がいるのだろうか。

この船は大きさで言えば中型サイズの船であり、旅客船と輸送船を兼ねている船だと乗る前に説明された。甲板の下には輸送物を詰めた箱が隙間なく積まれていたし、他の場所は船員達の仕事場であったり、居住区であったりする。つまり、この船の大きさで旅客と輸送を併用しようとすれば空いた場所というのは極力少なくしようとするものなのだ。

という事は、このもう一つの部屋には自分達とは違う誰かが居るはずという事になる。船員だろうか。いや、そういえば船旅の初日、船員らしくない、二人の女性が船の上に居たような気がする。すぐに周りを気にする程、余裕が無くなったのでよく覚えていないが、そうだったような。

なら、この部屋にはその女性達の部屋という事になる。他に客室が無いから自分達と一緒で二人で一部屋とは、もしかしたら、同じ様な境遇かもしれない。

「あの、大丈夫ですか？お顔がよろしく無い様ですが。」

突然、目の前から話しかけられる。おかしい、目は前を向いていて当然なんだから、気付かれずに話しかけてくるなんて不可能なはずなのに。

「下です。もっと目線を下に。」

言われた通りに下を向くと、そこには一人の少女が居た。少女は少女らしく非常に小さい身長であったので、目線に入らなかった様だ。どれくらい小さいかと言うと、一般の平均身長よりも顔半分ほど小さい自分の視線にすら入らなかったくらいなのでから、もうこれは小さいどころか、大したものである。

「ああよかった、気が付いてくれましたか。あなたが大変気分を悪くしているように見えましたので、つい話を掛けさせて頂いたのですが、なかなか見つけて下さらないので困ってしまうところでした。」

途中からこっちの心配から自分の心配になっているようだが、とりあえずこちらを心配してくれたのは、親切心からだろう。

「いや、少し船に酔ったみたいで。船に乗ってからずっとだから、まあこの状態にも慣れた頃なんで大丈夫。」

悪意ではなさそうなので、とりあえず自分の状況を話す事にする。しかし、船酔いに成る事に慣れたとは我ながらどういう事だろう。船酔いに慣れたと言ったらまるで気持ち悪く無くたったと言っているようで嘘になってしまうから、仕方の無い事なのだが。

「まあ、それはいけません。乗り物酔いと言っても、悪くすると体を壊してしまう事があるんですよ？そうだ、何かをお食べになりませんか？空腹になると、より酔い易くなると聞いた事があります。」

「いや、それなら朝食べてから、あまり時間も経ってないからいらない。というか、今何か食べたら、それを無駄にしかねないし。」

「ならなら、外に出て風に当たるとよろしいですわ。きっと気分も良くなるはずです。」

しまった。どうやら彼女は善意を押し売りするタイプのようだ。普段ならそれも善意の内なのだから、話を聞く気にもなるが、いかんせん今自分はいろいろと危機的状況である。

「あー、その、多分部屋で横になっていれば治まると思うので部屋に帰してくれればそれでいいかと。」

「部屋に籠っているのは、体の良い事ではありませんわ。是非、外に出る事をお勧めします。それに船が港に着くまでまだまだ時間が掛かってしまいます。ずっと部屋という訳にも行きませんでしょう？」

いや、外に出ていたから気分が悪くなってしまったのであるが。どうも小さな彼女は自分の行動の結果で相手が感謝してくれる事を

望んでいるようで、なかなか前を退いてくれない。
「とりあえず、外に行くより部屋に帰る方が距離が近いから、そっちを選ぶ事にするよ。外に出るのは、気分が良くなってからかな？」
会話だけではいつまでたってもこの場を動けそうにないし、酔いも治まりそうにないので、今度は話ながら、少女の横を足早に通り過ぎ、自分の部屋に向かう事にする。
「あ、お待ちになって下さい。まだ、酔い治す方法を幾つか知っているのですが・・・。」
後ろで少女がこちらの背中に話掛けてくるが、無視するような形でアイムは部屋に戻っていった。
別に不親切な訳では無い。これ以上話続けていると、彼女の目の前で胃の中にあるものを披露してしまいそうだったのだ。

部屋に備え付けられた寝具から背を起こす。部屋の前で少女と話してから結構な時間が経っていた。
どうやら少し眠っていたようだ。気分も大分良くなっている。日が落ちてくる時間帯らしく、部屋が暗い。照明が無い事も無いのだが、部屋に戻った時はまだ明るかったので点けずに置いている。この様子だと、昼食を食べ損ねたようだ。それが原因か、少し小腹が空いている。しかし
夕飯まではまだ時間がありそうだった。
どうにも、船に乗ってからずっとこの様な感じで嫌になってくる。旅に出た理由は自分の中の冒険心が大きいのに、いざ旅に出れば部屋に籠りきりとは、意味が無いような気がする。もう少し、この航海を楽しみたいと思うのだが、部屋に籠るか食事をするかのどちらかしか行動していない。このままでは駄目だと思い、外に出ればまた気分が悪くなり、部屋に戻るという事を繰り返していた。
「でもやっぱり外には出たくなるんだよね。今は日も落ちて視界が狭まってくる頃だから、そんなに気持ち悪くならないかもしれないし。」

近くに地霊が居ないのに、独り言を出してしまう。どうにもこれは自分の癖になっているようだ。
「少しだけ、外に出て見よう。酔ったらまた部屋に戻って横になっていれば良いんだしね。」
寝具から完全に背を起こし、部屋を出る。目指すは甲板での風景と言ったところだ。できれば、酔いも来ないで欲しいものである。旅の風景を目的に自分は旅を続けているのだから。この自分の欲だけは抑えるつもりは無いのだ。

甲板に出た瞬間、自分の行為は正解であったと思うようになった。今は丁度、太陽が海へと沈んでいく瞬間だったらしく、その赤く、そして暗く寂しげな光景は自分の心にかならず刻み込まれる物であったのだ。地上で見るそれとは違う、海に照り返した太陽の光も同時、消えていく光景は、まるで海が太陽を飲み込んでいくような感覚で震えが起きそうになった。
船酔いの事など忘れてしまいそうになる。むしろとても気分が良い。そうなのだ、こういった景色を見たかったのだ。これから旅を続けていけば、これに匹敵する景色を何度も見れるかもしれない。それだけで、旅を続けて行こうという気持ちも高まると言う物だ。
日が完全に沈み、夜がやってくる。明かりが完全に消えたわけでは無い。今は晴天である。天上には星と月が太陽ほどでは無いにしろ船に明かりを与えてくれている。
ふと、甲板を見渡すと小さな少女が自分と同じ様に景色を見ていた。部屋の前で会った少女である。
少女はこちらの存在に気が付くと、突然、嬉しそうな顔をしながら、小走りで駆け寄って来た。
そういえば、少女とはこちらが無理矢理話を終わらせてからそれきりである。少女との会話は正直、疲れてしまいそうになる物であったが、それでも、もう一度話を続けてみたくなった。船酔いで切羽詰った状態ならともかく、ある程度余裕がある今は、善意の押し

売りのような会話であろうと、悪意でなければ、少女と話すのは悪く無いと思ったのだ。

「やっと船から良い景色を見れたよ。船酔いも、こういう景色を見るきっかけになるなら、悪いものじゃないかもね。」

アイムは駆け寄る少女の手を振りながら、話しかける。少女は笑みを浮かべ、こちらの前まで来た。

「それはよろしい事ですわ。でも船酔い自体は良く無いものですよ。お体は大丈夫なのですか？」

少女はアイムの前で止まると、笑みを浮かべたまま返事をしてくる。

「部屋で横になっていたら大分良くなったよ。でも、船酔いが無ければ、もっと船からの景色を楽しめる訳だから、確かに良く無いものかな？君の言う通り、船の外で風に当たっていた方が良かったかもしれない。」

「まあ、あの時は大変失礼しました。あなたは船酔いで苦しんでいる状況でしたのに、その気持ちも察せず自分の意見ばかりを話してしまって。」

反省ができる分、まだ大丈夫だろう。それに苦しむという程、大変だった訳でも、いや、確かにあの時は大変だった。

「でも、それは終わった事だし別にいいよ。それより、君はずっと元気そうだけど、船酔いとかはしないの？」

揺れる船上で小走りであろうと、駆け寄るというのは、どうにも船との相性が悪いらしい、自分には考えられない事なのである。

「これでも船に乗るのは始めてではありませんの。それに、これくらいの揺れで酔っていては、天候が悪くなった時、もっと酷い事になりますわ。」

あまり想像したくない仮定である。まあ、夜になっても天気は良いままだし、港に着くまではなんとかなると思いたい。

「うーん、天候が悪くなったらなったで、なんとかなるとも思うし

ね。そんな状態だと部屋に籠りっきりなるだろうから、酔いも感じ難いだろうし。」
「あら、それは間違いですわ。悪天候の時は船のどの場所でも、船酔いの可能性があるのです。注意はどのような時にも必要ですのよ。」
なるほど、そういう物なのだろうか。今回が初の船旅である自分にとっては、興味深い話である。
「その様子だとそっちは・・・。えーと、名前はなんだっけ？」
会話の内容が自分好みの話になってきたので、少しでも話を弾ませたいと思い、アイムは少女の名前を聞く事にした。
「セイリスと申します。良ければそちらの名前もお教え頂けませんか？」
「うん、僕の名前はアイム。それで、話の続きだけど、セイリスは話を聞いた限りじゃあ随分と船旅に慣れている様子だけど、どうなの？」
少なくとも、今までの会話を聞く限りは、自分よりは旅というものを知っている風であった。
「それほど慣れているという訳ではありませんが、このように船に乗る事は多々機会がありましたわ。それが、何かお気になりましたのですか？」
「まあ気になるというか、これでも旅を始めたのはつい最近でさ、自分より経験が豊富そうだから、色々と話を聞きたくなってね。」
特に船旅に関しては、これから知識を集めておきたい所である。
「経験が豊富だなんて言われると、少し恥ずかしくなってしまいます。私、旅に関しては連れにほとんど頼りきりでしたから。」
そういえば、この少女も二人連れだった気がする。ということは、自分の似たような境遇なのだろうか。
「旅の目的っていうのはあるのかな？こっちは旅商人みたいな仕事を生業にしているんだけど。」
本当は農業知識を使っての商売と言った所であるが嘘は言ってい

ない。ただ、売り歩く物が少々特殊なだけである。
「あら、それは旅人の中では一般的な仕事ですのよ。それ以外になると冒険家だったり、傭兵だったりと、そんなに多くない職業ですから。ちなみに私は様々な国で私達の教えを広める事を目的にしています。」
教えを広めると言われても、あまり想像ができない仕事である。
「要は先生みたいな仕事をしているって事？」
「まあ近いと言えば近いですわ。その目的のおかげか、様々な土地の伝説や昔話などには詳しくなりましたの。そのような話でよろしれば。」
少々、聞きたかった話とは違うが、それらも十分面白そうな話である。
「あー、それじゃあ海に関係する伝説なんかは無いかな、せっかく船で旅をしているんだし、雰囲気がでそうだ。」
船酔いでじっくり、船旅を楽しめない以上、話の中だけでも楽しみたいのだ。
「海についてですか。なら、アイムさんは海に棲むドラゴンについてはご存知ですか？」
ドラゴンという言葉は知っている。大陸中、あちこちに棲むと言われる強壮な種族であると。
海に棲んでいるドラゴンという言葉にも聞き覚えがあった。確か船が旅立つ前のヒゼル国で、商船組合が自分達の紋章として使っていた絵のモチーフであったはずだ。
「確か鱗が無くて細長い魚だったっけ？それ以外は良く知らないんだけど。」
それを教えてくれたリュンなら、もっと何かを知っているかもしれないが、どうにも姿が見当たらない。
「そうですね。それが海のドラゴンの姿です。ただ、絵ではわかりませんが、もう一つ大きな特徴があります。」
「特徴？それが重要な物なんだったら、絵でも描かれてると思うん

だけど。」
　しかし、商船組合で見たドラゴンの絵にはそのような物はなかった気がする。
「どうしたって描けないのですわ。何故なら海のドラゴンの特徴とは、その大きさにあるのですから。」
「すごく大きかったり、小さかったりするとか？」
　大きさが特徴になるというなら、そういうことだろう。
「ええ、とてもとても大きな体をしているのです。はっきり言って、その他の姿なんて、その大きさを見てしまえば些細な問題に思えてしまう程の大きさなのです。」
　そう言ってセイリスは自分の小さな体でドラゴンの大きさを表現しようと手を広げる。その姿はどこか微笑ましい物であったが、アイムの関心はドラゴンについての事が大半を占めるようになっていた。
「そんなに大きいんだ。例えば、この船と比べるとどれくらいの差があるの？」
　彼女の表現を見る限りでは、今乗っている船よりは大きいようだが、まだいまいち想像できない。
「個体差があるらしいので、どれ程という事を一概に決めてしまう事はできませんが、少なくとも、この船が３つ縦に並んだ大きさよりは、ドラゴンは大きいと思いますわ。」
　それは確かに凄い、この船だけでも何十人と船員が乗れる程なのに、その三倍はあると言われたら、確かに想像以上の生物のようだ。
「うーん。やっぱり世界には驚きの生物が居るものなんだなあ。ドラゴンと言えば鱗と翼があって、体がトカゲで火を吐くようなのを想像してたから、本当に驚きだよ。」
　しかし、どうやら海のドラゴンはそんな姿とは大きく違っているらしい。
「アイムさんの言っているそれは、森に棲むドラゴンですわね。ドラゴンは森、火山、空、海に棲むものでそれぞれ違う姿をしている

んですのよ。」
　そんなに沢山のドラゴンが居る事自体を知らぬアイムにとって見れば、どれもこれも新発見の事実である。
「でもそんな風に姿が違うんだったら、ドラゴンなんて一括りにするのは、なんだか可笑しい感じがするよね。」
「そうですわね。でも昔から、ドラゴンはドラゴンとして見られて来た訳ですから、何か理由があるのかもしれませんわ。海に棲むドラゴンも魚と似た姿をしていますが、魚とは明らかに違う生物であると聞いたことがありますもの。」
　その点に関しては、セイリスも知らない様子である。まあ確かに、細かい違いは専門家でなければわからないものである。ましてや、鳶と鷹の区別もできないアイムにとっては未知の領域でしかない。
「じゃあさ、もしかしたらこの船旅で海のドラゴンを見る事ってできるのかな。そんなに大きければ、見つけやすいとも思うんだけど。」
　どうせ、この船旅で海の風景をじっくり見る事ができないのであれば、せめて、ドラゴンの姿だけでも見てみたいというアイムの考えである。
「海のドラゴンを、ですか。少々難しい事かもしれませんわ。いくらドラゴンが巨大だと言っても、海はさらに大きく、そこで出会える可能性はかなり少ないかと。それに明後日には船は港に着くのですから、出会いの機会そのものがそれほど多くないのです。」
　言われてみればそうかもしれない。これから旅を続ける以上、船旅の機会もあるのだから、旅の中でドラゴンに出会える可能性は零では無いのであるが、それでも今回、出会えないというのは残念な事である。
「ですが、海のドラゴン自体、人や船を恐れない場合が多いらしいので、会える時は会える。というのが海で仕事をする方々の考えなのです。ですから、アイムさんも運さえ良ければ、出会えるかもしれませんわね。」

なるほど、そういう考えもあるか。巨大なドラゴンなので、大陸に近くなれば近くなるほど海の領域が狭くなり、出会える可能性が少なくなる。ならば明日一日が勝負という事だ。

何が勝負かと言われたら、アイム自身困ってしまうものだが、明日の運が良くなる事を祈りたくなってしまったのである。

「そういえば、ちょっと気になったんだけど、そんな大きなドラゴンが近くに現れたら、この船が危なくならないのかな？まあ、会った事がある人が多そうだし大丈夫だと思うけど。」

そう言った事は海に生きる者達にとっては慣れた事なのかもしれない。

「確かに、海のドラゴンの性格は温厚です。そもそも海には棲まない我々のような生物に敵意を抱くという事はありません。」

うん、なかなか好感が持てそうな生き物である。

「しかし、その巨体は私たちが生きる世界とは違う世界を生きているという事でもあります。」

違う世界とは変わった表現である。現実に出会える以上、同じ世界に棲む生物である事には変わりないのだから。

「例えば、地面の歩く蟻に対して私たちは敵意を持ちませんし、子供でもなければいちいち、踏み潰してやろうなんて思わないでしょう？でも、いつのまにか、気づかぬ内に蟻に害を与えている事もあります。それは蟻と私たちがまったく違う世界で生きていて、私たちの方が強い力を持っている結果、起こってしまう悲劇なのです。」

セイリスは少し遠い目をしながら話し続ける。その姿はこちらが不安に思ってしまう様な雰囲気を持っていた。

「なんだか、ドラゴンも敵意なくこっちに害を与えてしまう。なんて言ってるように思えるんだけど。」

アイムの言葉を聞くと、セイリスはニコリと笑顔を浮かべながら答える。

「船乗りの方々が言うには、海のドラゴンに出会った時のための言葉があるそうです。」

「へえ、それは少し聞いてみたい言葉だね。」
セイリスの表情は、さらにこちらへ不安を感じさせるものである。
「ただ祈れ。だそうです。ちなみに祈る対象は神様でも両親でも、まだ見ぬ恋人でも良いそうですわ。」
その言葉はアイムに明日の幸運を、さらに願いたくなるものであった。ただ当然、ドラゴンに会うためだけの運では無かったが。

二つ目は海の上（2）

船旅も3日目を迎える朝、アイムは部屋に備え付けられた寝具の上で目を覚ます。船の外より、ここで横になっている時間が多いアイムにとっては、早くも飽きてきた光景が回りに広がる。

狭い船室に申し訳程度につけられた調度品と寝具。寝具は布のハンモックが上下2段で壁に掛けられており、部屋をこれ以上狭くする訳にはいかないという心遣いが感じられるものであった。

こういった部屋が気に入らないのか、相棒のリュンは部屋で寝ようとせず、甲板でごろ寝している事がほとんどであった。船員達の何人かも同じように寝ていたので、そんなに違和感を覚えなかったが、それでも部屋があるのに外で寝るというのは、なんとも贅沢な話である。

それらの事柄も男同士の旅なのだから、耐えられないというものでも無い。むしろいちいち気を使う物が無くて気楽な部分もあり、アイムはこの状況を楽しむことにしていた。

そういえば、自分達の部屋以外のもう一つの客室も似たような状態なのだろうか。向こうは女性である以上、自分達より、このような部屋や船旅には嫌悪感を覚えるような気がする。

「ま、旅経験がほとんど無い自分が豊富な方の心配をするなんて偉そうな事なんだけどね。」

昨日、甲板でセイリスと話した結果、彼女が自分よりも旅慣れている事を知ることができた。そんな彼女と話を終えてから、すぐに夕飯の時間になり、それぞれ部屋に帰る事になった。夕飯と言っても、干し肉や乾パンなど、手軽かつ口の中がパサパサになりそうな食事だったので、机に皆で並んで食べるなんて大層な物では無く、部屋に直接食料が届くという形式だったからだ。

彼女の事が気になったのは、教えてくれた話が面白かったからだろう。ドラゴンについての話は確かに、自分の心を揺さぶる物があっ

たのだ。
「でも、会いたいって気持ちは少し萎えちゃったんだよなあ。」
ドラゴンは危険な存在である。という旨の注意もあの時、聞く事になったのでアイムの心情は少し微妙な気持ちであった。
しかし、そのドラゴンに会う機会というのは今日1日が精一杯の事だろう。そうそう会える物では無いのだから、別に気にする事では無いかもしれない。
どちらかというと、今日も部屋の中でずっと過ごし兼ねない自分の状況にこそ不安を感じる。寝起きなので、船酔いで気分が悪いという事も無い。再び甲板に出てみよう。気分が悪くなれば、また部屋で横になればいいのである。
そんな事を考えているアイム自身、少し船旅という物に慣れてきているのかもしれない。

どうにも船というのは、船室と甲板を行き交うのみで一日が終わってしまうものらしい。これで船旅も三日目になるが、同様の行動のみで一日が終わってしまっている。明日には港に着く自分達はそれでもいいが、これからまだまだ、この船に乗る事になる船員達は飽きや退屈に襲われたりはしないのだろうか。
一度聞いてみたくはあるが、それなりに慌ただしく動く船員に上手く話しかける自信が無いアイムは、他に話し相手がいないものかと甲板を探す。
と言っても、現在この船でアイムが気軽に話しかけられる人物と言えば、相棒のリュンと先日知り合ったセイリスだけである。
それでも行き場が限られる船の上では、探せばすぐに見つかる物でもあるので、アイムは少々真剣に探す。話し相手がいない船旅なんて、一日と経たずに飽きが来る物だからだ。
「まあ仕事があれば、そんな事も考えずに済むかもしれないけど。」
「そういう事を言っていると、本当に厄介な仕事をする嵌めになるんだぞ。」

突然、背後から話しかけられるが、それほど驚きはしなかった。何故ならそれは、よく聞きなれた声だったからだ。
「あれ、リュンさん。もう起きてたんですか？」
船旅が始まってからは船上で眠る事にしているらしい彼は、朝早くにはあまり起きず、そのまま船でゴロゴロしている事が多かった。船員達にとっては大変邪魔な存在だろうに。
「どうにも船員達がいつもより忙しそうでな、寝ていたら邪魔だと言われた。」
つまり、船員達の我慢も限界に来ていた様である。
「それでもいつもは何も言わずに避けてくれるんだぞ？あいつらだって何人かは船上で寝てるんだからお相子じゃないか。」
その船上で寝ている船員だって、朝早くに起きて他の邪魔にならない様にしているのであって、昼頃まで寝ている邪魔者とは大きく違うはずだ。
「まあ、それはともかく、忙しいってなんででしょうね。天気もそんなに悪く無いというか、今日も変わらず晴天ですけど。」
空を見上げると、そこには雲一つ無い青空で太陽が暑苦しく海を照らしていた。
「どうにも波がおかしいらしい。風も吹いてない方向から波が揺れてくるそうだ。」
どうにも忙しい理由も聞いているらしい。忙しくする船員達に空気を読まず話しかける様子が目に浮かぶようだ。
「風も無いのに波が？海流って言う奴じゃないですか？」
確か大陸が東には、北から南に掛けて海流が流れていると船旅に出た直後、船員が説明してくれたのを覚えている。そのおかげで、南へ向かう船旅は早く目的地に着く事ができるとも。
「その海流だって大半は風が起こしているものだろう。だが、今回はどうにも違うみたいだな。船員の一人が嫌な予感がするとか言っていたが・・・。」
随分と不安を感じさせる台詞を吐く船員である。客に向かって、

そのような事を良く言えるものだ。
「なんだか不安になって来ましたね。昨日もちょっと嫌な話を聞いたばかりなのに。」
「昨日も？」
リュンが聞き返してくる。そう言えば、昨日セイリスという少女に会った事を話していなかった。
「いや、もう一組居る乗客の一人と会う機会がありまして、セイリスって言う名前らしいんですけど、こう、とてもとても小さな女の子で。」
アイムはジェスチャーでセイリスの姿を表現しようとする。ちなみにそれで表現される姿は猫と同じくらいの大きさである。
「ああ、あのデカいのと小さいののデコボコペアか。小さい方はまだわかるが、デカい方も女って言うんだから驚きだな。」
随分とこちらも酷い表現だと思う。もう一人が女性だったのは覚えているが、背に関しては覚えていない。
「船に乗ってからは船酔いで他人にあんまり関心が行かなかったせいで、あんまり覚えてなかったんですよ。だから、会った時も新鮮でちょっと話をしてみようかな。という気持ちになりまして。」
ちなみに一度目に会った時は他人に関心を向けていなかった時の事なので、これは二度目に会った時の事である。
「へえ、まあ小さい方は気の良さそうな感じだったから、話にも乗って来ただろ。」
リュンはそう相づちを打ちながら、海の方を見る。とりあえず、話を聞いていない風では無かったので話を続ける事にする。
「ええ、そうなんですよ。それで向こうの方が旅慣れている様だったから海について、聞いてみたんです。」
「それで？どんな事を話たんだ。」
リュンは視線をそのままに話を続けてくる。少し愛想が悪い様な気もするが、彼の態度が悪いのはいつもの事なので、気にしない事にする。

「海の話を聞かせて欲しいと言ったら、海のドラゴンについての話を聞かせてくれました。」
「あー、そりゃあ嫌な話だな。」
詳しい内容を説明する前なのに、そのような感想を言われるのは驚きだ。
「そんなにドラゴンの話って悪い物なんですか？」
「海のドラゴンに関しちゃあ、性格は凶暴じゃあ無いから、他のドラゴンよりはまだマシな方だがな。」
そう言えば海のドラゴンが居るのであれば、他にもドラゴンが居るはずで、その事についてセイリスも話していた。詳しくは聞かなかったが。
「他のドラゴンは出会った時点で命の危険を考えなきゃいけないが、海のドラゴンはちゃんと気を付けてさえいれば、なんとかなる事が殆どなんだよ。」
「じゃあ、どうして海のドラゴンの話が嫌な話になるんですか？」
聞いた限りでは、それほど悪い様には聞こえない。
「気を付けている限りという話だからな。迂闊に近づかなかったり、巣が有りそう場所を前もって知っておくとか、こっちに関心を持たせない、なんていう努力が必要なんだよ。ただでさえ船旅は気を使う事が多いのに、さらにドラゴンの心配までしなきゃいけないとなれば、船乗りにとっては嫌な話にもなるだろう？」
まあ、確かにそうかもしれないが。
「それに、気を付けていてもどうしようも無い状況というのも、稀にだがある訳だしな。天災みたいなもんだ。平穏な航海の途中で嵐の話をする奴はいない。」
リュンは海に視線を向けたまま、遠くを見るような表情を見せる。もしかしたらリュン自身、そういった災難にあった事があり、それを思い出しているのかもしれない。
「なるほど、でもそうなると、ドラゴンに会いたいなんて願ったのは不謹慎だったかもしれませんね。運が良ければ、ドラゴンに会え

るかもなんて思ってましたが、今度は自分が不運な事を祈る事になりそうです。」
ドラゴンに会いたいという気持ちはこの時点で完全に萎んでいた。ここまで、危険である事を教えられればそうなるというものだ。
「いや、多分お前は運が良いほうだと思うぞ。それもとびっきりの悪運だ。」
突然、リュンがそんな事を言い出す。
「はい？何を言ってるんです？」
自分のそんな言葉にリュンは答えるかのように、片腕上げ、指を伸ばしながら、それを海に向けて指す。
「あれを見ろ。」
リュンが指を向けている方向を見ると、海の上に小島が浮かんでいた。
おかしい、あんな所に島なんて無かったはずだ。よく見ると、その島には木も土も無く、滑らかで黒々とした物で覆われている。
「なんですか、あれ。突然、海に現れたような。」
それに不気味さを覚えたアイムは、それを払うためにリュンに答えを聞く。しかし、リュンから帰ってきた言葉はアイムの不安をより一層増大させるものであった。
「あれが海に棲むドラゴンだ。」

船員達が慌ただしく船内を走り回っている。何故あそこまでドラゴンの接近を許したのか。ドラゴンは今どのような様子なのか。そういった言葉も飛び交っているが、皆、その手足を止める事は無い。それほど、ドラゴンは船乗りにとって恐ろしい存在なのかもしれない。
「でもいったい、何が危険なのか今も実感が沸かないんですけど。」
ドラゴンであろう物体は現れた時と同じようにただ、そこに浮かんでいるだけであり、船員達の必至の形相とは裏腹に、何の変化も見受けられなかった。

「とりあえず、今はすぐ何かが起こるという訳でも無さそうだな。今、この船がやっているのは、アレから少しでも船を遠ざけようと、風と波に合わせて、帆や舵を動かしてる状況だからな、船員達はそりゃあ忙しいだろうが。」
ドラゴンの恐ろしさを理解しているであろうリュンがどこか暇そうな様子で、船とドラゴンを観察しているのもいまいち、危機感を覚えない理由の一つである。
「これって、もしかしてですけど、そんなに危機的状況じゃあ無かったりしません？」
「うーん、じゃあアイム、お前、ドラゴンを見て何かに気付く事は無いか？」
そう言われてドラゴンを見る。海の上のそれは、どう見ても、海に浮かぶ不思議な小島であり、それが生物であるとはとても思えない大きさである。様子と言っても、それは現れた時とほとんど変わり無い。あえて、違いを指摘しようとすれば、最初に見た時より、どこかドラゴンが大きくなった様に見える気がすると言ったところである。
「あれ、大きく見える？なんでだ？」
まさかアレが徐々に膨らんでいるという事でも無いだろうに。
「そりゃあ、ちょっとずつ近づいて来ているんだから、大きくなっている様にも見えるだろう。」
なるほど、それなら納得がいく。どうにも、ドラゴンが大き過ぎるせいで、遠近感がおかしくなり、気づく事ができなかった。
「あれ、ちょっとまって下さいよ！近づいて来ているって事は船にぶつかるかも知れないって事じゃ無いですか！」
「ぶつかるかもしれない。というより、ドラゴンがぶつかろうとしているって言った方が正確だろうな。」
リュンの言葉は相変わらず暇そうな雰囲気だが、その内容はかなり過激である。
「なんでドラゴンがぶつかってくるんですか。こっちは何もしてま

せし、恨みを買った覚えも無いですよ。」
「むこうだって、恨みも無いし、危害を加えるつもりなんて無いだろうさ。アレはただ単に、この船にじゃれ付こうとしているだけだ。」
じゃれ付く。そのあまりにも場違いな台詞に一瞬、それがどういう意味だったかを思い出せなくなる。
「じゃれ付くって、なんでドラゴンが船にじゃれ付いてくるんですか。犬や猫じゃあるまいし。」
「犬や猫じゃなくても、そういう事をする動物はいるだろう。ドラゴンだって同じだ。それにアレはまだ子供だろうから、船を自分の仲間か何かだと思ってるんじゃないのか？」
子供？あの巨大な生物を子供と呼ぶのか。
「あれが、子供ってどういう事ですか。」
「子供は子供だ。あの程度の大きさなら、海のドラゴンの中じゃあ小さな方だからな。船と仲間を区別する知恵もまだ無いんだろうさ。」
なら、アレが大人になったらどれほどの大きさになると言うのだろう。しかし、それより心配なのは、ドラゴンが船にぶつかろうとしているという事だ。
「もしですよ、アレが船にじゃれ付いてぶつかってきたら、船はどうなると思います？」
「ドラゴンの体は頑丈だからなあ。この船よりは柔いという事も無いだろう。でも、向こうは仲間にぶつかるつもりでいるから、手加減もそれなりだろうし、下手をすれば船が全壊するな。」
どうしてその様な事を淡々と話せるのか疑問に思うが、今はそんな事をしている状況では無さそうだ。
「そんな事になったら、ここで僕らの命も終わっちゃうじゃないですか。ドラゴン対策に何かできる事って無いんですか？」
「無いな。」
リュンは本当に何でも無さそうな様子で、そう答える。

「無いって、何も？」
「そうだ、無い物は無いんだ。海の上じゃあアレの方が俺たちなんかより、よっぽど強力な存在なんだ。それに対して有効な策といったら逃げる事だろうが、それは船員達がやっているだろうし、俺たちが手伝っても邪魔になるだろうからなあ。」
「追い払うとかは？」
「下手に攻撃して、敵意でも持たれてみろ。今の勢いの比じゃないくらいの強烈な速度でぶつかってくるぞ。今は仲間だと思われてるからゆっくり、優しくぶつかろうとしているんだからな。」
その優しい触れ合いで船が分解してしまったら、泣くに泣けない状況だろうに。
「そんな事言っても、自分の命が係ってるんだから、こんなところでジッとしてなんていれませんよ。ちょっと船がどんな様子になってるか見てきます。」
そう言って、アイムは船の先頭あたりへと走りだした。おそらくは、まず船がどのような航路を取ろうとしているのか、見てくるつもりなのだろうが。
「それが理想的な航路を取ってたとしても、ドラゴンがその気なら逃げようも無いんだけどなあ。」
結局、海でドラゴンと出会えば祈る事しかできない。これは船員だけで無く、旅人の間でも共通の認識なのだから。

走るアイムはとりあえず、船の先へ。先へ着いて、船がドラゴンがいる方向と正反対を向こうとしているのを確認すると、こんどは船の後ろへ。そこでは帆を動かす船員達が動きまわっており、自分がいれば邪魔になるであろう事は理解できた。なので、邪魔にならない様に再び船の先頭へと走る。
このような無駄な行動を繰り返している内に、アイム自身が何をしても無駄である事に気が付き始めた頃である。
突然、目の前に巨大な壁が現れ、それにアイムはぶつかってしま

う。
「おっと。」
壁にぶつかり倒れそうになるところで、突然、壁から声がしたと思うと、その壁から二本の腕が伸びてきた。
その腕にアイムは支えられて倒れずに済んだようだ。よく見ると、壁だと思ったそれは、巨大な女性である。アイムはこれまで生きてきて、女性と関わりを持ってきた事は少ないが、それでも、この女性が他のどの女性よりも大きい体を持っている事がわかるほどのものであった。
「おや、ごめんなさいね。ちょっと、人を探していて前をよく見てなかったから。」
実際はこちらも前方不注意だったのだが、先に謝られてしまう。この巨漢の女性は、服の上からわかるほどの筋肉質な体をしており、その腰にはその体に見合った剣を差していた。それでも、こちらは恐怖を感じなかった。なぜなら、その女性を見る限り、壮年も過ぎた頃であろう年齢である事がわかったからだ。
その今にも力が溢れてきそうな見た目を、年齢による大らかさが上手く隠していると言ったところだろうか。
「ええっと、すみませんこちらこそ。こういう状況だから、ちょっと焦ってて。」
そして、自分が焦ったところで、どうしようも無い状況である事がわかり始めて、茫然としていたところでもあった。
「まあ、ね。お互い仕方が無い事さ。ところで、あんた、もしかしてランドファーマーのアイムって子かい？セイリスが言っていた外見とも合っている。」
突然、セイリスの名前が出てきて驚く。そういえば、セイリスは二人旅であると言っていた。その相方が大きな女性である事はリュンが言っていた気がする。もしかしたら、目の前のこの女性がそうなのかもしれない。
「はい、そうですけど。もしかして、セイリスが一緒に旅をしてい

る女性ってあなたの事ですか？」
「ああ、セイリスから聞いていたのかい？その通りだよ。こんな状況じゃなきゃあ、自己紹介くらいはしてあげたんだけど、今は急いでいるんで、ちょっとごめんなさいね。」
女性はそう言うと、突然、アイムを片手で担ぎ上げて走り出す。
「えっ、え？」
いきなりの展開に混乱するアイムは抗議の言葉も言えぬまま、女性に攫われていく。女性が向かう先は船の前方の様であるが、それよりもアイムは状況を理解するのに必死であった。

「フラウ。いったいこんな時にどこへ行っていたの？昨夜話したランドファーマーの方の容姿を聞いて来たと思ったら、すぐに飛び出して。」
船の前部へと着くと、そこには船で出会った少女であるセイリスが居た。彼女はアイムを抱えている女性に対して話ており、その内容から、この女性の名がフラウという物である事がわかった。
「こんな時だからさ。この危険極まりない状況を解決できるかもしれない、救世主がいるって言うんなら、そりゃあ走ってでも探し出そうとするものさね。」
アイムはフラウの小脇に抱えられたまま、その救世主とやらはもしかして自分の事なのだろうかと、考えていた。
「救世主なんて、アイムさんはそれ程、凄い人物には・・・あら？アイムさん。その様なところで如何したのですか？」
セイリスはようやくアイムの存在に気が付いたらしいが、自分の相方がその少年を抱えているという状況が良くわかっていない様だった。
「いやあ、僕にもさっぱりというか、なんなんだろうね。こんな体験初めてなんだけど。」
実際、今まで女性に抱えられた事なんて、母親以外には無いし、母親も子供を脇に抱えるような人では無かったはずだ。

「説明なら後でいくらでもするさ。でも今はちょっと急ぐからね。悪いけどセイリス、あなたは部屋に戻っておいてくれるかしら。ちょっとこの子に用があるんだけど、あなたがいると話しにくい事なのよ。」
となると、このフラウという女性と二人になるという事だろうか。それは少し不安になってしまう。確かに第一印象は恐怖を感じなかったが、それでもこの巨体は威圧感があるのである。できれば二人きりというのは勘弁してもらいたい。
「なんだか良くわからないけど。フラウが言うなら大事な話なんでしょうね。わかりましたわ。部屋に戻って置く事にします。私が居ても、何かできる状況でも無いでしょうし。」
アイムの願いも空しく、セイリスはこの場を去っていった。フラウは何か自分に用があるらしいが、自分自身に心当たりが無い以上、より一層不安になるだけである。
「あの、とりあえず、ここから降ろしてくれませんか？この状態は少し不安定で。」
ただでさえ船に弱いのに、地に足が着かない状態で抱えられていたせいで、実を言うと船酔いになり始めているのである。
「おっと、そうだね。私も慌てていて抱えたままなのを、すっかり忘れていたよ。」
普通、自分が物を、それも人を抱えている状況を忘れるという事は無いはずだ。
「それで、いったいなんなんですか。なにか僕に用があるとか言ってましたけど。」
アイムは現状を理解しようと精一杯であった。ドラゴンが現れてから自身は混乱しかしていなかったため、何とか自分の状況だけでも知って置きたかったのだ。
「その件なんだけど、あなた達種族の特殊能力に関する話なんだけど、話を続けてもいいかしら？」
突然の話に体が強張る。ちなみにこの感覚は、旅の相棒が自分を

旅に誘った時とそっくりであった。
「あの、それってもしかして、その。」
おそらく、地霊を見る能力を言っているのだろうが、具体的に言ってしまえば、自分から能力をバラす事になるのでもどかしい。
「地霊とかなんだとか言ったものが見えるんだろ。知っているよ。その能力に関する話さ。」
なんとまあ、やはり知っている様である。彼女が自分と同種族という事も無いだろうから、他種族に能力が知られるのはこれで二度目である。
「あのー。もしかして、自分達種族の能力って実はバレバレだったりしませんか。」
話したつもりも無いのに、能力を知っている人物にこの短期間で出会ってしまうと、この様な不安も抱いてしまう。
「安心しな。それを知っている奴なんてそんなに居ないし、こっちから他人に話すつもりも無いよ。余計な恨みは買いたく無いしね。」
「あ、いや、それならいいんですけどね。でも想像してたけど、やっぱりリュン以外にも知っている人がいるんだなあ。」
種族的に隠している事なのだが、どこから漏れたのだろうか。
「それに関しちゃ、そっちも色々あるんだろうけどね。今は非常時だ。その能力を隠さず、利用させてもらいたいのさ。できる限りの配慮として、あの娘を部屋に帰したんだ。嫌だと言っても、選択肢は与えないよ。」
どうにも、船がドラゴンにぶつから無いようにするために能力を使うらしいので、反対するつもりは無いのだが、この様に無理矢理な展開だと少し躊躇したくなる。
「あの、地霊が見れると言っても、海の上じゃあ役に立たないと思うんですけど。」
実際、船旅が始まってから地霊をこの目で見たことが無いのだ。自分の能力が役に立つとは思えない。
「それはあんたがまだ、自分の力について良く知ってないからさ。

安心しな、その力をどう使うかは、私がちゃんと指示してあげるから。」
　そう言われても、ランドファーマーで無い種族に自分達の能力について教えられる事なんてあるのだろうか。
「とりあえず、あの船の先端まで行ってちょうだい。」
　フラウは船の前部を指差す。
「え？ちょっとどう言う事が良くわからないんですけど。」
「だから、その船の先から出っ張った場所に行って欲しいのよ。その方が回りを見やすいからね。落ちないように気を付けるんだよ。あなたが落ちたら、どうしようも無くなるんだからね。」
　そう言うフラウが指差す先には、船から出た一本の棒がある。あまりにも不安的で、危険なその場所は所謂、舳先と言うものであった。

二つ目は海の上（3）

船の舳先に掴まりながら、アイムは自分の命がもう長くは無いのではないかなどと、考える様になった。

フラウの言動は、アイムに拒否権と逃亡権を与える事をしなかったので、今にも落ちそうなこの場所で、必死に落ちぬ様に頑張るしか無い状況なのであるが、どうにも船酔いがぶり返して来たらしく、体に力を入れる事ができない。

こういった状況を助けてくれそうな船員達は、それぞれ忙しいのか、あえて無視しているのか、自分の行動を止めようとはしてくれない。

ちなみに、手を離し、海原へと落ちて行けば、ドラゴンに船を分解される前に遭難する事は確実に思えた。

「あの、いったいそれで何をすれば。もし殺す気なんだったらそう言って下さい。覚悟を決めますから。」

はっきりと言って、この様な状態の自分では出来る事なんて無いのである。それを、わざわざ、舳先に追いやるのは、もう自分の命を奪って生贄にでも捧げるくらいつもりとしか思えないアイムであった。

「ハッハッハ。冗談が言えるくらいの余裕は有るみたいだね。」

冗談のつもりは無かったのだが。

「じゃあ、要件を伝えるよ。あなた、船旅に出てから地霊を一度も見たことが無いって言ってたけど。それは本当かい？」

「ええまあ、そのそれらしい物は一度も。」

地上では、どの様な場所にでも少なからず存在する地霊であるが、海に出てからは一度も見ていない。そのせいで調子がおかしくなり、船酔いの一因となったのだから、間違いは無い。

「船旅中は部屋に籠る事が多かったんですけど、一応、船からの景色を何度か見ましたよ。でも地霊はいませんでした。」

「その見た景色ってのは海の上の景色だろ。海の中は見たかい？」
「海の中ですか？船から乗り出さなきゃ、そんな所見れませんよ。」
危険な行動であるし、船酔いもあったので、わざわざ見る事は無かったと思う。まあ、現状はより危険な場所に居る訳なのだが。
「じゃあ、今は見れる訳だね。ちょっと覗いてみな。」
確かに今は船から乗り出している状況でもある。下を見れば、船の部分より海の部分の方が多いのだ。
「ちょっと怖くて、見たく無いんだけどなー。」
そうは言っても、現在の状況が良くなる事も無いので、覗いてみる。
この船はそう大きく無い物であるが、それでも一個人からすれば十分恐怖を覚える高さであり、目を背けたくなったが、それ以上に目に付く物があった。
「あれ、何か光ってる。もしかして、地霊？なんで海の中に地霊が。」
驚きの発見である。今まで居ないと思っていた地霊があんな場所に隠れていたのだから。地上にいる数より、随分と少ないが確かに地霊である。
「地霊ってのは地面の精霊なんだろ？海だってどこまでも水がある訳じゃあない。その底はしっかり地面が続いているんだから、海を覗けば、地霊が見れる可能性の方が高いさ。」
そう思うと、海にいるという不安もどこか和らいで行く様な気がする。あくまで気の問題であるが。
「まあ、見えた事は新発見なんですけど、それで状況が変わる様には思えないんですが。」
この発見は平時であれば、喜んではしゃいでも居ただろうが、今は状況が状況である。
「ところが大きく変わるのさ。あなたはどうして、あのドラゴンが船にぶつかろうとしているかはわかるかい？」
「じゃれてるんでしょ？船を自分の仲間だと思い込んで。」

それは、先ほどリュンに聞いたことだ。
「そう、つまりドラゴンがぶつかってくるのは悪意の行動じゃあ無いってことさ。」
「それって重要な事なんですか？」
悪意や善意に関わらず、ぶつかってくるから問題なのでは無いだろうか。
「重要も重要だよ。つまり、ドラゴンはこちらに敵意は無いってこと。なら、こちらがお前とは遊びたくないって意思を見せれば、自然とドラゴンは引いてくれるのよ。」
なるほど、ドラゴンがああも巨大で人智を超えて居そうな存在だったから忘れていたが、向こうも一生物に過ぎないのだから、そういった話も通じるはずだ。
「じゃあ、石でもぶつけて嫌がらせでもしてみるんですか。」
「小石なら痛くも痒くも感じてくれないだろうし、大岩ならむしろ反撃してくるだろうね。」
つまり自分の案は不採用という事か。
「この場合、こちらに遊ぶ気が無い事を示す行動は二つ。一つ目は相手が考えている以上の速さで、相手から逃げる事。もしそうなれば、相手はさっさと遠のくこちらを見て、諦めてくれるはずさ。話しかけてくる相手に対してこちらが無視する様な感じさ。」
「でも、そんな事ができれば、そもそもドラゴンに慌てる必要も無いじゃないですか。」
そもそも、ドラゴンより早く動けないからぶつかりそうになっているのだから。
「そう、だからこの案も没だ。となると最後の一つが、これからする行動になるね。」
そうなるだろうか。まあ、そうならなかったら、諦めて海の藻屑になる事を心に決める事になるだろう。
「最後の一つ。相手が泳ぐ事が困難な場所へ行く事。相手がこちらを同類だと思っている以上、こちらがそう行動すれば、仲間が自分

に追い詰められていると見るだろうね。そうなると、こちらが遊びを嫌がって逃げているという意思を理解してくれるはずさ。」
確かにそれはいい案だが。
「ドラゴンが泳ぐ事ができない場所って、どうやって探すんですか。そもそも、辺り一面海なのに、泳ぎにくい場所も何も無いじゃないですか。」
「完全に泳げない様な場所じゃなくても良いのよ。あえて、泳ぎ難い場所へ向かおうとしている。それを向こうが理解してくれればいいんだからね。」
「だからその場所がわからないんじゃないんですか。」
結局、海の底でも覗けない限り、不可能な事なのだ。
「普通はね。でもあなたならそれが出来る。見えるんだろう？海底からの地霊が海の中に。」「あ、そうか。地霊が多い場所は海底が海面に近くなる場所だから・・・。」
「そう、海中を泳ぐドラゴンにとっては、泳ぎ辛い場所という事になる。」
ドラゴンはただでさえ、大きな体をしているのだから、それが僅かな差だろうと大きく影響を受ける事になるだろう。
「でも、ドラゴンがしっかりと理解してくれますかね。なんか体の大きさからして鈍い様な気もしますけど。」
「大丈夫、あれでドラゴンってのは聡い種族よ。上手い事、理解してくれると思うわ。」
聡い？なら、そもそも船と自分の仲間を勘違いしないで欲しい。

説明が済んだ後は、ずっと舳先に掴まりながら海を見ている。少しでも地霊が多い場所をフラウに伝えるためだ。自分がその方向を示すと、フラウはさらにそれを船員に伝える。どの様に伝えたかは分からないが、どうにも船員達は素直にそれを聞いているらしく、船は自分の言った方向に進みだすのである。
「どういう風に話したら、この非常時に船員が言う事を聞いてくれ

るんですか？」
　舳先に掴まるのも慣れてきたのか、世間話をする余裕も出てきた。他人が見たら、随分と可笑しな恰好をしている様に見えるだろうが、これでも命がけの状態なので、結構な進歩では無いかと思う。
「少しこの船の船長にはコネがあってね。だいたいは言う事を信用してくれるのさ。あんたの能力に関してはちゃんと隠しているから安心しな。」
　つまり理由も話さず、自分の言う事を聞かせていると言う事だ。いったいどの様なコネなのだろうか。
「そう言えば、ドラゴンはどうなってます？こっちからじゃあ、良く見えなくて。ここまでしといて、何も効果が出てなかったら、泣きますよ。それも酷く見っとも無く。」
「やめて置きなさい、そこじゃあ危ないわよ。それと、効果についてはちゃんと出ているみたいね。ドラゴンは少しずつ離れているわ。でも、まだドラゴンもこちらの意思を量りかねている状況みたいだから、もう少し続けてもらう必要はあるけど。」
　それなら安心だが。本当に通じているのだろうか、ドラゴンが勢いをつけるために距離を付けているだけでは無いのか。そんな不安が頭の中で渦巻いている。
「意思を量りかねているって、ドラゴンもそこらをなんとか敏感に感じ取ってくれないもんですかね。」
　ドラゴンとはもっと知恵を持った種族だと思っていたが、今回の件で船を仲間だと勘違いするような鈍感生物に格下げする必要があるかもしれない。
「さて、船がもっと迅速に動いてくれれば、理解も早いんでしょうけど、ドラゴンに比べれば鈍足だからね、向こうは逃げるにしては随分と鈍いとでも思ってるんじゃないかしら。」
　という事は、向こうは向こうでこちらを鈍感な生き物だな。とでも思っているのだろうか。
「考える事はお互いそう違わないようなのに、こっちばかりが命を

賭けるなんて不公平な気もしますけど・・・。あ、フラウさんあっちの方がなんだか地霊が多い様な気がします。」
地霊がどことなく多そうになっている、海の方向を指差す。自分では方角自体が良くわからない状況なのでこうするしか無いのだ。
「あっちだね、わかったわ、船員に知らせてくる。」
フラウは返答すると、船員達に次に向かう方向を伝えに行く。ある程度、結果を出している現状があるので、よりスムーズにこちらの指示は伝達されていく事だろう。
「そういえば、フラウが居ない状態じゃあ、こうやって舳先に掴まる必要も無いよね。なんか腕が疲れてきたし、ちょっと降りよう。」
慣れてきたといっても、一歩間違えば海の底である。ドラゴンの脅威が少しばかりであるが、治まってきた現状では、ここに居る方が危険だろう。
「ふう、こうやって甲板と言えども、地に足付けてる状態というのは素晴らしいものだね。」
舳先から甲板に移り、体を伸ばす。ずっと同じ体勢で緊張を維持し続けたから、体が固まっていたからだ。
「船にも慣れてきたかもしれないぞ。船酔いもそんなに感じなくなってるし。」
舳先に掴まるという豪快な行動を取っておきながら、気分はそんなに悪くない。地霊が海からでも見れるという安心感と、突然襲ってきた危機とがなんらかの反応をして、体が船酔いをしなくなったのかもしれない。
「これでドラゴンが去ってくれれば万々歳なんだけど・・・。あれ？」
アイムの視線の先には先ほど、船員に進行方向を伝えに行ったフラウが、何故かこちらに走りながら向かってきていた。
「ちょ、ちょ、ちょっと待って下さい。別にサボっていた訳じゃあ無いですよ。ただ、なんだかあの姿勢を維持するのにも体力がいるというか、これからのために一時休息してただけというか。」

しどろもどろになり、言い訳に成ってない様な言い訳をフラウに話しながら、アイムは喋る。
「何言ってんだい！大変だよ、ドラゴンが急に船から離れだした！」
どうにも、自分を叱りに来た訳では無さそうである。
「離れたんならいいじゃないですか。接近してきたなら問題ですけど。」
要は自分達の努力が実を結んだと言う事では無いか。
「だからって急過ぎる。こりゃあ、あいつ何かするつもりだよ。念のため船のどこかに掴まりなさい。」
そう危機感は感じていないのだが、フラウの様子がどうにも鬼気迫る物であったので、つい船に掴まる。
そして、それと同時に船が突然揺れだしたのである。
「な、な、なんですか、これ！揺れてますよ。海の上なのに！」
「ドラゴンが激しく海中で泳いでいるのさ。本気で動けば、これくらい海が揺れるのがドラゴンなのよ。」
そう話す間も、船の振動は続く。むしろ激しくなっている様に思える。これでは、ドラゴンにぶつかる前に船が分解してしまいそうだ。
「どんどん激しくなってる。いったいドラゴンは何を・・・。」
そう言った瞬間、海が爆発した。いや、爆発したのでは無く、海から何か巨大な物が跳び出したのだ。
「あれが、ドラゴン？」
まさしくそれはドラゴンだった。魚の様な姿をした、それでいて鱗が無く、まるで海を支配するために生まれたような、余りにも巨大なそれは、確かにドラゴンだったのだ。
ドラゴンは船の上を移動する。海から跳ね出たドラゴンは、船の上を通る様に弧を描きながら、海から海へと飛んだのだ。
それはかなりの速さで、一瞬の事だったのだろうが、ドラゴンの巨大さとその衝撃からどこかゆっくりと飛行している様にも見えた。
「急いで伏せて、何かに掴まれ！」

その言葉はフラウが言ったのか、それとも他の船員が言ったのか、良くわからない程の絶叫で、確かにアイムの耳に届く。
考える間も無く、船が今まで以上に激しく、まるで縦も横も無い様に揺れる。ドラゴンが海に着水したのだ。
アイムは振動で船に叩き付けられるが、これ以上、翻弄されてはたまらないと、叩き付けられた甲板に爪まで立て、必死に掴まる。
ドラゴンの着水と同時に上がった水柱が雨の様にアイムの体に降り注ぐ。その勢いに目も開ける事ができなくなる。
そのせいか、振動が止み、水柱が無くなった後も、自分が本当に無事なのかがわからない状態になってしまった。
恐る恐る目を開けると、そこには水に濡れた甲板と、自分と同じような姿勢のフラウが映った。
なんとか、自分も船も無事の様だった。
「そうだ、ドラゴンは！」
急いでドラゴンが着水した場所を見るも、そこにはドラゴンの姿は存在しなかった。
「どうもドラゴンはこっちが自分の仲間じゃないって分かってくれたみたいだね。」
甲板から起き上がったフラウが、びしょ濡れの服を気にする様に見ながら、こちらに話しかけてきた。
「分かってくれたって、それにしては随分と荒っぽい行動ですけど。」
なにより、船が壊れかねない程の行動を起こされては元も子も無い。
「それでも、海からドラゴンは見えなくなっただろう？もう、船にぶつかる気も無くなったってことよ。最後のアレは、多分ドラゴンなりの謝罪なんじゃないかしら。」
それは、なんとも豪快な謝罪も有ったものだ。あまりにも激しく強大なそれに自分も船も翻弄されるだけだったのだから。
アイムは今なら、ドラゴンと自分とは棲む世界が違うという事を

理解できそうな気がした。

ドラゴンはそれっきり姿を現す事は無く。遭遇の日から一日が過ぎて、海に大陸が見え出すと、ようやく安心する事ができた。

ドラゴンがあの様な行動を取った原因となるかもしれないアイムであるが、むしろ船員達から感謝される結果となった。そもそも、ぶつかろうとする、ドラゴンを回避させるための行動であり、結果としては船を無事、港に到着させる事ができる様になったからだ。と言っても、ランドファーマーの能力をバラす事は出来なかったので、感謝の言葉は指示を出したフラウに集中していた。アイムに対してはそれの補助をしていた程度に認識されているはずだ。

アイム自身に不満は無かった。というより、それを感じる様な心情では無いという方が正しい。

アイムは遭遇からずっと海を見ている。船酔いが治ったという事もあるが、それ以上に、あの衝撃からまるで夢が醒めないかの様に、海に惹かれ続けている。

「あのドラゴンを何とかしてしまうなんて、大したものだな。」

海を見るアイムの背後から、誰から話しかけてくる。この声はリュンだ。

「大したものって、ドラゴンをなんとかした訳じゃないのに、それは言い過ぎですよ。」

あの強大な力の前では、自分の行動はとてもちっぽけな物だったのだと考えてしまう。

「それでも、船をドラゴンから守る事が出来たんだ。十分な結果だろ。」

「そうですね、そうかもしれません。」

フラウからも似た様な事を言われたが、嬉しいと感じる事が出来ない。

「どうにも悩んでいるらしいな。いや、悩んでいるというのも違うか。」

「はい、なんだかあのドラゴンの姿が頭の中から離れないんですよ。」
確かにドラゴンの力は強大で、あまりにも自分達とは棲む世界が違うものである。それを理解した今、ドラゴンを恐れる様になると思っていたのだが。
「なんか、凄いって思っちゃって。あの姿をもう一度見たいなんて考えている自分が居て。」
もちろん、その度に命を賭けるなんて真っ平なのだが。
「あー。そうだな、自分より何もかもが強い存在と出会うと、そんな風に感じる奴もいるんだよ。多分、お前もそれだ。」
船はどんどん大陸に近づいていく。そろそろ、港が見えてくる頃からもしれない。
「そうなんですか？じゃあ、何か解決法とかもあったりしますか？」
もうここまで陸に近づくと、あのドラゴンに遭う可能性は暫く無いだろう。
「無いよ。それは憧れに近いからな。でも、暫くすれば薄れていく感情でもある。」
もしかしたら、二度とあのドラゴンとは遭わないかもしれない。むしろ、そちらの可能性が高い。
「そんなものですか。なんか、もっと心の中がモヤモヤする様になったんですけど。」
「仕方の無い奴だな。じゃあ、あのドラゴンに関する事でも教えてやろうか。相手の事を良く知れば、憧れが消える事もあるしな。」
少し興味が沸く。
「でも、消えますかね。どれだけ聞かされても、あの巨体は忘れられないというか。」
あれでもまだ、子供だと言うのだから、その驚きは一層強くなるというものだ。
「ああ、消える、消える。その事って言うのはな、あのドラゴンの名前の事だよ。海のドラゴンじゃなくて、ちゃんと船乗りが呼ぶ名

前があるんだ。」
「名前って、例えば間抜けな名前だからドラゴンに対する憧れも消えるとか？」
「その通り、結構、本当に間の抜けた名前だぞ？なんと言ってもな、船乗りはあの海のドラゴンを“クジラ”なんて呼ぶんだからな。」
「クジラ？クジラですか？それはなんとも。」
個人的にだが、確かに間の抜けた名前である。船乗りもどうしてそんな名前を付けたのやら。
「どうだ？少しは憧れも無くなったか？言っとくが、この程度で気が抜けられたら困るんだからな。これから旅を続けるんだ、衝撃的な出来事なんてのは何度も遭遇するんだぞ。」
「そうですね、でも、気が抜けた訳じゃあ無いんですよ。ただ、なんだか心の奥の方でワクワクするんです。もし、これからこんな体験を何度もするんであれば、それは、凄く面白い事なんじゃあないかななんて、そう思ってるんです。」
確かにそれは危険で命がけの事かもしれないが、自分はそれを望んで旅に出た筈だ。気を抜くなどと言う勿体の無い事なんて、している暇も無いのである。
アイムは海を見る。クジラに遭った事以外は順調な航海であったはずだが、なかなかに楽しい物であった。これから、もっと旅が波乱万丈になって行くのであれば、それはさらに楽しくなって行くという事だろう。

三つ目は仲間の数（1）

馬車に揺られながら見る風景とは、代わり映えの無いものであっても、どこか心を躍らせてくれる。

ランドファーマーの少年、アイムにとってもそれは同様であり、揺れる風景を見るだけで、自分は旅をしているのだと実感していた。

また、少し前までが慣れない船旅だったせいで、彼が風景の一部として見る地霊を普通に見る事が叶わぬ状況であった事も、この馬車から見る景色を好ましく思う要因の一つであった。

地霊とはランドファーマーだけが見れる精霊の一種であり、大地に多く棲む。大地には地霊が存在して当たり前であり、一方で海ではあまり見る事ができない存在でもあるので、船旅が終わり、地霊が豊富に見れる大地が、再びアイムの目に飛び込んできた事は本人にとって嬉しい事であった。

さて、そんな船旅を終えたばかりのアイムが何故、今度は馬車に乗っているのかというと、同乗者に原因がある。

本来であれば、アイムとその旅仲間であるツリストのリュンは、船が着いた港町で一泊し、早朝に町を出発する予定であった。

それはもちろん徒歩での旅であり、旅の商売を始めたばかりの二人にとっては、金の掛かる馬車に乗るつもりなど無かったのである。

ところが船から降りてすぐ、同じ船に乗っていたもう一組の客、セイリスとフラウという女性の旅人が話しかけてきた事で状況が変わった。

「船の時はありがとうね。何かお礼が出来ればいいんだけど。こちらで何かできる事は無いかしら。」

確かフラウの方がそう言って、アイムに話しかけてきたはずである。

お礼はとは船であった事件の際、アイムがその解決に少しばかり力を貸した件の事を言っているのであるが、アイム自身、自分はそれ

ほどの事をしたつもりが無いので、当初はお礼など結構であるという旨の言葉を返していた。
ただ、話の途中で彼女達の目的地についての話が出た時、アイムの相棒であるリュンの目が変わる。
どうにもリュンも同じ目的地を目指すつもりだったらしく、彼女達がその目的地へ向かうのに馬車を使うという話を聞いた時点で、フラウが申し出たお礼が、その馬車に同乗させて貰うという事になったのである。
何故、自分へのお礼を相棒が決めてしまうのか、少し疑問に思ったアイムであったが、自分にとっても利益がある話だし、これでお互い貸し借り無しで気分良く、話を進められるならそれでも良いかという気持ちになったのだ。
それに、その目的地にも興味があった。何故ならこれから向かう目的地は、この大陸でもっとも大きな力を持つと呼ばれる、大陸中央の国家、フィルゴ国であったからである。

「港からフィルゴ国までは、どれくらい時間が掛かるんですか？」
馬車からの景色も、そろそろ見慣れてきたので、アイムは隣に座る相棒のリュンに話しかける。
「そうだな、歩いてだとシライからヒゼルまでの距離と同じくらい時間が掛かった気がするが。」
「馬車なら明日の朝には着くと思いますわ。」
リュンが言葉を返したすぐ後に、目の前に座る少女、セイリスが話しかけてくる。小さな彼女は、その見た目に反して旅慣れた人物であり、リュンの発言も合わせると、信憑性のある話であった。
ちなみに、彼女の相棒であるフラウは馬車の御者をしている。どうも、乗り合い馬車を馬車ごと借りたらしい。貸した側は彼女を信頼して任せてくれたらしく、彼女がいったい何者なのか少し気になるところであった。
「へえ、案外近いんだ。大陸の中央ってくらいだから、もっと内陸

にある物だと思ってたな。」
「ヒゼルは大陸西側から出っ張る半島の様な形になっていますから、そこから大陸に沿って南下していけば、自然と東の大陸中央側に入り込んで行く形になりますの。ちょうど、その半島の根本あたりにあの港がありますから、フィルゴに船で向かう上で、もっと近い場所だったという事になりますわね。」
なるほど、ならば、あの港はフィルゴの海側の玄関口と言ったところなのだろう。
「お嬢さんは、随分と地理について詳しいが、旅にはそんなに慣れているのか？」
リュンが口を開きセイリスに話しかける。そう言えば、彼がセイリスに話しかける所はあまり見ない。いったい、何を聞くつもりなのだろう。
「ええ、物心付いた頃にはもうあちこちの足を運んでいましたわ。」
旅に慣れていると言っても、自分より少し経験がある程度だと思っていたので、思った以上に経験がある事に驚く。
「もしかして、フィルゴが故郷だったり？」
何故その様な結論になるのか分からないが、どうにもリュンは確信しているらしく。あくまで確認のために聞いているといった顔をしながら、セイリスに問いかける。
「あら、どこかで喋ったのかしら。その通りですわ、実を言うとフィルゴへは仕事を終えて帰る途中で。この馬車を貸して頂いたのも、相手が顔見知りだったからですの。」
これで謎が一つ解けた訳だが、一方でリュンが何故、セイリスの故郷を言い当てたのかという謎が追加される。
「そうだったのか。」
それに反して会話はここで終了してしまい。アイムの疑問は深まるばかりであった。疑問の答えが聞けたのは、日が落ち、夜が来てからの話だ。

日が暮れてくると、馬車の御者をしていたフラウが、御者を交代して欲しいと言ってきた。
「せっかくタダで載せてあげたんだ、それくらいはやって貰ってもいいんじゃないかしら。」
その様に話すフラウの提案を、既にリュンは想定済みだったらしく、素直に御者席へと向かう。そう言えば、昼間なのにリュンが馬車内で仮眠をとっていたのを思い出し、こういった事への備えだったのだとわかり感心する。
ただ、それと同時にアイムにも御者席へと来る様に施したのは、アイム自身にとっては想定外の出来事であった。
「こいつに馬車の動かし方を教えたいんだが、連れて行ってもいいか？」
どうにもそういう意図があるらしいが、それだけでは無いとアイムは直感する。それほど長い訳では無いが、これまでの付き合いの中で、リュンが自分にとって意外と思う行動をする時は、きっと一癖も二癖もある事を考えているに決まっていたからだ。
フラウはリュンの意見に特に反対する様子も無く同意して、自分とリュンは御者席へ向かう事となった。
御者席は客席から布で区切られており、布自体も結構な厚手なので音もある程度遮られている。元々、乗り合い馬車用なので、客と御者をしっかり区分けする様に出来ているのだろう。
この様な場所へと二人で移動したのは、客席へ残る女性二人に隠す必要がる話をするつもりなのでは無いだろうかと考えたが、移動してすぐは、フラウに言った様に馬車の動かし方についての説明を実演も交えて教えてくれるだけであった。
説明が一通り終わる頃には、かなり夜も更けており、客席を覗くと目を閉じ寝ているフラウとセイリスが居た。
そうしてアイムが再び御者席に戻った時である。リュンは口を開いたのは。
「どうして、中の二人の故郷がフィルゴ出身だと俺がわかったのか

聞きたいか？」
突然そんな事を言われ、少し混乱するが、内容を理解すると昼間に疑問に思った事だったので、是非聞きたいと返した。
「あの二人の関係について、船で見てから考えていてな。片方はいかにもな体系で護身用の剣まで持っているのに対して、もう一方はあんな華奢な見た目をしている。だと言うのに華奢な方もそれなりに旅慣れているとなれば、そりゃあどんな関係が気になるだろ？」
「まあ確かに。もしかしてどこかの国のお姫様と護衛だったりとか。」
これはちょっとした冗談であり、リュンも笑いで返してくる。
「それならちょっと浪漫を感じるが、まあそんな風でも無いだろ？実はちょっと心当たりがあって、船から降りてから観察して見たんだが、馬車を借りた時点でピンと来た」
観察とはまた奇特な趣味だが、リュンならそういう事も周りを気にせず出来るんだろうなと思えてしまう自分がいる。
「乗合い馬車を借りられるって事は、信用されている人物で、信用されているのはファルゴ出身者だからって推理ですか？まあ確かにピンと来ますね。」
だが、それだけではただ馬車の貸主と顔見知りで親しくなっただけという可能性もあるだろう。
「いや、それだけじゃあ無い。むしろピンと来たのは彼女らの職業だ。その職業はフィルゴ国特有の物だから故郷もフィルゴ国なんじゃ無いかと推測したんだ。」
「フィルゴ国特有の職業ですか？そう言えば教師みたいな事をしているって言ってたような。」
確かセイリスが船で言っていた気がする。まあ、みたいなものという事であり、正確には違うのだろうが。
「教師か、そりゃあまた上手く言った物だな。」
「やっぱり教師に近い職業なんですか？」
「そうだな、教師に近い、物を教えるという事を仕事としているか

らな、もしかしたら、教える内容が違うだけで、やっている事は俺達と似たような事をしているかもしれん。」
　自分達と近い事をしているとはどういう事だろうか、自分達は町や国を巡り、農業知識を売り歩くという仕事をしている。まあ、仕事と言っても、その商売をした例は一件しか無いし、その報酬も船に乗せてもらうという程度の物であるが。
「つまり、彼女達も自分達の知識を売り歩いていると。でも、なんで彼女達の仕事がわかるんですか？」
「そういう事は本人達に向かって言うなよ。多分、怒るからな。彼女らの仕事がわかった理由だけどな、さっき言った二人の体格の差からおおよそ予想ができるんだよ。片方の体格が大きく、戦闘向きな恰好をしている。それは護衛のためだ。そして、護衛対象は小さな彼女だな。彼女は旅慣れているのに、その様な雰囲気が無い。どこかか弱い様子ですらある。そしてそれは教える側に恐れや敵意を抱かせないため。」
「体格だけで、よくそれだけわかりますね。むしろ、妄想と言われても仕方無いですよ。」
「妄想とは酷い言い方だな。一応、似たようなコンビの旅人ってのは何度か旅先で会った事があるんだよ。そして皆、同じ職業だった。今回のコンビはむしろ分かり易いくらい、役割が分担されてるように見えるな。」
　なるほど、前例があるのなら単なる妄想とも言えまい。
「そして、フィルゴ国周辺に一定の信用があるのなら、間違い無く、その職業であると。いったいなんなんですか、その職業って？」
「フィルゴ国にはな、国に直接認められた宗教がある。名前は純血教と言う。彼女達はその教義を他国へ広める宣教師だ。」
　宣教師？つまりまさしく教師の一種と言う事か。だけど受ける印象がだいぶ違う感じもする。
「そもそも、純血教って言うのが良くわからないんで、どんな物かもまったく理解できないんですが。」

「純血教についてはちょっと複雑でな、長くなると思うからフィルゴに着いてから説明してやるよ。それより、彼女らに出会えたのはチャンスだ。」
　リュンは彼の悪い癖の一つである、嫌らしいニヤリという笑みを浮かべる。この笑みを浮かべるリュンは見ての通り、碌でも無い事を考えているので注意が必要だ。
「チャンスですか？また、何か悪巧みでも？」
「悪巧みって・・・。俺は今まで、癖の悪い事はしてきたが、誰かに危害を加えてきた事は無いぞ。」
　どっちにしたって悪巧みに違いはあるまい。
「まあ、それよりこのチャンスだ。彼女らは俺達に似たような仕事をしている。しかも、その仕事は俺達よりずっと経験があるはずだ。これをきっかけにコネでも作っておけば、俺達の仕事にも利益になる可能性が高い。」
　つまり、彼女達の仕事経験を盗もうと言うのだろう。
「なにか、気が進みませんね。相手の了承が無ければ、まるっきり悪い事ですし。」
「誰が相手の同意を得ないと言った？むしろ相手に公認して欲しいくらいだ。」
　怪しい話である。顔のニヤつきを抑えていない時点で、何か裏があるはずだ。
「そもそも、同意を得るつもりならここで隠す様に話す必要も無いじゃないでしょうに。」
「同意を得るのは彼女らからじゃない。目的は純血教そのものに俺達の仕事を認めてもらう事だ。彼女らには、純血教と話し合えるきっかけを作りってもらいたいのさ。」
　ほら見ろ、碌な考えじゃない。アイムはリュンの考えにうんざりしながらも、まあ、それくらいなら良いかな、などと考える自分にも少し嫌気が差しそうだった。

朝になり、フィルゴ国を肉眼で確認できる距離まで近づいた時、心が大きく揺さぶられるような衝撃を受けた。フィルゴ国の回りには壁がどこまでも続いており、どこまでも大きく長いその壁は、まさしくフィルゴ国の力を示す様な物だったからだ。

「この壁って、もしかして都市全体を囲ってたりする？」

アイムは、この国を良く知っているであろうセイリスに詳しい話を聞きたくなった。

「そうですわね、この壁はフィルゴ国の象徴のようなものですから、都市の主要部分を覆っている事は間違いありませんわ。けれど、国が発展すれば、その領土は広がる物ですから、すべてを壁で囲っている訳でもございませんの。」

すべてを囲っている訳では無いと言っても、この光景を見ると、国の大半が壁に覆われている様に思える。

これなら、一目でこの国が大陸で最も力を持っていると納得できようものだ。

「外壁が立派な分、入国の際の審査も厳しいぞ。前に来た時は、1日丸ごと審査に潰されたって言うのに、国内滞在期間は1週間しか許されなかった。」

セイリスの話に追加する様にリュンが続けて話をする。どうにも批判が混ざっているようであるが。

「滞在期間なんてのも決められるんですか？」

アイムにとっては聞きなれない言葉だ。

「外来人に長期間滞在されて、スラムでも作られたら堪ったもんじゃないからね。こうやって壁を作って外からの危険に備えてるのに、内側から国が駄目になったんじゃ元も子もないしね。国内で仕事を見つけて住もうとする前提なら、もっと長い滞在期間が認められるし、一定の信用さえあれば永住権だって貰えるわよ。」

リュンの批判をフォローするのはフラウだ。厳つい体を少し不機嫌そうに揺らしているのは、自分の国をリュンに批判されたと思ったからだろう。

「それでも、滞在期間についてはそうかもしれないが、入国審査については時間が掛かりすぎだろう。前に来た時だって対して荷物を持たない一人旅だったのに、審査のための個室に一日中詰め込まれたんだぞ？今回は倍の二人だから、審査時間も倍か？」
「どうせ怪しい物でも持ってたんじゃないのかい？審査官も無能じゃないんだ、意味も無く審査を長引かせたりしないわよ。」
まずい、口喧嘩に発展しだしたようだ。セイリスなどは、二人の様子を見てあからさまにオロオロしだした。
「その怪しまれた物が商売道具だったんだよ、旅商人が商売道具を疑われたらどうしろって言うんだ。」
「どうせ、その商売道具とやらも碌な物じゃあ無かったんじゃない？入国を足止めされるくらいにはね。」
そろそろ、止めた方が良さそうなので、アイムは少し気を入れて会話に入る事にする。
「まあまあ、二人とも抑えて。実は僕、フィルゴ国には興味を持っているんですが、そうやって入国前から喧嘩をされたら、ちょっと興ざめしちゃいますよ。お願いしますから、ちょっと止めてくれませんか？」
「そうですわ、二人とも。それに今回は私たちが一緒に入国しますから、それほど審査が長引く事もないでしょうし。」
アイムの仲裁に続く様にセイリスも喧嘩を止めようとする。リュンとフラウはお互いの相棒から止めが入ったおかげか、言葉を止める。
「そうそう、いくらいがみ合っていても、外見上は仲良くしておくのが大人ですからね。そのままお互い我慢し合えば・・・って、セイリス、さっき審査が長引かないって言ったけど、どういう事？」
アイムは喧嘩する二人を止めた事で、一定の満足感を覚えたが、それ以上に気になる事をセイリスが話していたので、そちらに気が移る。
所詮、喧嘩の仲裁なんて自分に火の粉が飛ばない様にするのが目的

であり、自分の興味を満たしてくれる話の方が、アイムにとっては重要なのである。
「え？あ、はい、私とフラウはこの国の出身者なので審査官からの信頼がありますし、私達と居れば、アイムさん達の入国も早まるのでは無いかと。」
戸惑うセイリスであるが、なんとかアイムの言葉を理解し、答えてくれる。
「ちょっと待ちなさい、セイリス。この二人と一緒に入国する気なのかい？確かにこの二人は入国が早まるかもしれないけど、私たちにとっては遅くなるということなのよ？」
確かに国内出身者だからといって、同行者に外来人を連れていれば、審査官の方も慎重になるだろう。
「でもフラウ。あなたはアイムさんに借りがあるって言っていたじゃない。それって馬車に乗せるだけで返せるものなのかしら？それにどうせ返すなら、逆に向こうが恩を感じるくらいの方が良い関係を築けるというものですわ。」
確かにこちらにとっては嬉しい話である。フラウに貸した借りというのも、正直、それ程の物では無いと考えているので、こちらが恩を感じるという点も正しい。
「だけどね、セイリス・・・。ああ、もう、わかったわ、あなたは決めるとなかなか考えを変えないものね。」
どうにも、入国の際には彼女達の助けがありそうである。
ところで、この問題の原因となったリュンであるが、さすがに気まずいのか、先程から黙ったままだ。
「決まりよ、あんたたち。入国審査の時は、私たちが同行してあげる。これでも、国内じゃあ、ある程度信用がある立場なんだ。審査だって半日もかからず終わるはずだわ。」
話し合いが終わり、今後の方針が決まる。考えてみれば、フィルゴ国に着いた時点で解散するはずだった相手が、この方針のおかげで、もう少し長く居られる事になったのだろう。

ただ、それが吉と出るか凶と出るかは、それこそ相手しだいと言ったところであった。

そして入国審査が終わった現段階では、彼女たちと居られた事は幸運な事であったと言える。

何故なら入国審査の際、こちらを見て警戒感を隠そうともしない審査官が、セイリスたちの目線を移すと、とたんに優しいオジサンと言う様な表情になったからだ。

これほど、外来人と国内人で対応を変える人物を見たのは初めての事である。

もし、セイリスたちと同行して居なかったら、リュンの言った通り、荷物確認だけでも一日掛けて調べ上げられていた事だろう。

まあ、それも仮定の話であり、無事に入国できた現状では、深く考える必要も無いと思われる。

「ということで、これで借りも返したんだから、ここらでお別れという事になるのかしら。」

フラウの言葉で、もう二人と同行する必要も無い事に気付く。

「そういえば、そうですね。今回の事は何から何までありがとうございます。」

「そこまで言われる程の事でもありませんわ。こちらにとっては、それほどデメリットのある事でもありませんでしたから。」

なるほど、確かに言われてみれば、彼女たちがこの国に来るのは、彼女たち自身の意思であり、アイムたちはそれについて行っただけに過ぎない。彼女たちがそれで被った損害と言えば、時間のロス程度の事でしかない。

「それでも、すごく助かったよ。何より、旅が順調に進んだ事が一番の良い事だったからさ。」

未だに船に乗った時の事件が頭に残っているので、フィルゴ国までの道のりが平穏無事に終わったのは、本当に嬉しい事であった。

「あなたにそこまで言われると、こっちが少し申し訳無く感じるわ。

あなたが居なければ、命が無かった可能性だってあったんだからね。まあ、そっちのツリストには礼の一つでも言って欲しいもんだがね。」

若干、別れの言葉に挑発が混じっていた事で、空気が悪くなった様な気がする。フラウの言葉で、このまま再びリュンとの喧嘩に発展してしまうのでは無いかと思ったのだ。

「・・・。まあ、この国を悪く言ったのは、こちらが悪かった。だがそれも、前回この国に来た時に結構な扱いをされたからなんだぞ？」

しかし、リュンの口から出たのは謝罪の言葉であり、その事にアイムは驚く。リュンという男は、挑発に嫌味で返すような男であると、アイムはずっと考えていたからだ。

「正直、ちょっとこの国は排他的なところは認めるわ。それでも、良いところはたくさんあるのよ。そこらの所を、滞在中に知ってほしい限りね。」

リュンの言葉に棘が無いのを感じて、フラウも穏便に返してくる。どうやら、これで口喧嘩に発展する心配は無さそうで、アイムは胸を撫で下ろした。

「あー、だったらなんだ、君らの上司にでも礼を言わせてくれないか？純血教徒なんだろ、君たちは。」

ここで、彼女たちの職業にこちらが気づいている事をバラすというのか。リュンの真意を掴めないアイムは混乱するばかりだ。

「やっぱりわかるかい？」

リュンの言葉にフラウはそれ程驚く様子も無い。どうやら、旅慣れている物には彼女たちが純血教徒であるという事はわかり易いのかもしれない。

「入国審査の際に、審査官の信頼が厚い様子を見てな。国内人と言えども、よく旅をする様な奴じゃないと、審査官に信用されるなんて事無いだろ？」

本当はもっと前から気づいていたくせに。そんな言葉を言いたく

なるが、リュンは意味の無い嘘を吐く奴では無いので、何らかの理由があるのだろうと、言葉を飲み込む。
「まあね、それで？どうして私たちの上司に礼をするのかしら、私たちに直接言えばいいじゃない。」
「当然、君たちにも感謝してる。だからさっき謝ったんだ。けど、入国審査が上手く行ったのは、君たちが純血教徒である事が大きいからな、とりあえず筋は通して置きたいんだよ。」
「ふむ。旅人ってのはそんなに義理堅いもんかね。まあいいさ。上の司祭に話を通してあげるよ。旅の途中で同行する事になった奴らがこちらに礼をしたいみたいだってね。」
「そうしてくれると助かる。」
あれよ、あれよと話が進む。どうにも彼女たちの上司に会う事になった様だが、これは当初、リュンが予定していた事では無かっただろうか。
そんな事も知らずに、フラウの横に立つセイリスなどは、それは素晴らしい事ですわ。と手を合わせて喜んでいる様子である。
「それじゃあ着いてきな、私たち純血教の本部に案内してあげるよ、」
フラウは話が決まると、その大きな体でフィルゴ国をまさしく我が物顔で進んでいく。その横ではセイルスが小さな体で必死に付いて行こうとしているのが微笑ましい。
そしてこちらは、その二人からそれとなく離れて、小声で話すことにする。
「あの、純血教本部に向かうのって、昨日の夜、話した件についても都合の良い事じゃありません？」
純血教に自分達の仕事を認めて貰いたいのだから、本部に向かえるというのは都合の良すぎる展開である。
「あたりまえだ、そのために態々、意味の無い口喧嘩までしたんだからな。そういう風に話が向かってくれなければ困る。」
「はあ？どういう事ですか。え？あれって演技だったんですか。」

どうにも、リュンらしくない行動をしているなと思ったらそういう事か。
「前来た時に入国審査で邪見に扱われたっていうのは本当だぞ。ただ、それで気分を悪くしたというのは言い過ぎだったな。旅をしている以上、それより酷い扱いをされた事なんて何度もあるんだ。気にもしなかった。」
「じゃあ、その後、柄にも無く謝ったのも、旅人としての義理を果たしたいというのも。」
「まあ、普通に合わせてくれって言っても、怪しまれかねないからな。なんとか自然な方向で純血教本部に向かえないものかなと。」
なんという奴だ。これだからこの男は信用できないのだ。これからは、こいつの行動、一つ一つ注意して見ていかないといけない。
そんな事を考えるアイムは、フィルゴ国に入国したばかりだと言うのに、ドッと疲れた気分に襲われるのだった。

三つ目は仲間の数（2）

純血教の歴史は大陸がかつて一つの帝国によって統一されていたという、フィルゴ国の伝説に描かれている。ちなみにその伝説とは、帝国の創始者はフィルゴ国の王の先祖であり、この伝説はフィルゴ国の権威が大陸全土にまで及ぶという事を語るものなのだそうだ。

純血教が生まれたのは、帝国末期、領土と国民が国を分裂させる程、力を増大させ、帝国がその飽和状態により、瓦解する事をだれもが予想できる様になった時代であるという。

その時代、帝国崩壊が、戦争や内乱によってのものでは無い以上、帝国の文化や技術、知識と言った物は、崩壊後もそれらを維持していく必要があると考える集団が居た。その集団は帝国文化を記した文書をまとめ、さらにそれが時代遅れにならぬよう、常に研究、発展、広報を行える組織を作る事になる。

「それが純血教の始まり？」

「ええ、ですので純血教には他の宗教のように、特定の神を信奉しているという訳では無く、便宜上、帝国創始者である、初代皇帝大フィルゴを帝国文化の象徴として奉っているのです。」

純血教本部に向かう道のりで、アイムの純血教を知らないという言葉から始まったセイリスの純血教講座は、本部に着いてからも続いている。さすがにアイムも疲れてきたが、相棒のリュンが、これから純血教に関する知識が必要になるかもしれないから、しっかりと聞いておく様にという、言葉を残して、フラウとどこかへ行ってしまったので、聞き流す事も出来ずにいる。

「でもさ、じゃあなんで純血教なんて名前なのさ。フィルゴ教とか帝国教とかでも良いんじゃないかな。」

講座は純血教本部内の、まさしく講義室と言った様な場所で続いている。なんでも、一般国民のために純血教の教えを、ここでいつも公開しているらしく、今日は特に講義室を使う予定が無いそうな

ので、個人講座という名目で貸してもらっている。
　ただ、聞いている側にとって、この講義室という部屋の構造というものが、何故か眠気を増大させる物でしか無いというのは皮肉な話である。結果、アイムは眠気と飽きに襲われながら、セイリスの話を聞くのに必死になっている。
「帝国を象徴する法律の一つに純血法という物がありますの。そこから名前を貰っているという訳ですわ。」
　一方、セイリスはと言うと、こちらの気持ちを知らずに嬉々として純血教についての知識をこちらに教えてくる。薄々、思っていた事だが、もしかしたら彼女はこういった事が好きなのかもしれない。
　さて、セイリスが説明する純血法についてだが、異種族間でその婚姻と子供の混血を禁止するという法律であるらしい。基本的に現在も異種族で恋人になったり夫婦になったりというのは、異端とされる雰囲気があるのだが、帝国では2，3年程、牢屋に入れられる様な違反行為でもあったそうだ。
「純血法は種族間での不平等や差別を極力無くすために、初代皇帝か帝国を支える柱として作った法律ですの。そのような皇帝の考えを継ぐという形で名前を頂いているのです。」
「混血を許さないってのは、むしろ差別的な視線があるようにも思えるんだけど、そこの所はどうなの？」
　アイム自身、何故か分からないが、さっきから質問ばかりしている。なんというか、この部屋の雰囲気がそうさせるのか、セイリスが教師で自分が生徒という図式にどんどん嵌っていっているのである。
「一見するとそうですが、実際、国の行政と擦りあわせてみると、むしろ混血を進める方が種族間の対立を深める傾向にありますの。例えば、国内で混血が進んだ場合、結果的に人口が多い方の種族が有利に働きます。今も昔もそういった事で得をする種族と言えばわかりますかしら。」
「混血が進めばエルフが得をする様になるって事か。」

この大陸でもっとも繁栄している種族と言えば、それはエルフである。それもそのはずで、エルフは特定の土地に何代も棲む事で、その土地に適応した体になるという、特殊体質を持っているからだ。前に居たヒゼル国にしても、海に適応したシーエルフの国であるし、山へ行けばマウンタエルフに森へ行けばウッドエルフにと、その体を適応させて行く。大陸でもっとも繁栄するのも頷ける能力なのである。

ちなみに、2番目に繁栄しているのは、大陸全土に商売権を持つツリストで、3番目に人間、ランドファーマーはその次くらいで、ドワーフも同じ程度だろうから、実質最下位といった位置づけだ。

「その通りですわ。帝国創始者の種族もエルフでしたから、混血を進めたら、他種族からの批判が大きくなるのは確実でしょうし。」

「へえ、その大フィルゴさんって言うのもエルフだったんだ。だからかな、セイリスもフラウもエルフなのは。」

そう、セイリスとフラウはエルフ種族である。尖った長い耳がその証拠だ。ちなみに、彼女等はこちらに種族名を一度も名乗っていない。エルフはいちいち名乗らなくてもその長く尖った耳を見れば、すぐに見分けが付くからだ。

「一応、純血教にはエルフ以外の種族も居ますのよ？ただ、フィルゴ国は創始者の関係から、エルフ人口が多くなってしまっただけで。勘違いなさらないで頂きたいのは、フィルゴ国自体は多種族混合の国家ですの。」

確かに、この国に来てからはエルフを見るのが多いが、他の種族も居ない訳では無かった。

「話が逸れてしまいましたわね。混血の弊害の話ですが、それだけでは無いのですわ。混血が進めば、当然の事ですが、種族間を別ける特徴や能力がどんどん無くなっていきますの。混血一代目までは、その後、両親どちらかの種族との子を作れば、再びその種族としての特徴を取り戻しますが、代が進む事でそれも難しくなり、遂には完全な混血種である人間へとなってしまいます。」

人間とは先ほど、大陸で3番目に繁栄していると言った種族であり、自分の出身国であるシライを作った種族だ。人間とはその名の通り、人と人、種族と種族の間と呼ばれ、種族としての特徴を無くした種族とされている。つまり、他種族は皆、混血を進ませれば人間になる可能性があるのである。

「人間化が進めば進むほど人間が有利な国家になるものね。」

「ええ、その通りですわ。人間種族を貶めるつもりは御座いませんが、やはりそれも国家としては不健全。だからこそ、多種族入り混じる国家は、純血法が必要になるのです。」

つまりは、そういった思慮を持った初代皇帝を自分たちの信仰対象とする事で、自分達も同様に思慮深い組織である事を内外に示しているのだろうか。

「なんとなく理解できたよ。随分と変わった組織なんだとも思ったけど。」

「確かに変わっている所もございますけど、それも理由があって・・・。」

まだ話が続くのか。アイムは心が挫けそうになっているのを感じる。

「それだけ理解できれば十分よ。どうせ詳しく知ったって、個人個人で受ける印象は違うんだから。」

突然、講義室の扉が開き、フラウが入ってくる。恰好は旅行中の姿とは違い、修道服を着ている。その恰幅の良さは、まさしくグランドマザーといった風格で、実に様になっていた。

「あれ？リュンさんは？」

入ってきたのはフラウ一人であり、同行していたリュンが居ない。

「あの子なら、今は私たちの上司と話をしているわよ。それにしても、あの子はかなり強かな奴だわね。」

「なんの事ですか？」

恐らく、また相棒が何かやらかしたのだろうが、一体何をするのか分からないので不安になってくる。

「当初は、言っていた通り、こちらへの感謝の言葉を話していたけど、合間にあなたたちの仕事内容を織り交ぜて伝えていたわ。そしたら、上司が興味を持ったらしくて、内で一度雇ってみたいって話に発展したのよ。」
ああ、じゃあ、リュンの予想通りの展開になったのか。彼が嫌らしく笑っている顔が頭に浮かぶ。
「それならアイムさん達とはもうしばらく、一緒に居る事になるのかしら。」
セイリスは手を合わせて喜んでいる様に見えた。彼女の場合、純血教について教える機会が増えたという事からの喜びだろうが。
「詳しい事はあの子が帰ってきてからってことね。暫く滞在するにしても、私たちと常に一緒にいるなんて事はないだろうし。」

「ところがだ、俺達がどんな風に仕事を進めるのか知りたいらしいので、君らには暫く、俺達の仕事を手伝って貰う事になった。」
リュンは話し合いから戻ってくるなり、そう言い放った。
「ちょ、ちょっと待ちなさいな。なんで、あたし達があなたの手伝いをしなくちゃならないのよ。」
フラウはリュンの言葉に大層驚いたらしく、ドモりながら声を上げる。
「だから、俺達の仕事について知りたいらしいんだよ。結構、面白おかしく仕事内容を話したのが効いたのかもな。」
面白おかしくという言葉の裏について聞いてみたい気がする。
「いったい、どの様な事を話したのかしら。」
セイリスもこの展開には疑問を覚えているようだ。こちらとしても、どの様に話を展開して行ったのかはわからないが、この様な結果になるのはなんとなくわかっていた。
「肝心の仕事内容については、どうなってるんです？農作業に関する事なんだから、多分、僕の仕事になるんでしょうけど。」
「まあな、なんでも純血教内部の土地で作物を育てようって事にな

っているんだが、どうにも土が悪いらしく発育が良くないらしい。そこの改善を頼みたいんだとさ。成功すれば、ある程度の報酬を払ってくれるらしいぞ。」

それなら、なんとかなるかもしれない。これでも農民歴は長いのだ。土や気候なんかの状況を見れば、打開策を見つけられる可能性がある。失敗したら、失敗したで、こちらにも向こうにも被害が出るという事も無さそうだ。

「そりゃあ、難しいんじゃないのかい？確かに教団内部で食料の自給を行えないかって話は随分と前に出てたはずだけど、中々進展せずに終わったはずよ。」

「そりゃまたどうして？」

これからの仕事に関する事なら、詳しい話を聞いておきたい。

「土が悪くて発育が良く無いって話だけど、教団だけの話じゃ無くて、このあたりの土地全体に関する話だからよ。昔からここは、ちょっと理由があって作物が育ちにくい土地柄なのよ。」

とは言われても、状況を見てみない限り、判断の付けようが無い。

「そういえばそうでしたわね。リュンさんが話した司祭様はなんとおっしゃったんですの？」

司祭とは彼女等の上司の事だろう。だいたい教団内で上の立場なら司祭の呼ぶと相場は決まっている。

「明日の朝、詳しい状況とこれまでその土地の農作業に関してどんな事をしてきたのか、資料にまとめて、こちらに伝えてくれるらしい。仕事をどう進めていくかはそれからだな。」

「夜になってあたりも暗くなって来ましたし、これから土地を見るって言うのも難しいですから、その方が丁度いいですね。」

そもそも農作業とは朝と昼に終わらせる物であり、夜にするのは作業ベタな証拠だ。

「そういう事ならこっちは止めないけどね。でも後悔するんじゃないよ。何人か農業従事者も呼んで相談した事もあるけど、その結果が今の状態なんだから。」

仕事の前に不吉な事を言わないで欲しいが、フラウにとっては親切心からなのだろう。
「でもフラウ、リュンさんやアイムさんだってそれが仕事なんだから、仕方無いじゃありませんの。それに、案外、どうにかなってしまうかもしれませんし。」
「あはは、そう考えてくれた方が、こっちも気が楽だね。まあ、それもこれも、明日の朝、仕事場を見てからだけど。」
どんなに話をした所で現場を見てみなければ始まらない。
「なら、教団の部屋が幾つか空いていますから、そちらで休んで頂ければ宜しいですわ。朝からここで仕事をされるんですもの。」
「そりゃあ、嬉しい話だな。これから宿を探さなくちゃいけないと気が重かったんだ。」
リュンの顔には純粋な喜びの顔が浮かんでおり、怪しげな笑みは浮かべていない。良かった、宿を用意してくれる所まで計算に入れていたんじゃないかと、一瞬、ヒヤリとしたのだ。
「そういえば、ちゃんとした部屋で休むのは久しぶりだな、最近は船や馬車の上で寝てばかりだったから。」
「あら？あんまり期待されても困りますわよ。それほど上等な部屋と言う訳でもございませんから。」
セイリスはそう言ったが、部屋はそれ程悪い物では無かった。少々手狭だが、清潔でしっかりとしたベットが二つあり、何より地面が動かないのだから。

教団本部周辺の土地が農業に向かない理由は、フィルゴ国から北東部に位置する火山が原因である。イタ山と呼ばれるその山は、定期的にその火口から噴煙を出す。噴煙から出る灰は、想像以上の広範囲に降り注ぐらしく、教団周辺の土地も気流の関係からちょうど、灰が降りる場所なのだそうだ。
「つまり、その灰のせいで土地環境が悪化して作物が良く育たないと。」

「はい、灰の影響は教団本部設営の際から問題視されていたのですが、当時は資金面が厳しい状況だったらしく、むしろ灰が降るから土地も安く購入できるという事で、無視される形になったそうなのです。」

セイリスの説明を前回の教団についての講義とは打って変って、アイムは真剣に聞く。仕事であるという理由もあるが、根が農家なのである。

「灰については良くも悪くも無いんだけどなあ。水捌けが良すぎて、麦や稲なんかはあんまり育たないけど、地中に埋める様な作物ならむしろ良く育つし。」

地面に触れ、薄っすらと地面に積もっている灰に触れる。現在、アイム達は教団が指定した農作地に居るのだ。

教団内で一泊し、朝になって教団から土地に関する資料が届き次第、ここへ向かったのである。

「でも稲と麦が育たないってのは致命的じゃないのかい？私たちは教団内の食料自給を目指しているんだからさ。」

同行しているフラウも話しだす。確かにフラウの言う通り、主食関係の作物を育てるには、水もちの良い土地の方が優れており、この土地がそれに向かないというのは、かなりやっかいだ。

「芋関係ならどうです？あれならこの土地に向いてるし、主食にもなる。」

なにより腹持ちが良く、大量に生産できる。

「それも考えたんだけどねえ、何故かそっちも上手く育たないんだよ。」

「芋が育たないんですか？なんでだろ。」

芋は特に耕してもいない土地に埋めたとしても、成長する植物であり。他の植物が育たない様な状況でもスクスクと育つ作物なのだ。本来の農作地以外の場所にとりあえず埋めておいて、いざと言う時には非常食として取り出すといった使い方もされるくらいである。

つまり、その芋が育たない場所と言うのは、普通とは違う、なん

らかの理由があるはずなのだ。
「うーん、土が悪いのも、灰じゃなくて別の理由があるのかも。」
アイムはランドファーマーの目線で土を見る。その目にはランドファーマーだけが見れる地霊が映るが、どこか普通の土地より数が少ない。
「別の理由ですか？前に土地を見てもらった農家の方は灰のせいだろうと申していましたが。」
「別に灰自体はそんなに問題じゃあ無いんだよ。育てる作物を選ぶってだけで、むしろ肥料になる物だし。農家ならそれくらいわかってるはずだから、多分、舐められたんじゃあ無いかな？」
初めて農業を始めようとする人に農家達は少し冷たいのだ。地道な作業を繰り返す農家は、つい内に籠りがちになり、新しい変化を嫌う様になる。
「でも、土地の悪さについては多分、本当にわからなかったんだと思うよ。調べようと思えば、結構、労力がいるし、相談を受けた程度の話じゃあ、そこまでやる義理も無いって考えたんだろうさ。」
「私、農家の方々はもっと優しい人たちだと思っていましたわ。」
セイリスは少し頬を膨らませる。彼女なりに怒っているのだろうが、そんなに怖くない。
「教団内で自給用の作物を育てようって言うんだから、商売敵にもなるだろうからね、あんまり、手伝うのは向こうも良い気はしないさ。」
農家だって商売なのだ。親切心だけで、自分達の商売圏を狭めようとは思わない。
「まあ、それも農家側の問題だからね、僕らは教団から報酬を貰う予定なんだから、出来る事はするつもりだよ。」
それでも、現状をどうにかできるかは実際問題わからない。
「こういった状態で一番、疑わしいのは日照関係なんだけど、ここの天気って他よりおかしいとか違っていたりしないのかな？」
「天気かい？時々、灰が降る以外は特に変わらないと思うけどねえ。

」
　フラウの答えは、ある程度予想していたとは言え、ありがたい物だった。さすがに天気に関しては、こちらでどうしようも無いからだ。
「となると土の問題かな。でも情報が足りないかも。」
「教団からの資料では駄目なのですか？」
「土に関しては、できるだけ広範囲で一定の距離ずつの情報が役に立つからね。教団内部だけじゃ無く。周辺の土地に関して、どうなってるのかも知っておかないと。」
　周辺の土地を調べる事で、土壌の問題がどこまで広がっているかがわかる。そして、その範囲から何が原因で土が悪くなっているのかを調べ易くなるのである。
「そういった事なら俺がやろうか。農業関係については口を出せないが、調査や聞き込みくらいなら出来るだろう。」
　今まで黙っていたリュンが喋り出す。確かに、農業関係には口を出さないつもりだったのだろう。
「なら頼みます。農作業用の土地についてもですが、一般家庭の菜園なんかについても調べてくれると嬉しいです。情報が広範囲かつ細かなほど、問題点がわかり易くなりますから。」
　リュンなら足も強いし、口も上手い。効率よく情報を集めてくれるだろう。
「了解した。一日あれば、なんとか集められると思う。それまで、お前はどうする？」
「そうですね、もう少しこの場所で調べてみる事にします。セイリスとフラウさんは、とりあえず、休んでくれて良いですよ。暫くの間は、見ていても特に進展とかありませんし。」
　二人にはやってもらう事もあまり無く、居ると気まずくなるだけなので、むしろ率先して休んでもらいたい気分である。
「そうかい？だったら、そうさせて貰おうかしら。」
「アイムさんもリュンさんも、一区切りしたら休んで頂いても良い

のですよ?何も2，3日で、すべてを解決しろなどと言った依頼でも無いのですから。あと、相談する事があれば、私たちの作業場を教えておきますので、そちらに来て下されば、いつでも相手をさせて頂きますわ。」
そうは言っても、仕事は早めに終わらせる方が良いし、彼女達に負担を掛けるのも気が引ける。
「それじゃあ、何かあったら相談させてもらうよ。」
その言葉とは裏腹に、できる限り独力で解決しようと心に決める。どうにもセイリスの言葉には、こちらに対する信頼があるからだ。
これまで同行した期間が短いはずなのに、その様に信用されている以上、なんとか答えたいという気持ちが沸いたのである。

意気込みに対して、いつも結果が付いてくるかと言うと、そんな訳が無く。アイムは夜になるまで、農作地を調べるも、原因をなかなか掴めずにいた。
教団が農作地として選んだだけあって、日差しも悪くなく、降る灰も土に害を与えるほどの物では無い。では、他に土地環境を悪化させる原因があるのかと、調べてもこれと言って、問題がある様には見えないのである。
頼みの綱は、もうリュンが集めてくるはずの情報だったのであるが、
「作物が成長し難い土地は、灰が降る場所に限定されている様だ。他の場所はむしろ発育が良い土地だから、原因はやはり灰なんじゃ無いか?」
出た結果は、前進するどころか、振り出しに戻る様な物であった。
アイムとリュンが話す場所は、先日セイリスが教団についての説明を行った講義室であり、講義室内の机にはフィルゴ国の地図とリュンが集めた情報のメモ書きが、地図に合わせて置かれている。
状況を整理して、何か有益な発想が出ない物かと考えての事だが、どう見ても、灰が降る地域にのみ、土地環境の悪化が広がっている。

「でも灰が原因だとすると、灰が降るのを止める訳にも行かないし、屋根を付ければ日が当たらなくなる。どうしようも無くなりますよ。」
「素人だから良くわからんが、灰で土が駄目になるのは灰の中の毒みたいなのが、植物に悪影響を与えてるって事なんだよな？だったら、解毒みたいなのはできないのか？」
かなりニュアンスが違うが、リュンの言っている事は的を射ている部分がある。
「土中に植物が嫌うような物がある場合、農作地を水田化させる方法というのがありますけど。」
「水で土を洗うって事か。しかし、この土地は水捌けが良すぎるとか言っていなかったか？」
確かに、降る灰のせいか、それとも土地特有の物か、土にあまり水が溜まらないのである。
「あとは、まあその毒に対して解毒作用とある物を撒くって事ですが、灰ってむしろその解毒用に使われる物なんですよね。」
植物を同じ土地で育て続けると、何故か植物が育ちにくくなる。土中の栄養が悪いのかと、肥料を撒いても環境は変わらない。そこで、様々な物を撒いた所、何故か灰を撒いたら環境が良くなるという事があり、灰とは土地にとって良い物と見られる部分がある。
「それでも、集めた情報の結果は、灰が降る場所に被害が出ているんだぞ。灰が毒になるって事は無いのか？」
「なんでも大量に撒けば、それが何であろうと毒になり得ますけど、あの程度の降灰量じゃあ、毒には・・・。」
ちょっと待て、なら目で見る以上に灰が土中に含まれていたらどうだろう。
「どうかしたのか？」
「リュンさん、明日、またちょっと情報を集めてくれませんか？今度は土地に関してじゃなくて、この国の文化について。」
もし、想像した事が的中しているのであれば、それで原因が判明

するはずだ。
「文化って、いくらなんでも範囲が広すぎ無いか？」
「だったら、とりあえず国の建築物に関する物とか、本当はいろんな方面から調べたいんですけど、多分、原因はそこにあると思います。」
「建築物について？まあ、良いけど、それって農業に関係する物なのか？」
この国に限っての事なら、大いに関係する物だと考えられる。
「まあ、それも、実際に調べてみればわかると思います。こっちはこっちで調べてみないといけない事があるので、そうですねもう一日あれば、こっちの準備が出来ると思いますよ。」
本当は、もう2，3日欲しい所であるが、まあ労力を掛ければなんとかなるだろう。
「なら俺も一日でなんとか調べてみるか、しかし文化となると、聞き込みだけで調べるのはちょっとなあ。」
「セイリスやフラウはこの国出身者だから、何か知っているかもしれませんよ。もう一度、会ってみましょう。僕もちょっと貸して貰らいたい物がありますから。」
「貸して貰いたい物？」
「ええ、コップが二つ。あとは、備蓄している植物の種なんかがあれば良いんだけど。」

三つ目は仲間の数（3）

フィルゴ国に来て3日目の朝になる。そろそろ観光でもしてみたい気分になるが、残念ながら、まだまだ仕事をしなければならない。

部屋のベッドから起き、枕元を見る。そこには昨日、セイリスに借りたコップが二つ置いてある。当然、空では無い。そこに入っている物は、今回の仕事が上手く行くかどうかを決める大切な物である。

昨日の夜、リュンが集めてきた情報を合わせると、おそらくこれで、この土地の問題は解決するはずである。

コップの中にある物が丁度良い状態になるのが、昼頃であると考えられるので、その時間に合わせて、セイリスやフラウと例の講義室で待ち合わせしている。

つまり昼頃までは、少し暇なのである。だからといって、町に出かけるという気分でも無い。やる事を残したままだと、心の底から観光を楽しめないからだ。

暇つぶしにと、同室に居るはずのリュンを探すが部屋に居ない。どうにもリュンは部屋の中に居る事が少ない気がする。彼に頼んだ仕事は、もう終わっているので、どこかを走り回っているという事も無いだろうが、彼は彼なりに時間潰しをしているのかもしれない。ならば、自分もさっさと起きて、昼までの時間を潰そうと思う。とりあえず、町に出る気は無いが、教団内部を歩き回るくらいはしよう。

部屋を出て、人の流れにそって歩いていると、教団の食堂に着いた。そう言えば、朝食の時間である。朝から教団の内部に居る者となると、教徒以外には居ないだろうから、ここに行き着くのは当たり前の事かもしれない。

臆せず食堂に入る事にする。教団に仕事を頼まれてから、食事は

教団側が出してくれているので、値段を気にする事なく、食事にありつけるからだ。
食堂内を見渡すと、そこにはリュンが居た。ちょうど彼も食事に来ていたようだ。というより、もうすでに、半分くらいは皿の上から消えていた。
「朝食に行くんなら、誘ってくれれば良いじゃないですか。人を寝かしたまま、一人で行くなんて、付き合いが悪いですよ。」
そう言いながら、食事を続けるリュンに近づく。
「悪いが、部屋にはそもそも戻っていないんだ。睡眠は講義室で摂ったからな。そこから、食堂に向かったんだから、お前を起こすのは手間になるだろう。」
失礼な事にこちらに向く事も無く、そのまま食事に専念している。
「そういう所で寝てばっかり居ると風邪をひきますよ。なんか寝る時に変な癖でもあるんですか？」
「別にそういった事は無いと思うんだが・・・。」
自信が無いのか口籠る。話が続かないので、アイムは食事を取りに行く事にした。配膳場には食器棚の横に、食事の配給係がおり、自分で食器を取り、配給係に食事を食器に入れて貰うという形になっている。
そこに並び、食事を貰い、リュンの座る席の前へと、自分も座る。食器の中には白パンとコーンスープにカラフルな野菜のサラダと卵までついていた。朝食としてはかなり豪華な部類である。
「なんか申し訳無いですね。毎回、こんな食事を頂いちゃって。」
「あそこで並んで貰ってきたんだろ？なら教団が教徒用に出してる食事なんだから、そんなに遠慮する事も無いだろう。本来出す食事が2食程増えただけなんだからな。」
まあ確かにその通りだが、感謝くらいはするべきでは無いだろうか。
「でも、考えてみれば教団の人たちって毎日、こういう物を食べてるって事なんですよね。教団って言うくらいだから、寄付で成り立

ってるんだろうし、そんなにお金が有るとも思えないんだけどなあ。」
　自給用の作物を育てている状況であれば、自分達に仕事を頼むはずも無いので、その選択肢も消える。では、この目の前にある食事は、どうやって用意したのか。
「金ならあるだろう。国からの助成金やらなんやらがな。」
　リュンは何を当たり前のことを言っているのかといった顔をしながら答えてくる。
「え？ここって、宗教団体ですよね、なんで国からお金を貰えるんですか。」
「そりゃあ、純潔教は事実上、フィルゴ国の国教みたいなもんだからな。セイリスから純潔教の歴史を教えて貰っただろ。」
　確か、純潔教は帝国文化を守るために生まれたという話だったと思う。
「純潔教の歴史はそのまま、この国の歴史でもある。フィルゴ国はこの国で言う所の古代帝国の末裔であり、純潔教はその帝国の文化を支える存在だからな。お互いに依存し合っているのさ。」
　依存という言い方は反発を呼びそうに思うが、要するに互いの益になる存在と言う事だろうか。
「それじゃあ、純潔教ってこの国の援助で成り立ってるんですかね。」
　だとすると、随分、俗っぽい宗教である。
「持ちつ持たれつの関係だと言っても、そこまで依存してる訳でも無いな。教団独自の財源がある。」
「財源ですか。なんだか、面白そうな話じゃないですか。」
　金銭面の話であれば、それが詰まらない話であるはずが無いのだ。
「そんな良い話じゃないさ。教団はな、帝国の資料とやらを大量に保管しているんだよ。」
「資料？それが何かの儲け話に繋がるんですかね。」
「古代帝国とやらが本当にあったのかは分らないが、その資料の価

値は本物らしい。内容は帝国の文化から統治方法、商業圏の拡大と言った多岐に渡る物で、教団はその知識を元に国家的知識の探求を行ってきた。」
「時代遅れにならない様にって事ですね。」
「そうだな、そして、それはフィルゴ国だけで無く、他の国にとっても知りたい知識である訳だ。」
おおよそ、内容が理解出来た。
「つまり、その知識を他の国に教える事で、自分達も見返りを求めると・・・。あれ？それって僕らのやってる事と同じじゃないですか。」
「その通りだ。教える知識に違いがあれど、やる事は一緒だ。だから、教団は俺達に仕事を頼んできたのさ。俺達がどの程度、仕事が出来るかを知るためにな。」
つまり、教団は自分達と同業者という事だ。向こうから見れば、こちらは規模も経験も弱小な新人と言った認識だろうが。
「もしそれで、何等かの結果を出したら、向こうはどういった対応をしてくると思いますか？」
「そうだな、ここで失敗する様だったら、捨て置かれる事になるだろうな。自分達の活動を邪魔される事は無いと考えて。」
ならば、ある程度の成果を残したならどうなるか。
「こちらが仕事を成功した場合の対応は二つ。一つ目は俺達を取り込もうとする。同業者である程度の成果を残せる人材が居るんだ。自分達の仲間にしない手は無い。」
「それで二つ目は？」
「俺達を潰そうとする。これは俺達が教団に敵対する様な意思を見せた場合に起こり得るな。新参者が自分達の邪魔になるのなら、潰してしまえと、俺だって考える。」
当然、こちらとしては前者の側に立ちたい。
「なら、教団側とある程度の信頼関係がある方が良いですね。セイリス達と仲良くなったのは幸運だったのかな。」

「そうだな、自分達の部下が紹介してきた形になるから、それなりの信頼は当初から得られていると考えられるだろうな。それにしても・・・。」
　喋りながら食事を続けていたリュンが、その手を止め、あの不気味な笑みを顔に浮かべる。
「なんですか？」
「随分とビジネスライクな考え方が出来る様になったじゃないか。彼女らと出会えた事がなんの幸運になるって？てっきり、教団に頭を下げる形になるから嫌だ。なんて事を言うと思ったんだが。」
　確かに、そういう気持ちは多少ある。
「一応、この仕事で生きていく事を決めたつもりですからね。考えだって厳しくも成りますよ。彼女達に出会った事自体は偶然なんだから負い目なんてありません。」
　教団の頭を下に付くという点も、これから自分達が経験と成果を積んでいけば、なんとか出来る事なのだ。今は、多少状況が悪くなろうとも、自分達の利になる事を考えなければならない。
「よしよし、良い傾向だ。それでこそ相棒にした甲斐もあるってもんだ。あと、これは蛇足だが、彼女らと出会った偶然については一概にそう言えないぞ。」
「え？もしかして、それも計算して出会った事とか言いませんよね？」
　だとしたら、もう予知能力者の域である。
「言わん。ただ、彼女らと出会ったのはヒゼル国からの船の上だろ。つまり、彼女らはヒゼル国に用があったって事だ。その用ってのはなんだったんだろうなと思ってな。」
　彼女達が、教団の宣教師として旅をしていた以上、その関係の仕事だと思うが。
「もしかして、僕らがヒゼル国でした仕事と関係があります？」
　ヒゼル国での仕事はヒゼル国を牛耳る商船組合とそこからあぶれた農家達の交渉と言う物だったが、リュンがわざわざ話を持ち出し

てきたと言う事はそれに関係する物なのかもしれない。
「そうだ。あの国は商船組合という組織構造によって、問題が発生し始めた状態だった。その直接解決のために俺達を雇った様だが、それは言って見れば場当たり的な解決でしかない。商船組合としては、それに平行して抜本的な解決を図りたいと考えるのが普通だろう。そして純潔教は自分達が研究する国の統治方法を諸外国に売り歩いている。」
売り歩いていると言えば、印象が悪いが、まあ実際やっているのだから文句は無い。
「つまり、僕達とセイリス達は同じ依頼人に似たような仕事を頼まれた間柄だったって事ですね。そう言われれば、出会ったのも偶然とは言い難いなあ。」
「まあ、でも、必然とも言えんから、これは話の種程度と言った物だな。おかげで食事中も飽きずに続ける事が出来ただろ。」
言われて、自分の手が無意識に食事を続けていた事に気付く。
「人が話を続けているのに、バクバクと食事を続けやがって、失礼な奴だな、お前は。」
「それって人の事言えませんよね。」
お互い、どこか似たところが有る様だ。とりあえず、息のあったコンビであると思いたい物だ。
これから教団に見せる事になる仕事の成果は、二人でそれなりに苦労して出した結果なのだから。

食事を終え、一息いれれば、今回の仕事の結末まで、あともう少しの時間だ。リュンと二人で講義室に向かい、そこで準備をしていると、セイリスとフラウが入ってくる。
「てっきり、農作地で説明するのかと思っていたけど、講義室でなんて、どういうことかしら。」
入ってくるなり、フラウにそのような言葉をかけられるが、それにも理由があるので説明する。

「ちょっと地理に関する話や、資料を広げる必要があるんでここで説明させてもらう事にしました。十分に説明できると思いますよ。」
言うなり、机にフィルゴ国の地図を広げる。そこには幾つかの印があり、その印は教団本部がある場所にも付けてある。
「地図にある印は、作物が育ち難い場所を示した物です。見ての通り、灰が降る地域と一致している。」
「という事はやっぱり、原因は灰という事ですの？では、農作地の改善は難しいのでは。」
セイリスが不安気にこちらを見てくる。
「当初はそう思うしか無かったんだけどね。でも、降る灰の量は、地面に悪影響を与える程の物では無いという事が、どうにも引っ掛かったんだ。だから、他にも土地が悪くなっている理由があるはずだと考えた。」
「それでは、何かを見つけたのですか？」
「いや、やっぱり原因は灰だったよ。でも火山から来る灰だけが原因じゃ無かったんだ。」
そう言いながら、机の上にある資料を手に取り、説明を続ける。
「火山以外の灰かい？それがどう土を悪くしているのよ。」
「例えば、作物に水を与えるのは成長させる上で必ずしなくちゃいけませんけど、与えすぎると、逆に悪影響が出ますよね。灰も一緒なんですよ。適量なら作物の助けにもなりますが、必要以上あると成長を阻害してしまう。」
説明しながら、手に取った資料で見たいページを探す。
「なら、その必要以上の灰というのはどこから来たのでしょうか。アイムさんの説明では火山の灰では無いのですよね。」
「うん、あの降灰量じゃあ悪影響が出る事はほとんどないね。このフィルゴ国内を除いての事だけど。」
「フィルゴ国自体に何かあると？」
丁度良く、見るべきページを見つけたアイムはそれを地図の上に広げる。

「これはリュンが集めてくれた、フィルゴ国内で伝統的に作られる建物の材料をまとめた物なんだけどね。」
その説明をリュンにして貰おうと目線を向ける。なんとか通じた様でリュンが口を開いた。
「あー、そうだな、俺も良くわかって無かったんだが、とにかくこの国の建築文化についてあれこれ調べてくれと言われてな、それでわかったんだが、この国はあの馬鹿でかい壁があるせいか、あの壁と同じ素材で民家を立てる風土があるらしいな。この教団だって確か、そのはずだ。」
そう、その素材こそ、土地を悪くしている原因だったのだ。
「教団本部を建てる上で必要とした素材と言えば、大理石かい？」
「ええ、その通り、大理石。別名、石灰岩ですね。」
「石灰岩！では教団の農作地を悪くしていたのは・・・。」
セイリスは合点が言った様な表情を見せる。石灰岩とはその名の通り、石灰が岩となったものである。そして石灰は火山灰と似た性質を持っている。
「つまり、この二つがあわさって土壌の悪化を招いている可能性があると考えられるんだ。もちろん、思いついた時はまだ予想の段階だったけど、これを見て欲しい。」
資料の次は一昨日の夜に貸して貰ったコップを二つ取り出す。
「あら、それは。」
セイリスはその事をもちろん覚えていたらしく、どの様な用途でそれが使われるのか、興味のある様子だ。
コップの中は空では無く、土が詰まっている。そして片方には一本、植物の新芽が出ていた。
「ちゃんと育つかどうか不安だったんだけど、うまい具合に育ってくれて良かったよ。これはあの農作地の土を使って、植物を育ててみた物なんだけど、片方はそのままの土を、もう片方は火山灰はそのままに土の一部を水で洗った物を使ってる。水洗いは水田化の模倣みたいな物だけどね。」

新芽が出ているのは当然、土を水で洗った方である。正直、土中の栄養も一緒に流れ出ていたのでは無いかと不安だったのだが、過剰な灰という成長を阻害する物が無い分、良く育ってくれたらしい。
「これで原因は石灰と火山灰の二つである事がわかった。もともと、あの壁や町中の建物から、長い時間をかけて地面に染み出した石灰が、火山灰と合わさった部分にだけ、害を与える状態になってしまったって事だろう。」
「でも、それじゃあ、どうしようも無い状況には変わり無いと思うけどね。結局は二つともこの町を移動させない限り、どうすることもできない。」
フラウの諦めの混じった台詞に、希望を与えるため、その対策方法を示さなければならない。
「火山灰の方は自然の物ですから、どうしようも無いですけど、石灰の方は建物が原因です。自然が作った物で無い以上、対策はいくらでも可能ですよ。一番てっとり早いのは、農作場の回りを木の板で区切るっていう方法かな？」
収穫用の植物が土中に根を張る深さは案外浅い。つまり、その深さだけ木の板などで、土を区切ってしまえば、石灰が建物の大理石から染み混む事をある程度防げるのだ。
「そんなに厳重にする必要も無いですけどね、現在、土中にある灰が多すぎるってだけで、全部無くさなくてもいいんですから。」
「それをすれば、一定の効果が出るって言うのね？」
「劇的な程ってものじゃないですけど、とりあえず、あの農作地の石灰分が抜けるまで時間はかかるだろうし。でも、上手くいけば、農作地として、十分に利用できる土地になると思いますよ。ここにある二つのコップが証拠です。」
まあ、それも教団側がやる気になってくれればの話であるが。
「今回の仕事で、自分が調べられる事は全部やったつもりですけど、実際に作業するのは教団側ですからね、結果まで全部、保障するつもりはありません。」

自分自身が行った仕事について、余計な責任を背負い込むのは、こちらにも相手にも良く無い事である。ヒゼルでの件から、そう考える事にしている。

「でも、確かにこれは説得力のある話だと思いますわ。前に頼んだ農家の方々も、ここまで資料や情報をまとめて貰えませんでしたもの。司祭様もかならず評価してくれます。」

セイリスの言葉に少し安心する。本当は日数が足りなく、証拠集めも十分に出来なかったのが本音なのだ。

別に彼女達が急かした訳でも無いので、期限を伸ばそうと思えば出来たのだが、それはこちらの意地もあるので、黙って置くことにした。

さて、今後、農作地がどうなるのかについては責任を持てないと言ったが、自分達がした仕事の評価については別である。

セイリスは安心して欲しいと言ったが、評価するのは教団の上層部だろう。もし報酬が貰えないなどという状況になったら、これまでの苦労は水の泡だ。

「だから、早く返答を貰いたいんですけど、ぜんぜん無いですね。」

セイリス達に自分達の作業の結果を説明してから、既に1日が過ぎていた。これでフィルゴ国の滞在日数は5日目となる。

「彼女等はしっかりと上司に伝えてくれたんだ。気長に待つさ。たかが、旅人が行った仕事の評価が遅いってのは、こちらにとっては良い事かもしれないからな。」

リュンは机に肘を立て、片手に持った本を読んでいる。ここは教団内にある図書室である。リュンはこの国の資料を探す際、セイリス達にこの場所について教えてもらったらしい。

「ならいいんですけど。ここの資料を調べる時間が増える分には、まあ良い事なのかな。」

今、自分達が何をしているのかと言うと、今後の仕事に役立ちそうな資料が無いか、この図書館で探しているのである。

「客人が気軽に入れる様な場所だから、重要な物は少ないだろうがな。ただ、この国の独自文化については調べる価値があると見た。」
昔は帝国、今は国。そんな長い歴史を持つこの国の資料だ。農業についても面白い物があるかもしれない。
「教団と仲良くなったら、もっと詳しい資料とかも見れるのかな。」
そう思いながら、農業について書かれている本を流し読みしていく。どれもこれも、農業の基本について書かれているのみだが、たまに自分も知らない情報があるのだ。
「ああ、あんた達、ここにいたのかい？司祭様がお呼びだよ、昨日の件に関して礼がしたいんだとさ。」
突然、フラウが図書室の扉を開けて現れる。その顔を見ると、どうやら今回の仕事は成功したらしい。
「礼か、それ以外については何か言っていなかったか？」
リュンが聞くと、フラウは首を振って答えた。
「いや？私は聞いてないわ。」
その返答に、リュンはどうにも考えが外れたと言った様な顔をする。恐らく、教団側から、自分達と一緒に仕事をしていかないかと言った、返答があると思ったのだろう。
「とりあえず、その司祭さんに会いに行きましょうよ。お礼って言うくらいなんだから、きっと報酬も貰えると思うし。」
リュンの期待が外れようとも、こちらとしては報酬の方が大事であるのだ。

「今回、私どもが頼んだ、農作地の改善という仕事に対してのあなた方の行動は、こちらにとって満足の出来る物でした。こちらはその報酬です。どうぞ受け取ってください。」
司祭に会う事を許されたアイム達は、今、目の前で喋っている白髪の老人が居る部屋へと案内された。おそらくこの人物が司祭なのだろう。横には畏まって立っているセイリスが居た。
「あの、これ全部がそうなんですか？」

司祭とアイム達の間にある机の上には貨幣の入った袋がある。その中身は、自分達が働かずとも2，3週間は遊んで飲み食いもできるであろう量の報酬が入っていた。
「ええ、あなた方が集めた資料をセイリスから頂きましたが、それはもう、たった数日ほどで集めたとは思えないほどの成果である事を理解できました。」
そう言ってもらえると純粋に嬉しい。誰かの役に立つというのは、それだけで遣り甲斐のある物なのだから。
あと、報酬が予想以上の物だったのも、まあ嬉しい理由の一つである。
リュンの方はどう思ってるのかと考え、横を見ると、なんだか渋い顔をしている。彼は、この報酬が嬉しく無いのだろうか。
「そこであなた方に、純血教として相談があるのですが。」
老司祭は改まって、こちらに話を続けてくる。
「相談ですか？それは一体。」
リュンが口を開く。どうやら、この話を待っていた様だ。
「あなた方の仕事については、多様聞いていますが、これからも旅を続けるのでしょう？なら、その旅に彼女を連れて行って貰えないでしょうか。」
老司祭は隣に立つセイリスに手を向ける。
「セイリスが僕らの旅に同行するんですか？」
驚いて声を上げる。今回の仕事でお別れだと思っていたのに、ここに来て、おかしな縁が出てきたからだ。
「はい、アイムさん達には申し訳ありませんわ。でも、旅の途中、私を常に護衛してくれていたフラウも、ああ見えて、もう長旅をあまり続けられない齢になるのです。でも、私自身はまだ、様々な国を周り、純血教の教えを広めなければなりません。本当は、変わりの護衛を教団内で探さなければいけないのですけど、そういった方々は不足しているのが常で。」
セイリスが寂しそうな顔をしながら答える。フラウとは長い間、

旅を共にしてきたからだろう。
「もちろん、同行させて頂くのであれば、その報酬をこちらで払わせてもらいます。また、旅先の旅費についても同様に。」
老司祭の言葉は魅力的に感じる物であった。旅をする上で後ろ盾を得た様な物だからだ。
「リュンさん、受けても良いんじゃないですか？別に僕らの方で不都合とかは、そんなに無さそうだし。」
話しかけるが、リュンは渋い顔をしたままで、何か考え事をしている様な様子だ。
「アイム、お前の方はつまり、セイリスの同行には賛成なんだな。」
リュンは突然そんな事を言い出した。
「ええ、まあ、だから受けても良いんじゃないかって聞いたんですけど。」
「なら俺も賛成だ。司祭様、その話、受けさせて貰います。セイリス、君も良いのか？」
「はい、既に司祭様の意見に了承したからこそ、ここにいるのですから。」
セイリス自身もフラウとの別れに対する寂しさがあるものの、同行自体に反対では無い様子だ。
「それでは、皆さん、今回の依頼には同意を頂けたと言う事で、急な話になりますが、１週間後までには旅を始めて頂きたいと思っています。宜しいですかな。」
老司祭はニコリと笑うと、こちらに同意を求めてきた。こちらとしてはもっと早い段階でフィルゴ国を後にするつもりだったので、異存など無かった。

「やられたな。」
二人して部屋を出るなり、リュンがその様な事を言う。
「やられたって、何がですか。」
「セイリスを同行させるって話だ。」

どうにも、その件に関して、ずっと渋い顔をしていた様だ。
「そんなに悪い物でしたっけ？」
旅費も報酬も貰えて、万々歳な話では無いだろうか。
「悪く無い、悪く無いからこそ、こちらが嵌められたという事になる。」
言っている意味がわからない。
「セイリスの同行自体はまあ良いんだよ。教団側からの要求を聞いておくのも双方の関係を深めたい、俺達にとっては渡りに船だからな。」
まったくもって、その通りである。
「じゃあ何が問題なんですか。」
「その結果、報酬を貰うって事が問題なんだ。今回の仕事についても、報酬が多すぎる。」
嬉しい事では無いか。
「報酬を一方的に貰っておいて、向こうの意見を一切聞かない。そんな奴をお前はどう思う。」
「嫌な奴ですね。」
「そうだ、だから、俺達が一定の信用を得ようと思えば、今後、俺達が旅をする上で教団の意見をいくらか取り入れなければならないという状況になってしまったんだよ。」
確かに、あれだけの好条件を提示されて、教団側に不義理を働けば、こちらへの信頼というものは無くなるだろう。商売する側にとってそれは痛手だ。
「首輪を付けられたって事ですか。」
「そうだ、セイリスが同行する以上、定期的にフィルゴ国に戻る事にもなるから、かなり強力な物をな。向こうが上手だった。一応、お前にも話し合いの最中に同意して貰ったが、完全に俺の失策だ、すまんな。」
リュンが急に謝ってきたのに驚く。
「ちょ、ちょっと、謝らないくださいよ。仕方無い事じゃないです

か。後で挽回すれば良い。」
「だが、今回の仕事でお前はしっかりと仕事をしてくれたのに、交渉役の俺がこの様だからな。だが、かならず借りは返すつもりだ。」
リュンは渋い顔から、あの嫌味な笑みを浮かべた顔に変わる。これがどこか頼もしいと感じるのは、絶対に自分の感覚がおかしくなったからだろう。
「あら、アイムさんにリュンさん。まだここにいらしたんですの？」
セイリスが後ろの扉から顔を出す。そう言えば、まだ扉の前に立ったままであった。
「何か話をしてらしたのかしら。」
「い、いや、なんでも無いよ。」
こちらの失策に彼女が関わっているという話など言えるはずもない。
「ふむ。ここで丁度、３人がそろっている訳だから、お互い自己紹介でもして置こうと思ってな。これから旅を続けていくんだ、必要な事だろう？」
素知らぬ顔で、そんな事を言うリュンにアイムは、純粋に感心する。
「まあまあ、それは良い事ですわね。それではアイムさん、リュンさん。私はエルフ族のセイリスと申しますわ。これから旅をする仲間としてどうぞよろしくお願いしますわね。」
こちらの考えなんて知らずに、笑顔で続けるセイリスに少しの罪悪感がわく。
終わってしまった事を気にしても仕方無い事だ。ならば、この罪悪感を少しでも払って、自然に接するのが彼女のためかもしれない。
アイムはそんな事を考えながら、３人目の旅仲間になるセイリスに笑顔で今度は、自分の事を紹介するのであった。

四つ目は森の中（1）

旅の半分は準備で終わる。道具を揃え、地図を見て、どの様な目的を持って向かうのか。それらをすべて行う事が出来れば、旅はもう下り坂であり、終点まで止まる事無く続いていく。

ランドファーマーのアイムにとっては、まだ旅は始まったばかりであるが、旅をする事を決意した時点で、彼の旅は既に終点へと向かい続けているのかもしれない。

だが、旅人にとっての旅は町と町とを繋ぐ各駅停車であり、一つの目的地に着く度に、次の目的地への旅の準備をしなければならない。

まだまだ、旅人として初心者アイムでも、それは他人事では無く、先日、旅人としての仕事をこなしたフィルゴ国内で、未だ次の旅への準備をしていた。

「今度は陸路だから、船が勝手に進んでくれる事は無い。シライからヒゼルの様に短期間で着く保障も無い。だから、それ相応の旅道具を揃えておきたい。幸運にもこの国では揃わない物の方が少ないし、金銭的余裕もある。だが、それで油断なんてするべきじゃあ無いな。特に鍬なんぞを持ち歩くなんてのは愚手中の愚手だ。」

アイムの相棒であるツリストのリュンが道端で講釈を垂れている。どれだけ言われようが、鍬を捨てる事なんて無いのに、ご苦労な事である。

「でも、そんなに大変なんですか？次の目的地までの旅って。」

今は町中で旅道具を揃えるため、あちこちの商店を周っている。主に必要なのは、食料品である。その他の物は既に手持ちの物があるからだ。

「確か、アイムさん達は大陸北部を西海岸に沿って南下していると聞いていますわ。そうなると、今度は大陸南部へ西海岸沿いに向か

うつもりなのでしょう？なら、次の国までは、確か森を越える必要がありますわね。」
　アイムの疑問に答えるのはエルフであり、フィルゴ国の由来の純血教徒、セイリスである。彼女はつい最近、自分達の旅仲間になった。
「森か、迷わないかどうか心配だね。磁石買いません？磁石。」
　森の中で方角が分からなくなって迷うというのは、良く聞く話である。
「当然、用意するつもりだ。あと注意したいのはドラゴンだな。大陸西海岸南方にあるドワーフの森には森のドラゴンが棲む。海のドラゴンと違って、お前が想像する様なドラゴンだが、会いたいなんて思うなよ。」
　当たり前だ、ドラゴンに関しては海の上で懲りた。
「というより、ドワーフの森ってドワーフが棲んでるんですか？」
　ドワーフという種族には会ったことが無い。
「ああ、彼らも森に棲む種族だからな。どうやってか知らないが、森のドラゴンと共存しているらしい。」
　それは凄い。ドラゴンと言うくらいだから、あの海で出会ったドラゴンのように棲む世界が違う生物だろうに。それと共存するとはとんでもない種族である。
「でもドワーフに出会うという事は、ドラゴンに出会う可能性が高くなりますの。だから、そちらの方も会いたいなんて、考えないで下さいましね。」
　セイリスも自分に対して注意してくる。そう言えば、彼女にもドラゴンに興味がある様な事を船上で話したっけ。
「いくらなんでも、そんな事を思いませんって。それに、森のドラゴンだって、そうそう会う物じゃないんでしょう？海のドラゴンだって珍しい物なのに、そんな偶然続きませんって。」
「確かにその通りですわね。」
　あらあらとセイリスが笑う。釣られて自分も笑い出す。

「・・・。」
ただ、リュンだけが笑っていない。こういう会話自体が不運を呼びそうな気がするからだ。

良い予感ははずれる事が多いのに、悪い予感が当たる可能性が高いのはどうしてだろうか。
実際はどちらも、自分の運頼みである事は変わりないのであるが、そうなると自身が不運である事も認めてしまう事になりかねないので肯定するなどもっての他である。
何故、現在、その様な事を考えているかと言うと、丁度、運悪く森に棲むドラゴンに遭ってしまったからである。
「おい、これはなんだ、ランドファーマーはドラゴンに好かれる体質でも持っているのか？」
リュンがこちらを睨みながら言ってくる。
ドラゴンに出会ったのは、フィルゴ国を出て数日、ついにドワーフの森の中を進む所まで来たところである。
森と言っても、中には交通用の道が敷かれている。だが、それでも道幅は狭く、ここまでは、乗り合い馬車に乗ってきたのだが、森を抜けるまでは徒歩である。アイム達はその道を通り、森を抜けようとしていた。
それは地響きを立てながら、こちらへとやって来た。鱗に覆われたトカゲの様な体に翼を生やし、頭に角が二本。そして、普通のトカゲとは比べ物にならない程の巨体で木々の薙ぎ倒しながら、それは現れたのだ。
「海のドラゴンが現れた時は、ここに居る三人とも船に乗っていたでしょう。だったら、僕だけの責任じゃないですよ！」
木々の間に隠れながら、お互いの不運を罵り合う。ドラゴンが自分達の前に現れる前に、その予兆は、あの巨体から出る音と振動で分かっていたので、この様に隠れる事が出来たのであるが、それもあまり意味の無い物かもしれない。

「二人とも静かにして下さいまし。どうやらドラゴンはこちらに特別敵意を持っていない様子。ならこちらが姿さえ現さなければ、どうにかされるという事はありませんわ。」
セイリスはそう言うが、あの凶暴な外見から、例え敵意が無くても襲ってくる気がして怖いのだ。
「それにあいつ、あれだけ大きな体しているくせに、移動の速度が随分と遅くない？いつまでここに隠れていればいいのか・・・。」
「いくら大きいといっても、森の木々よりは背は低いみたいですわ。だから、あまり早く動くと、ドラゴン自身が怪我をしてしまうのでは。」
だとすると、もう暫くはここで隠れるしかない。夜が来るまでには、森を抜けたいと考えていたが、それもどうなる事だろう。

結局、ドラゴンが無事、こちらの安全圏まで通り過ぎた頃には日が傾き始めていた。
「このままだと、森で一夜を過ごすことになりそうですわね。」
暗くなりつつある空を見て、セイリスは深刻な顔をしながら話す。
「やっぱり、森の中での野宿って危険なのかな。」
「そうだな、森ってのは、他の場所より生き物が多いんだよ。当然、その中には危険な生き物も含まれている。キャンプ地でも用意されてなきゃ、そうそう、したいとは思わないな。」
アイムの疑問にリュンが少し考え事をしながら答える。どうにも、自分達は少々、困った状況になっている様だ。
「旅慣れた人物であれば、一気に森を抜けてしまうそうですが、私達の現状を考えると、それも難しいかと。」
順調に行けば、そろそろ森を抜けるはずなのであるが、それにかける時間の半分近くをドラゴンから隠れる事に費やしてしまっている。
つまり、このまま歩き続けても森を抜けるには、夜も歩き続けなければならない。ただでさえ危険な夜道で、道を外す可能性すらあ

る。森の中で道に迷うハメになるなど、想像もしたくない事であった。
「ひとつ、当てがあるんだが。あまり気乗りしない当てだけどな。」
リュンは自分の考えていた意見を言う気になった様であるが、どこか浮かない表情をしている。
「この際、そんな事も言ってられないでしょう。」
縋る物があるなら縋っておくべきだ。
「うーん、その当てって言うのは、ドラゴンが居た以上、それと共存するドワーフの集落が近くにあるかもしれないって物だ。」
「それって、日が暮れるまで森に居るハメになった原因に自分達から近づいていくってことですか？」
ドワーフとドラゴンが共存しているのなら、つまりはそういう事だ。
「だから気が進まないんだよ。なんで一夜の安全のために、わざわざ虎穴に入らなきゃいけないのかって話だからな。それに本当にあるのかもわからん。」
なら、その案はあまり意味の無い物だろう。このまま、野宿をするよりも危険な選択肢を選ぶというのは。
「一応、森の入り口で、簡単な地図を頂いたのですが。確かに近くの場所にドワーフの集落があるみたいですわね。それも緊急避難場所などと書かれていますわ。」
「え？」
釣られて地図を見る。確かにそこには、緊急避難場所、ドワーフの里。森の中で歩くのに疲れたら是非ココへと赤字で書かれた文章が地図にあった。
「何か詐欺に遭っているんじゃないかと心配なんですが。」
果たして、そこにはドワーフの里が存在した。森を通過するための道から逸れる形で、もう一つ道が存在しており、その先には小さな集落が存在しており、きっちりと看板で「おいでませドワーフの

里へ」と書かれていた。
「いや、俺もドワーフは排他的な種族だと聞いていたんだが・・・。」
なんでも、そのせいで種族としての生態や行動などが殆ど知られていないそうな。ただ、知性自体は他の種族と変わらないので、大陸で、自らの権利を主張できる種族の一つとして認められている。
「でも、この看板を見る限りは、それ程、悪く扱われるという事も無さそうですわ。もしかしたら、泊めてくれる宿の様な物があるかもしれませんわよ。」
確かに、集落自体は森を切り開いて出来た土地に、そのまま木材を使って建てた家々が並んでいる。思ったよりも町として機能している雰囲気はある。
「ちゃあんとありマスヨ。旅人の方専用の宿ガ。」
間延びした台詞が視線の下側から聞こえる。
「うわ、なんだ！」
驚いて下を見ると、そこには身長が小さく、その割には横幅がとても広い男が居た。
「なんだじゃあないデス。ワタシ、ドワーフのポル言いマス。村で宿を経営してマス。看板を立てたのもワタシデスヨ。」
何故片言なのだろう。この大陸にある言語は大陸公用語のみなので、片言な言葉になるはずが無いのだが。まあ、とりあえず、どうやら彼はこの里のドワーフらしく、アイム達を自分の宿へと誘っているようだ。
「それは良い事ですわ。わたくし達、諸事情で森の中で足止めされてしまい、どうやって一夜を過ごそうか、困っていたところですの。宿があるのなら、案内して頂けないかしら。」
背の低いセイリスが、同じく背の低いドワーフに話かけているのは、なんとも可笑しな風景である
「それならワタシの宿に案内スルヨ。心配しなくても格安ダヨ。」
まあ、そこについても心配ではあるが、それ以上にこの集落に漂

う胡散臭さは何なのだろう。
「ポルさんと言ったか。俺達が里に入る事で、里の誰かが不快に思ったりはしないのか？」
リュンも同様に考えていたのか、ドワーフは排他的では無いのかという自分の疑問をポルに向ける。
「なんで不快に思うのデス？旅人さん達、今のところ誰も悪い事してませんヨ？」
ポルという人物は本当に、こちらの意図がわからない様子で返してくる。リュンの情報が間違っていたのだろうか。
「それじゃあ宿に案内してあげマス。シッカリ着いて来てネ。」
ポルはその鈍重そうな体を動かして、里の中へと入っていく。アイム達は里の入り口で立っている訳にもいかず、ポルに着いて行くしか無かった。

宿に着くまでの間、歩きながら里を観察していたが、変わった風景などは無く、通りかかる村人のドワーフも旅人の珍しさからか、こちらに目を向けるも、嫌悪感を持っている様子はなかった。
そんなこんなで、宿に着くまでは別に事件も起こらず、無事に到着したのである。
「思ったよりも立派ですね。」
そこには、この里では一般的なのだろう、すべて木材で作った家がある。他の民家よりも、大型に出来ている様で、外から見た限りは小奇麗にも見えた。
「当然デスヨ。ワタシはコレで商売をしているンデスカラ。」
ポルが自慢気に胸を張っている。当然、宿の中に入ったが、受ける印象は外観を見たときと変わらず、外面だけを良くしているという訳でも無い。
「こりゃあ、案外、儲け物だな。旅人なんかは良く来るのか？」
リュンも感心しながら部屋を見渡す。
「少し前までハ全然来なかったケド、最近は少しづつ来てくれる様

になりましたヨ。ヤッパリ看板を立テテ、地図にも載せて貰ったのガ、良かったンデスカネ。」
　最初は怪しい雰囲気があったが、ポルの言動を見る限り、彼が一般的な商売人と変わらない様子である事を理解できた。
「実際、宿泊費なんかは幾らくらいなんだ？」
「そうダネ、1泊程度ならコレくらいで良いヨ」
　ポルが提示してきた額は、随分と良心的であり、同じ程度の宿であるなら、もう少し値段を張っている。ましてや、森の中で他に休む場所が無いと成ると、まだ高くても良いのでは無いかと感じる。
「本当ハ、もっと額ヲ上げたいンダケド、マダマダ、来てくれるお客が少ないカラネ。安いと思ってくれたのナラ、旅人サンが、旅先でここの事を宣伝シテくれると嬉しいデスヨ。」
　言葉は片言だが、言っている事はまともである。話し終わり、部屋へと案内される頃には、すっかりドワーフへの悪印象は消えていた。

「それじゃあ、今晩のゴハンが出来たら呼ぶカラ、それまではくつろいでいて下サイネ。」
　ポルはそう言って、おそらく台所へと向かって行った。部屋は二つ用意された。アイムとリュンの二人部屋と、セイリス用の一人部屋である。こういった気遣いを自分達が言うまでも無くしてくれるのは嬉しい限りである。
「なんか、心配して損しましたよ。しっかりとした人達じゃないですか、ドワーフって。」
　部屋のベッドに座り、一休みしながら、リュンに話しかける。リュンの方も同様で、既にベッドの上で寝転がっていた。
「だな。悪意なんかも感じられないし。しかしなあ、噂で聞いた限りだと、ドワーフはあまり他種族と話したがらないし、自分達の集落にも入れようとしないって聞いていたんだが。」
「この宿にお客が少ないのも、その噂のせいじゃないんですか？実

際は違うんですから、営業妨害ですよ、それ。」
「まあ、そうだろうな。交通の利便性を考えたら、本来、もう少し流行っても良いはずだ。」
現在は日も完全に暮れ、夜の時間帯であるが、自分達以外の客が来た様子も無い。
「じゃあ、旅先でこの森の事を聞かれたら、店主が言っていた様に宣伝してあげるのも良いかもしれませんね。」
「うーん、それは一晩過ごしてから考えた方が良いだろうな。もしかしたら、今晩の飯に酷い物が出てくるかもしれないし。」
「はは、確かにそうですね。」
休みの時間と言う物は早く過ぎる物で、こんな会話を繰り返している内に、ポルが食事の用意が出来たと、呼びに来たのであった。

出てきた料理はまずくは無いが、独特な味をしていた。
「なんというか、肉々しいですね。あと種類のわからないキノコがスープに浮いてたり。」
よくわからない肉を不思議な風味のする香辛料を塗して玉ねぎを和えた焼肉に、キノコスープ、豪勢に肉が入っている。そしてパンにはなんと食べる者を飽きさせないために肉が挟んであるのだ。
「胸焼けがしそうですわね・・・。」
セイリスは見た目通り、小食な方なので、こういった料理は苦手だろう。
「ドワーフ族の地域料理って奴なのかもな。こんな森の中に住んでると、文化も他とは違ってくる。まあキノコについては、客に出している以上、毒って事も無いだろう。」
そう言いながら、躊躇なく料理を食べていくリュンには驚嘆するばかりである。
「全体的に味がしょっぱいんだよね。多分、保存食も兼ねているんだと思う。」
口に運んでみた時の味はまずくは無いが、これと言って美味しい

という訳でも無い。そして大量に食べるのは少し遠慮したい。
「わたくし、これ全てを食べる自身がありませんわ。」
「明日も結構歩くから、せめて、このパンくらいは腹に入れておいた方がいいぞ。」
「塩分が多いから、全部食べる必要も無いと思うけどね。」
むしろ、余程体が食料を求めていない限り、これ全部を食べるというのは体に悪いと思われる。
「わかりましたわ。せっかく作ってくれた物ですものね。」
そういってフォークとナイフで少しずつパンを切り分けていくセイリスの姿は、まるで親に食事を残さず食べる様に言われた子どもみたいである。
「皆さん、食事は楽しんでくれてマスカ。」
調理場から出てきたポルは恰幅の良い体に大きなエプロンを着けている。
「え、ええ。大変、美味しく頂いていますわ。」
先ほど言っていた事とは違う発言をするセイリスであるが、彼女を責める者など誰も居ないだろう。
「少ししょっぱいケド、そこは我慢して下サイネ。ココでは保存の効いた物じゃないと、すぐ腐っちゃうカラ。」
彼自身も料理の味自体は理解しているのだろう。申し訳なさそうな表情をしている。だが、聞く限りは仕方の無い事の様な気もする。
「その分、贅沢に動物の肉を使わせて貰いマシタヨ。何の肉かにツイテハ、料理毎に違うから知りタケレバ、一つ一つ説明シマス。どれもこれも森の獲れた動物ばかりデスヨ。」
説明されると余計、不安になりそうなので遠慮しておく。
「森の中での生活ってのは、案外大変そうだな。なんでドワーフはこういったところで暮らしているんだ？」
「ドワーフの生態に関シテネ。少し理由がアリマス。」
詳しく聞きたい事であるが、種族の生態に関しては本人が話す以外の事では、話題に出さないのがこの大陸でのマナーである。

「ふーん、じゃあ客がまだまだ少ないとか言ってたが、この宿は最近始めたのか？」
リュンは別の話題に変えて、話を続けていく。
「そうデスネ。ちょっと前マデ、ワタシたちドワーフの間では旅人を里のナカに入れる様ナ店を作るコトが、出来なかったデスカラ。」
「あれ？じゃあドワーフが里の中に他種族を入れない話って。」
ポルは話が長引くと思ったのか、こちらの机の空いた椅子に座る。
「本当のコトデス。ただ嫌ってイタ訳でも無いんデスケドネ。でも他の種族から見れば、ワタシ達は排他的に見えたデショウネ。」
「それも、やはり生態に関する事ですの？」
パンを必死に食べていたセイリスも、気になったのか会話に入ってくる。
「そうデスネ。だからワタシからは詳しい内容を話せマセン。でも、最近はちゃんと里に他種族も入れるコトが出来る様にナリマシタカラ、安心して下サイ。」
話は終わったが、どうにも疑問だけが残る会話になってしまった。
「ヤッパリ皆さん、ワタシたちの事が気にナリマスカ？」
こちらの疑問を感じ取ったのだろうか、ポルは話を続けてくる。
「まあ、気になると言えば気になりますけど。」
偽りの無い本音であるが、無理をして聞きたい訳でも無い。
「皆さん、食事の後は予定がアリマス？ちょっと行って欲しい場所がアルノデス。」
ポルの表情が真剣な物に変わる。
「うーん、近場なら良いが。」
それを見るリュンは、何かを感じ取ったのか、少しの考慮のあと、同じく真面目な顔をして返答する。
「里の端に緩やかな崖がアッテ、そこに一つ洞窟がアリマス。ソノ洞窟の中を暫く行くと、大きな空洞が広がってマス。そこに行って欲しいノデス。」
「行き帰りはどれくらいの時間が必要ですの？」

「それだけなら往復1時間も掛からないデス。怪しいと思うかもデスガ、皆さんの疑問も解けると思いマス。」
「食事を終えて、外出の準備をしてからなら大丈夫だが。」
リュンは洞窟へ向かう事に同意するらしい。
「スミマセン。お客にこういう事をさせるのはイケナイ事だとわかってイルノデスガ。」
ポルは真剣が表情を崩さないまま、席を立ち、その場を去っていった。

食事を終え、部屋に戻るとリュンはどうしたのか、旅支度を始める。
「何してるんですか？洞窟はすぐ近くにあるらしいんですから、そんな準備をしなくても。」
「念のためだ。もしかしたら、あの店主がこちらを騙している可能性もあるからな。」
「そんな風には見えませんでしたけど。」
彼の表情はむしろ、本音を話す者のそれであった。
「俺もそう思う。だが、危険が無いとは言い切れない。洞窟から宿に戻るんじゃなくて、そのまま旅を続けられる服装くらいは、しておいたほうが良い。」
過剰な心配だとも思うが、この場合は経験が上なリュンに従っといた方が良いだろう。
「だけど、そう思うなら行かなきゃ良いのに。」
自分で了承しておいて、その事に心配するのはどうだろうか。
「まあ、こっちはドワーフについて何も知らないからな。噂程度でしか聞いたことの無い、ドワーフの生態がわかるかもしれないんだぞ？危険があっても知りたくならないか？」
一瞬うなづきそうになるが、認めると、なにかリュンと同類になりそうだったので、辞めておく。
「セイリスにも伝えておきますか？」

「そうだな、頼む。」
言われた通り、自分の部屋を出て、すぐ横にあるセイリスの部屋の扉をノックする。
「セイリス、ちょっと良いかな。」
女性の部屋に入る以上、こういった行動は面倒でも必要である。
「はい、どうぞ。」
許可を得たので入らせて貰う。
「あら、アイムさん。洞窟へ行く準備はもうできたのでしょうか？」
当然だが、セイリスは食事を終えた格好のままでリュンの様に旅支度はしてはいない。もししていたら、これが旅人として必要な行為なのかと不安に思っていたところだ。
「リュンさんが旅支度をしてから出かけようって。万が一の事が有るかもしれないからだそうだけど。」
ポルがこちらを騙しているなどといった発言については、話さない事にする。セイリスの性格だと、そんな事は無いと口論になりそうだからだ。
「そう言えば近いと言っても、洞窟内でしたわね。確かに危険があるかもしれませんわ。」
納得して貰えた様で助かる。
「だから、そのまま旅に出かけられるくらいの装備をしておこうってさ。リュンさんも心配し過ぎだと思うけど。」
「でも、ポルさんの顔を思い出すと、なんだか凄い秘密が待っているかもしれませんわね。」
心なしかセイリスは喜んでいる様に見えた。隠された秘密を明かすという行為に、好奇心が沸いているのかもしれない。
「少し里に寄っただけの旅人に話す秘密というのも、どうかと思うけどね。」
ただ、セイリスが喜んでいるのと同様、自分もこれから何が待っているのか、期待している感情がどこかにあるのは、確かであった。

四つ目は森の中（2）

ポルの頼みを聞き、念のため旅の準備を終えて、洞窟に向かう。洞窟まではポルが案内してくれたので、すぐに着いたのだが、

「ここから先はお客さん達で行って欲しいデス。私は入れない理由があるノデ。洞窟内はまっすぐ道が続いてマスカラ、迷う事は無いはずデスヨ。」

という言葉と共に、自分達だけが洞窟へと進む事になった。

「なんか怪しい雰囲気なって来ましたね。」

入口自体がかなり大きく、人工的に支えられている部分もある、この洞窟の雰囲気が怪しいと言う意味であるが、この洞窟へと誘った本人が、洞窟内に入らないという怪しさについての事でもある。

「まあな、でも進まない訳にも行かないだろう。」

リュンも警戒しては居るが、それでも歩みを止める様子は無い。

「二人とも、ポルさんを疑い過ぎでは無いでしょうか。本人が言う様に、何か理由があるのですわ。」

セイリスの方はむしろ、ポルを信用する側に回っている。彼女らしい考え方だ。

「どっちにした所で、進む事には変わりないみたいだし、話の続きは奥にある物を確認してからという事にしよう。」

先に何があるのか分からず口論するより、自分の目で見た方が手っ取り早いのだ。

洞窟を暫く歩くと、大きな空間が広がる場所へと辿りつく。ここまでの道のりも、それなりで広かったが、ここはそれ以上である。暗いと言うのもあるが、向こう側は霞んで見える洞窟というのは、どれだけの空間が広がっているというのだろうか。

「ここがポルさんが言ってた場所ですかね。」

「少なくとも、ここから先は一本道で進む事も出来ないから、そう

なんだろうが。」
　しかし、周りには何も無い。こんな場所で何をしろと言うのだろう。
「あの、お二人とも、よろしいでしょうか？」
　この空間に驚いていると、セイリスが話しかけてきた。
「あ、えーと、何？」
　意識が別の場所に向いていたらしく、突然のそれに、戸惑ってしまった。
「その、何か、地響きの様なものを感じません？」
　セイリスは少し、怯えた表情で話す。あたりの様子を集中して観察してみると、確かにに揺れている様な気がする。
「本当だ、なんだろ、これ。」
　地響きは少しずつ大きくなっている気もしてきた。というより、確実にこちらへ近づいて来ている。
「ちょっと前に、これと似たような事が無かったか？」
　リュンに言われて、こちらも思い出しそうになる。そう、最近の事のはずだ。ドワーフの森に入ってからだろう。森に入って、暫くしてから、こんな地響きが聞こえてきて。
「ドラゴン！？」
　やっと、思い出したと思った時、洞窟の向こうから、見覚えのある巨大な影が近づいてくる。
　その大きなトカゲを思わせる外見で、こちらへ一気にやってくるのだ。
「みんな！逃げろ！」
　リュンが叫ぶが、体が動かない。というより、動かす余裕が無かった。ドラゴンは森の中とは比べ物にならない速さで、その四肢を動かし、彼方に居たはずの影を、はっきりとした姿に変えながら、眼前へと迫ってきたからだ、
　体が金縛りにでもあった様に動かない。まるで蛇に睨まれた蛙であった。ドラゴンはこちらを観察するかの様に、こちらを見つめて

くる。
これはいったいどういう事なのだろうか、もしや、本当にあの宿の店主に騙されたのか。自分達はこのドラゴンの生贄に差し出されたのだろうか。
そんな考えが頭の中を巡る中、唐突に場違いな声が聞こえてくる。
『おや、もしやあなた達は、ドワーフの里に来た旅人の方でしょうか。』
洞窟中に響く様な、深く重いその声は、当然、アイム達の耳にも聞こえる。しかし、それがどこからの物なのかは理解できなかった。
『これは、少し驚かしてしまいましたか？』
まるで、こちらの戸惑いが見えているかの様に再び言葉が聞こえる。ふと、目の前のドラゴンが喋っているのでは無いかと思ってしまった。
『久しぶりの来訪者でしたので、こちらもはしゃぎ過ぎましたね。私はあなた方にドラゴンと呼ばれる物です。』
「はあ！？」
突然の展開に、そんな間抜けな叫び声を上げてしまう。しかし、この目の前に居る、凶暴な姿のドラゴンから、少々、紳士的な声が聞こえて来たとしたら、誰でも同じ反応をするだろう。
『どうにも、案内役のドワーフの説明不足だった様ですね。どうか戸惑わないで下さい。私は、そちらを襲う意思などありませんよ。』
目の前のドラゴンは目を薄め、四肢を畳み、敵意が無い事を示すためか、その場に座る。
「あの、本当に、その、目の前にいらっしゃるドラゴンなんですの？」
セイリスも、このあんまりな状況に戸惑っている様だったが、それでもなんとか状況を理解しようとしているらしく、ドラゴンに恐る恐る話しかける。
『ええ、もちろん。間違いなく、私はあなた方の前に居るドラゴンですよ。』

ドラゴンはセイリスの言葉に反応して、頷きながら答える。
「えーと、じゃあ、ドワーフのポルさんが、この洞窟に案内してくれたのって・・・。」
『私に会わせるためでしょうね。旅人が里に来れば、一度、挨拶をしてみたいと、私の方から言っておいた事ですので。』
そう言って、口を釣り上げるドラゴンは恐らく笑っているのだろう。ここにアイム達が来てくれた事を嬉しがっている様だ。
「俺達は、ドワーフの生態について、ここで知る事が出来ると言われて、案内されたんだが。」
リュンの方はこの状況で、なんとか落ち着きを取り戻したらしく、ドラゴンと話を続ける事にした様である。
『ふむ。それならば、確かに、ここに来るべきでしょうね。実際に目で見た方が分かり安いでしょうし。なにより、私の様なドラゴンの事を理解しなければ、ドワーフという種族も理解し難い。』
リュンとドラゴンが話す姿を見ると、何か酷く質の悪い冗談を見せられている気がしてくるが、紛う事の無い真実であるので、目をそらす訳にも行かなかった。
「つまり、あなたは、ドワーフと言う種族に大きく関係していると？ドワーフと森に棲むドラゴンは共存しているというのは本当という事か？」
リュンは状況に対する恐怖よりも、興味の方が上回ったらしく、いつもの嫌らしい笑みに表情を変えながら、ドラゴンとの話に熱中しようとしていた。
『共存しているのは本当ですが、その言い方だと、大きな勘違いをしていらっしゃる。私とドワーフの関係とは、共存では無く、対等と言うべきですから。』
「あなた見たいな巨大なドラゴンと、ドワーフが対等な存在なんですか？」
ドラゴンという物に対して、別世界の住人という理解の仕方をしていたアイムにとって、それは衝撃的な発言である。

『ええ、その通りです。何故なら私とドワーフ達は別個の物では無く、同じ種族なのですから。』

ドワーフの社会構造は親と子の関係で構成される。親は子の行動を統率、監視、保護し、子は親の命令や意思に従う。この関係上、親は子よりも数が少なく無ければならず。ドワーフの集団一つに親に当たる存在は一人しかいない。

『その親として存在するのがドラゴンなのです。親はドワーフの集団がある程度まで大きくなると、その中の一個体が私の様に成長していき、他のドワーフよりも強靭で寿命も長く、他を統率できる存在になれるのです。』

「働きアリと女王アリみたいな関係なんですかね。」

それとも、蜂の様な社会体系なのか。

『私が子供を産むという訳では無く、子であるドワーフ自体も種族としての独立性を持っているという事以外は、概ね正しい見解だと思いますよ。結局は集団としての方針を決めるのは、私ですから。』

「その方針って具体的にどうやって決めるのかが、よくわからないんですけど。」

子であるドワーフの集団が独立性を保っているのなら、統率をするというのも大変なのでは無いだろうか。

『ここに来るまでに、ドワーフの個体に会ったはずですね。その子は言葉使いが拙くありませんでしたか？身体的特徴も、身長が低かったり、どこか子供のまま成長した様な部分があったでしょう？』

そう言われれば、そうかもしれない。

『基本的にどれだけ種族として確立されていたとしても、ドワーフは、どこか精神的に子供のままである場合が多いのです。ですが、一度ドラゴン化をしてしまえば、その精神性は肉体と同様に驚くほどの成長を果たせます。』

「という事は、自然とドラゴン中心の社会が出来上がる事になるな。」

リュンは得心した様に頷いている。
『ええ、ですが、それにも問題がありまして。』
ドラゴンは深刻な様子で頭を下げ、言葉も低くなる。
『ドラゴンの精神性の成長と言うのは、一個体だけに留まるだけで無く、他のドワーフの個体にまで影響を与えてしまうのです。』
「それは一体、どういう事なのでしょう。」
セイリスの方は話をあまり理解して居ない様子である。ちなみに自分の同様だ。
『テレパシーと言えば良いのか・・・。自分の意思を伝えるだけなら問題無いのですが、私の趣味嗜好が集団としてのそれにまで、影響を与えてしまうのです。』
「あれ、じゃあ、今日の夕飯がやけに肉が多かったのも。」
『ええ、私、実は肉食の傾向がありまして・・・。』
なるほど、確かにそれは問題だ。偏食家がドラゴンになれば、ドワーフみんなが、好き嫌いをしてしまう事になる。
『まあ、その程度なら、まだ周りに与える影響も少なく済むのですが。』
「もしかして、ドワーフが最近まで排他主義だったのは、そのせいか。」
『その通りです。私の先代にあたるドラゴンが、どうにも他種族を恐れていた様で。ドワーフの集団そのものも、他種族を恐れる様になってしまいました。』
それで、ドワーフが排他的という噂が流れる一方で、実際に会ったドワーフ達はその噂とは違い友好的だったのか。
「じゃあ、もしかして、あなたは他種族に対して友好的だったりするんですか？」
今までの話が本当ならば、そういう事になるはずだ。自分達がこの里で出会ったドワーフは、他種族を恐れている様には見えないのだから。
『私自身は、そういった物に対する恐れはありません。むしろ、今

までドワーフ達は閉鎖的過ぎた。もちろん、その状態の利点というのもありますが、私たちの生態が、他種族にまったく知られていないというのは、やはり問題です。』
　話してみてわかった事だが、このドラゴンは、一族の長としての勤めを果たそうとしている。決して、別世界の存在などでは無い事にアイムは気づいた。
「それで、僕らみたいな旅人を洞窟に呼んでいたんですか？」
『ええ、実際に私という存在を見て頂ければ、ドワーフという種族に対する理解を深める事が出来るのではないかと・・・。』
　それは正解だろう。実際、こうやって話して見れば、恐怖より親しみの方が強く感じる。
「でも、それでは、なかなか、多くの人に広める事はできないのでは・・・。」
　セイリスが心配そうにドラゴンを見つめる。彼女も、このドラゴンに対しては、どこか親しみを感じ始めているのだろう。
『ですから、旅人のあなた方に、私達の事を広めて頂きたいと思い、旅人が来たなら、こちらへ誘って貰う様、ドワーフに言付けているのですが。』
　ドラゴンなりの宣伝と言う事か。まあ、多少の効果はあると思うが。
「それだけじゃあ、少し難しいな。実際、ドワーフと森のドラゴンが同種で、今、ドワーフは他種族に友好的という話を他にした所で、信じてくれる奴が多いとは思わない。失礼だが、特に前者は、眉唾ものの噂にでもなれば上出来ってくらい、信じられない話なんだよ。」
『そこまでですか・・・。』
　ドラゴンは落ち込んでいる風に、やや頭を下げ、口からは溜息らしき風が、こちらに吹いてくる。
「実際に会えれば別なんだが。直接、あなたの口から聞いたからこそ、今までの話を俺達は信じる気になった訳だからな。」

そして信じる人数が多ければ、それは、そのまま真実になる。
『これまで、私に会いにここまで来た旅人は、あなた方を含めて、片手で足りる数なのです。』
ちなみにドラゴンの指の本数は、こちらと同じ5本である。自分達は3人なので、これまで2人しか会ったことが無い計算である。いや、あの話し方を聞くに1人の可能性もあるか。
「ちょっと、その数では難しいですね。なんというか、流行ってないんですかね、この里。
『排他的という噂も問題なのですよ。地図にまで書いてあるというのに、誰も来てくれない。となれば、私に会いに来る旅人も、もっと少なくなります。』
とうとう、泣き言まで言い始めたドラゴンを見て、一同はどう対処すれば良いのか困り始めていた。
あと、こういう状況なので、ドラゴンに対する恐怖などは、まったく存在しなくなっている。
「なら、いきなり多くの人間にドワーフの事を知って貰うという高望みは捨てて、とりあえず、ドワーフの里に来る様な旅人を増やすという方向で、努力して見れば良いんじゃないか？」
投げ遣りな態度で返答しているリュンであるが、実際、それくらいしか方法は無い。
『努力ですか。宿を作り、地図に掲載させて貰う。それ以外となると、少し思いつかないのですが。まさか、この姿で宣伝する訳にも行かない。』
宣伝しようとした相手に逃げられてしまうのがオチだろう。
「とりあえず、宣伝に関しては、ここに来た旅人に任せるのが吉だろうな。もともとマイナスの印象を持っていたところで、そこそこ良い雰囲気の宿に泊まれたとなると、他人に話したくもなるだろう。ドラゴンに関する話じゃなけりゃあ、まあ信じてくれる奴も増える。」
『となると、私達が知なければならないのは、旅人の呼び込みです

か。』
　ドラゴンはまた、落ち込んだ様子になった。
「そもそも、そういった旅人の方々があまり、いらっしゃらないのが問題なのですものね。」
　セイリスの言う通り、宣伝してくれる様な旅人が来るのであれば、この様に悩んだりはしない。
「でもリュンさん、旅の要所としては、結構良い立地にあるって言ってましたよね。」
「だから、それはドワーフに対するイメージの問題で、ここに足を運ぼうとする奴が少ないんだろ。」
　少し考える。リュンの言っている事は正しい事である。ドワーフに対する印象が先行して、里へ向かうという選択肢を思考から奪ってしまうのである。なら、何故、自分達はドワーフの里へ向かったのだろうか。
「イメージの改善が問題なんですよね。そして、立地も宿も結構な物だから、一度来てしまえば、悪い印象は無くなる。」
　ならば、無理矢理にでも里へ向かわせる様にすれば良い。
「攫ってでも連れてくるか？それだと、もっと印象が悪くなるぞ。」
「攫われて印象が悪くなるのは、自分の意思とは関係無い方法で連れていかれるからでしょう。なら、自分の意思で、ドワーフの里に来たと思わせるように、呼び込めば良いんです。」
　森を歩く旅人を特定の状況下に置けば、それも不可能では無い。
「具体的には、どの様な方法なのでしょうか。想像し難い方法なのですが。」
　答えを急かしている風にセイリスが返答して来る。
「例えばさ、僕らはどうして、このドワーフの里に来たのかを覚えている？」
「確か森に居る内に日が暮れてしまったからですわ。そうしたら偶然、近くにドワーフの里がありましたので。」
「それは、あくまで理由であって原因じゃあ無いよね。どうして、

森の中で日が暮れてしまったんだろう。本当は1日で森を通り過ぎるはずだったのに。」
「あら、それなら。」
そう、答えは簡単だ。旅の途中でドラゴンに遭ったからだ。今では安全だと分かるが、前は危険だと判断し、旅の足を止める事になったから、森を抜ける時間が無くなり、ドワーフの里へと向かったのだ。
「そうか、ドワーフの森自体、1日で抜けるには、かなり急ぐ必要がある場所だ。少しでも足止めをしてしまえば、宿を探す必要が出てくる。そして、ここらにある宿と言えば。」
ドワーフの里しか有り得ない。足止めさえしてしまえば、自然と旅人は自分の意思で、ドワーフの里へと来るはずだ。
『しかし、足止めをするにも、その方法が荒ければ、問題にもなるでしょう。それにもし、足止めをされた旅人の方が遭難でもされては、私も心苦しい。』
当然、その点についても考えている。
「ドワーフの里と、森を抜ける道が分かれている場所でのみ、足止めを実行すれば、その危険も無くなりますよ。分岐点にドワーフの里への案内板でも置けば完璧ですね。嫌でも、そちらへ向かう事になります。」
『それは、なんとも、強引なやり方の様な・・・。』
このドラゴン、体は大きい癖になんとも小心者の様だ。強引になるのはこれからだと言うのに。
「今から、臆病になられては困りますよ。だって、一番肝心なのは、あなたがどうするかなんですから。」
『わたしが？』
ドラゴンがアイムの言葉に釣られて顔を上げてくる。
「そう、あなた次第で、これからのドワーフの運命が大きく変わるんです。」
大げさかもしれないが、一応真剣に言っているつもりであった。

森を歩いている。このドワーフの森では、1日で通り過ぎるのが、旅人の中での常識であるので、かなりの急ぎでだ。森の中で一夜を過ごす事は危険である。だからこそ、日が暮れる前に森を抜けなければならない。

だと言うのに、この地響きはなんなのだ。途中までは順調であったはずなのに、この地響きのせいで、足を止める破目になった。この地響きの原因はいったいなんなのか、もしや、これが噂に聞く、森に棲むドラゴンだと言うのか。

その様な葛藤をしているうちに、地響きが大きくなり、森の木々を押し倒しながら、私の目の前に巨大な生物が現れたのである。

「恐らく、あの旅人の方はこれから日が暮れかけるまで、あそこで足を止める事になるのでしょうね。」

木陰に隠れながら、申し訳なさそうな目で、旅人を見るセイリスであるが、だからと言って、ドラゴンを止める事は無い。

「そりゃあまあ、それが商売なんだから仕方ないって。ドラゴンだって承知してくれたでしょ。」

それに、ドラゴン自身はあの旅人を傷つけるつもりも無く。ただゆっくりと、時間を掛けながら、道を横切るだけなので、直接、被害が行く訳でも無い。

「しかし、良く考えたな。ドラゴンを使っての足止めなんて。」

「自分達がドワーフの里に行く事になった場面を、そのまま再現しただけですからね。ちょっとした思い付きですよ。」

ドラゴンには、決して旅人を傷つけず、ただ、道を通り過ぎるフリをする様にと、話しを通している。まあ、あの小心者のドラゴンに限って言えば、その必要も無さそうである。ちなみに、これは、後々、わざと足止めをした事に気づかれない様にするためで、最終的にはドラゴンの事を知って貰い、ドワーフ全体の事も知って貰う事になるだろうから、ドラゴン側に非が有る様にしないためだ。

「それでも、ばれてしまいましたら、どうしますの？」
「そういった事に気づける人なら、ドラゴンとドワーフの関係についても、上手く理解してくれるだろうから、それはそれで良いんじゃないかな。」
結局、ドワーフという種族を理解して貰う事には変わりないのだ。
「しかし、この方法で、どれくらい経てば、ドワーフ達についての知識が広まるってくれるんだろうな。」
「まあ、種族間同士の仲なんて、そうそう変わる物でも無いでしょうが、何もしないよりはきっと早いんじゃないですかね。」
努力という物は、利にならない事が時たま有るが、損になる事は少ないのだから。
「そういえば、今回の仕事では、報酬を貰う事を忘れていたな。」
リュンが思い出したかの様に呟く。
「仕事って、ちょっと話しただけじゃないですか。」
あれで何かを貰っては、相手に申し訳が立たない。
「それでも、向こうの利益になりそうな事をしたんだから、その分の対価くらい貰っても良さそうじゃないか。」
リュンとアイムの間で、口論とも言えない会話が続く。
「二人とも、そのまま口喧嘩を続けていたら、また日が暮れてしまいますわよ。再びドワーフの里に行く事になれば、格好が付きませんわ。」
二人の口論をセイリスが間に入り止める。
「あー、それもそうだな。日が暮れるまでには、今度こそ森を抜けよう。」
「そうですね。今回は途中からだし、足止め役は今、別の人を相手にしてるから、多分大丈夫ですよ。」
そう言って、森を抜ける道へと進みだす。今度、ここに来るときは、もっと人が賑わっていれば良いと思いながら。
「そう言えば、二人が言い争っていた報酬についてですけど、実は内緒で、あの後貰っていましたのよ。」

森を歩いていると、セイリスが突然そんな事を言い出す。あの後というのは、ドラゴンと洞窟で話した時の事だろう。
「貰っていたって。いったい何を？」
「これですわ。これ。」
セイリスは自分のリュックの中から、曲がりながらも、先端が尖った骨の様な物を取り出す。
「これは、もしかしてあのドラゴンの角か？」
どこかで見たことがあるそれは、言われてみれば、確かにドラゴンの頭に生えていた角であった。
「ええ、あの後、せっかくドワーフの里に来たのだから、何かお土産になる物は無いでしょうかと聞いたら、これを頂きましたの。定期的に生え変わるそうですから、別に惜しい物でも無いらしいですの。」
「それでも、ドラゴンの角なんて結構、珍しい物じゃないか。」
「そうですわね。ドラゴンさんも、“今はまだ”珍しい物だから、何かに役立つかもしれないと仰っていましたわ。」
なんと、良く言ったものである。これからは珍しく無くなるという事か。
「もしかしたら、次に来る時は、ちょっとした観光地になっているかもな。」
少し冗談の混じったリュンの言葉であったが、なんだか本当にそうなりそうで、あの生真面目で小心者なドラゴンの事を、応援したくなる話であった。

五つ目は国の間に（1）

大陸の南端、そこは大陸から西側と東側それぞれに半島状の形になっている。まるで二本の牙の様に大陸から伸びるその土地は、それぞれ別の国によって治められ、西側の国はサールマ国と呼ばれていた。

今回、そのサールマ国を目的地とするアイム達は、旅の難所であるドワーフの森を抜け、サールマ国まであと一歩という場所まで来ていた。

「サールマ国って、土地の形状を聞くに、ヒゼル国みたいな海洋国家なんですかね。」

ランドファーマーの少年、アイムはこれから向かう国に思いを馳せる。これから向かう国について想像するのは、楽しみを増やす事に繋がるのだ。

「海洋国家なのは隣のオークマ国だな。サールマはウッドエルフの国家だから、海洋業はそんなに発展しなかったらしい。」

旅に優れた能力を持つツリストのリュンは、この旅においてガイド役にもなっていた。

「ふーん。じゃあ、ドワーフの森みたいな森林地帯が多い国なんですかね。」

エルフはその土地に驚異的な速度で対応できる種族であり、エルフの種族によって、その土地がどの様な場所なのかが分かるのである。そして、ウッドエルフの国という事は木々が多いはずであった。

「昔はそうだったらしいですわ。でも開拓が進む中で、多くの森林が無くなってしまいましたの。今では半島近くにある大きな島の上にしか残っていないそうです。」

そうやって解説する彼女、セイリスもエルフであるが、特に種族が決まっていない平均的なエルフである。アースエルフとでも呼べば良いのだろうが、彼女等は別段自分達を他と区分けしていないの

で、ただ自分達の事をエルフと名乗っていた。
「そうなんだ。それじゃあ、ウッドエルフって言うのも形無しだね。まあ僕としては、また森の中を歩く必要も無さそうで良かったけど。」
森林風景はこれまで歩いてきたドワーフの森だけで十分に満足している。旅をする以上、もっと様々な風景を見たいと言うのは贅沢な事だろうか。
「それよりも仕事の心配をするべきだろう。今回は仕事がすんなりと見つかる保障は無いんだぞ。」
そう言えば、事前の準備も国内へのコネも無い状態で、他国に向かうのはこれが初めてである。
「わたくしとしては、純血教の教えを広める事が出来れば、それで宜しいのですけど。」
セイリスの場合は、宗教的後ろ盾があるのだからそれで良いのだろうが。
「俺達は雇われ者だ、なんとしても結果を出さなければならない。」
結果の出せない商人なんて、遊び人と何が違うと言うのだろう。
「まあ、それも、サールマ国がどうなってるかによりますけどね。」
何をするのにも、自分で観察する事から始めるのであり、この目で国内の状況を見てからでないと、どんな考えも予想に過ぎないのだった。

サールマ国に着くと、さっそく、入国の際にありがちな荷物検査が待っていた。検査をする係員はエルフとしての特徴である尖った耳と、少し長い印象のある腕が目に付いた。
「あの人達が、ウッドエルフなんですか？」
腕の長さは、ウッドエルフとして、森林の中で暮らすのに役立つのかもしれない。
「多分な。俺もエルフの種族差に関しては、そんなに詳しくないんだが・・・。」

自信なさげに頷くリュンを見て、そういった知識に関しては自分と大差無いのだと感じる。
「間違い無くウッドエルフとしての特徴ですわ。髪もどこか緑がかった色をしていますでしょ。あれも保護色としての色ですわね。」
同種のエルフである、セイリスが言うのであれば間違い無いだろう。やはり、ここはウッドエルフの国なのだ。
「それでも・・・。少し、特徴が薄いというか、別の場所で見たウッドエルフの方が、もっと見ただけで分かり易い色合いしていたと思うのですが。」
この国のウッドエルフは、他のウッドエルフよりらしくないと言う事か。
「開拓で、森林も無くなってるんでしょ？その影響じゃない？」
今の所、影響がそれしか考えられない訳である。
「そうですわね。でも、それにしては急な様な・・・。」
セイリスは悩んだ表情をしたと思うと、考え込み始めた。彼女なりに、何か思うところがあるのかもしれない。
「それにしても、入国審査って相変わらず時間が掛かる物なんですね。」
サールマ国に来てから、随分と待たされている様な気がする。
「また、荷物に鍬なんて入れてるんじゃないだろうな。」
こちらを睨んでくるリュンであるが、彼も変わらず、こちらの事を理解していないと思われる。
鍬を怪しまれる時間を考慮しても、時間が掛かっているから、聞いているのだ。
「もしかしたら、国内で何かあったのかもしれませんわね。」
セイリスが突然、物騒な事を言い出した。
「何でそう思うんだ？」
「いえ、ただの予感ですわ・・・。そうでなければ良いのですが。」
不吉な事を言うセイリスを見て、なんだかこちらも不安になってくる。そういう事は思っても言わないでくれると助かるのだが。

「どっちにした所で、このまま帰る訳も無いのだから、心配したって仕方の無い事だろう。まあ、一応、注意して置くが、本当に、君の考えは根拠の無い予感なんだな？」
根拠なんて物があれば、それは予感では無く、予想である。当然、後者の方が当たる確率が高い。
「ええ、もちろんですわ。きっとわたくしの思い過ごしだと思われますの。」
健気にそう話すセイリスであるが、その後、サールマ国の入国審査官が来て、国内では怪しい事を一切しない様にと、必要以上に注意してくる姿を見ると、なんだかセイリスの予感が当たっていそうに感じてしまった。

サールマ国内の様子と言えば、どこか活気が無くなっている様に見えた。道を歩くウッドエルフ達は、多くが肩を落とし、こちらを見ると、一瞬、怯えた表情をするのだ。
「なんなんでしょうね、これ。歓迎されて無いというより、警戒されてるというか。それ以前に町全体に元気が無いというか。」
これまで旅してきた国が、皆、活気に溢れているか、何がした前向きだったのに対して、こういう雰囲気は初めてである。
「国風と言えばそうなんだろうが。いや、でも、どうも違う気がするな。」
国民が暗い国風なんて、どんな状況だろうか。
「きっと、何か理由があるはずですわ。これから、この国で仕事をする予定なんですもの、知って置く必要がありますわね。」
確かにその通りだが、展開が強引な気がする。彼女は何か焦っているのだろうか。それとも、同種のエルフに対して、何か思う所があるのか。
「まあ、情報収集も大事だが、それ以上に宿を探すべきだ。拠点が無ければ、仕事を探すのも、国について知るのも出来やしないだろう。」

リュンは、セイリスの焦りを感じ取ってか、それを抑える様に、まずすべき事を提案する。
「宿ですか。そうですね、実は、入国審査に時間が掛かったから、ちょっと疲れてるんですよね。一度、どこか探して休みましょう。」
リュンの提案に乗る形で話を進める。セイリスの件は気になるが、それも、一度、落ち着いてからの方が良いだろう。
「ああ、でも、そうですわね。わたくしがどうしようと、仕方の無い事かもしれませんし。」
やはり、何かを悩んでいる様子のセイリスに理由を聞きたくなるが、それに関しても、宿を見つけてからでも遅くは無い。
「なら、決まりだな。二部屋は取るんだし、安上がりな宿があれば良いんだが。」
男女の混じった旅人は、そういった事に気を使う必要がある。野宿であれば、むしろ、あまり気を使う必要が無いのに、宿となれば、別々になるのはどうしてだろうかと思う部分もあるが、まあ、仕様が無い事であった。

結局、町に入ってすぐ近くにあった宿に泊まる事になる。探すといっても、宿程度でそこまで時間を掛けるのも何だし、町の入口の方が、旅人向けの宿が多くあるからだ。
一応、リュンの期待していた通り、安値の部屋を借りる事が出来たが、その内装も、値段相応である。
「結構、掃除して無い部分も多いみたいですね。まあ、ベッドや机なんかは、まだマシだから良いのかな。」
借りた部屋に行き、内装を見渡す。宿自体は木材を主な素材として作られたロッジ風である。森が少ないとは言え、ウッドエルフの国らしい宿と言えるだろう。
だが、あまり手入れはされていない様で、目の届かない場所に埃が溜まっていたり、歩くたびに床がギシギシと鳴る。
「というか、教団から旅費は貰ってるはずですよね。なんで、わざ

わざ安い宿なんか。」
「借りを作りたく無いんだ。旅費は経費であって報酬じゃあ無いからな。使えば使う程、教団に金を使わせる事になる。」
恩は時に行動を縛る物になる。それが組織からの物であれば尚更だ。だから、教団からの金銭に関しては、あまり使いたく無いのだろうが。
「だったらセイリスは、もうちょっと良い宿で休ませてあげれば良いじゃないですか。」
彼女は組織に雇われているのでは無く、組織の人間であり、恩を受けたところで現状は変わらないだろう。
「まあ、そうなんだが、理由を話して、自分だけ上等な宿を借りる様な娘に見えるか？」
「見えませんね。」
絶対に、自分も安宿の方に泊まると言うに決まってる。
「セイリスと言えば、彼女に関してですけど、なんだか様子がおかしく無かったですか？」
この国に来てから、何かに悩んでいる様にも見える。
「うーん、そうだな。同じエルフの国だし、思うところがあるんじゃないか？」
「そんな事言ったら、大陸中のだいたいの国で、彼女はあんな調子だって事ですか？　有り得ないですよ。」
大陸で一番繁栄しているのがエルフなのだから、殆どの国がエルフの国と言う事になってしまう。
「しかし、悩みなんてのは本人にしかわからん物だしなあ。打ち明けてくれるんなら兎も角、本人が自分で抱えている内は聞いても意味が無い。」
「そんな事わかってますよ。けど、あからさまに、考え事をしてますって態度は、こっちの調子までおかしくなりそうというか。」
悩んでいる本人より、その周りの方が気を揉むというのはよくある話なのだ。

「だな。それじゃあ、仕事を探すついでに、そこらへんを探って見るか。国内の情勢がわかれば、彼女が何に気を取られているのか、わかるかもしれんぞ。」
つまり、やることと言ったら、いつもの様に情報収集と言う事か。
「結局、出来る事なんてそうそう無いって事なんですかね。」
「当たり前だ。」
何を今更と言った目で、こちらを見てくるリュンであった。

情報を集めていれば、自然とこの国の事が知れてくる。別に誰もが、国の事を話すのでは無く、その仕草や雰囲気だけ見ても、国独自の物があるのだ。つまり、ただ会話しているだけでも、国の情報と言うのは自然と集まってくるのである。
基本的に、話を聞くのは商店の店員だ。こちらも仕事を探しているのだから、そういった商売と関係がありそうな人物から話を聞いていく。
特に利用するのは、食料品店だ。こちらが、農業に関係する仕事を探しているのに対して、向こうもそれに縁深い。そして、情報の聞き易さも重要だ。こちらが、旅用の食料を買うだけで、聞き込みのし易さが大きく違ってくる。店員と言うのは、客に対する態度を軟化させる物だ。
「そこで分かったのは、この国の人たちは、森林地帯の増加を目指しているって事なんですよね。」
宿で一夜を過ごし、その後の朝から始めた情報収集で集めた情報を、リュンと街路を歩きながら話し合う。ちなみにセイリスは、別口で国内の状況を知りたいと、一旦、完全に離れて行動している。
「こっちでは、国内産業をもっと発展させるべきだという声が、国内で大きくなっているらしい話を良く聞いたな。実際、もっと国に対して誇りを持つべきだとか、自分達の立場をもっと明確にとか、独立という観点の話を聞きもしないのに、話す奴が多かった。」
「これって何か関係があるんですかね。」

手当たり次第、聞いてみたが、関係の無い話であるならば、かなりの無駄骨になる。
「国内の情勢に限って言えば、関係の無い話なんて無いだろうさ。まとめれば、この国は独自産業を発展させたいという考えの元、森林地帯の増加、いや、元々はここだって森林地帯だったんだから、復興か。その復興を目指しているって事になる。」
森の復興。一度、開拓した土地を、もう一度、森に再生させようと言うのは、なんだか、綺麗な言葉に聞こえるが、便利な土地を不便な土地にしようとしているのだから、何某かの思惑を感じずには居られない。
「木材の輸出を計っているとか。」
「うーん。確かにサールマ国産の木材は、品質が良いとは聞いたことがあるが。結局は、森林地帯のを開拓する上で出る、木材を商売に使っていただけらしいからなあ。木材を売るために、土地をまた、森林地帯に戻すのなんて、本末転倒じゃないか？」
「だから、その本末転倒が起ったんじゃないですか？この国では、森林地帯の開拓が、かなり進んでいるんですよね。進み過ぎて、商売用の木材が産出できなくなったとか。」
だとすれば、これは自分達の仕事に関わってくる事かもしれない。林業と農業の違いはあれど、植物を育てる事には違いが無い。もしかしたら、こちらの技能が役に立つ仕事というものも、見つかる可能性が高いだろう。
「まあ何にしても、今、この国では森林に関する事柄が、かなり重要な物らしいな。」
「でも、それがセイリスの悩みと、どう関係してくるんでしょうね。」
情報を集めれば、分かってくるかもと思えたが、どうにも関係性が思いつかない。
「あ？あー、そうか、そういった事も考慮して情報を集めてたんだっけか。」

「もしかして忘れていたんですか？」
国内情報を収集していれば、彼女の悩みが判明するかもしれないと言ったのは、そっちだろうに。
「いやあ、ちょっと頭の中から抜けていたと言うか。そうだ、実は彼女は、森林を守る会という組織に入会していて、森林開拓が進む、この国内情勢に危機感を覚えている。とかはどうだ？」
「どうだと言われても。」
その想像に何の意味があるのか。
「まあ、実際、これだけ調べてみて分からないなら、もう気にしない方が良いんじゃないかね。そもそもの本分は仕事探しなんだから、そちらに集中すべきだと俺は思うぞ。」
そう言われれば、肯定するしか無い。
「でも、仕事って言ったって、当ては無いじゃないですか。」
森林業に関する物があるかもしれないと言ったが、それもまた想像でしかない。また、例え仕事があったとしても、一介の旅人に任してくれる仕事かどうか。
「それこそ、森林を守る会なんてのがあるんじゃないか。」
「都合良く？　本当にそう思ってます？」
「あまり自信は無い。」
リュンは頭を掻きながら、困り顔で答えた。

さて、当てが無くとも、探さなければならないのが仕事と言う物である。しかし、やる事は変わらず情報集めなのだから、進展という物はなかなか無い。であれば、冗談めかして言った森林を守る会といった物が、本当に無いのかについて聞いて回るというのも仕方の無い事である。
ただ一つ誤算があるとすれば、それが本当にあったという事だろう。
「探せばあるもんなんですね・・・。」
アイムは目の前にでかでかと看板に書かれた「森林を守り増やそ

う！国のため。」という文字を見る。看板は建物の入り口の右横に立て掛けられており、左側には「森林を守る会」会館と書かれた表札がある。
「名前まで一緒なんだものなあ。人が考える事なんて、結局変わらないのかもしれない。」
うんうんと肯くリュンであるが、自分の想像が当たって嬉しいのか、どこか満足気である。
「まあ、それはそれとして、どうやって僕達を売り込むんですか？
ヒゼル国みたいに旅人用の仕事紹介がある訳でも無いんですよね？」
「ああ、それほど大きな組織でもなさそうだしなあ。でも、入ってみなけりゃあ、何も始まらないだろ。」
そう言ってリュンは会館の扉を開く。
「あら？　どうしてリュンさん達がここへ？」
確かに入ってみなければ何も始まらない。扉の先に、何故かセイリスが居る事なんて、思いもよらない事だからだ。

森林を守る会にセイリスが居る。それはリュンの予想を裏付ける結果であり、セイリスがこの国の森林開拓に心を痛めているという証明でもあった。
「ちょっと待って下さいまし。わたくし、その様な事は一切ありませんわよ。」
セイリスが弁解する様に慌てて言い返してくる。
「だったら、なんでこんな場所に居るのさ。森林を守る以外に、森林を守る会に居る意味なんて無いでしょ。」
きっと彼女は、この国に来てから、今に至るまで、この国の現状を憂いていたに違い無い。
「だから、違うと言っています。私、ここに来たのは今日が初めてですのよ。」
「そうですね。彼女は森林の心配と言うよりは、私たちウッドエル

フの心配をなさってここまで来たのですから。」
反論を続けるセイリスの横に、突然、男が現れる。男は、整えられた髪形と唇の上にしっかりと切り揃えている髭、服も新品同様の皺の無い服装で、見るからに紳士風の出で立ちであった。
「えっと、あなたは？」
突然現れた男に一瞬、戸惑う。その特徴は今まで見てきたウッドエルフの特徴を、さらに強くした様な風貌だったからだ。
髪は深い濃緑色で、腕は体に対して、不自然な程長く感じる。
「申し送れました、私、森林を守る会の会長をしております、ウッドエルフのフェリウスと申します。」
どうしよう、いきなり大物に出会ってしまった。いや、まあ、森林を守る会とやらが、権力を持っていれば、そうなのだが。
「そんな人がいきなり出てくるなんて、もしかしてセイリスのフィアンセとか。」
「わたくし、この方に会ったのも、今日が初めてなのですが。」
「じゃあ、今日から恋が始まったって事！？」
「どうしてそうなりますの！」
どうにも、合いの手が漫才みたいになってきた。なんだか、先ほど自己紹介を果たしたフェリウス氏が、生暖かい目線で、こちらを見ている様な気がする。
「この二人については置いておくとして、フェリウスさんと言ったか、さっきの話の続きをして欲しいんだが。確か、セイリスがウッドエルフの心配をしてどうだとか。」
今まで黙っていたリュンが口を出してくる。まあ、不毛な言い争いが止まったのだから良いのかもしれないが。
「その事でしたら、彼女はこの国のウッドエルフが抱えている問題を、同じエルフとして相談に乗りたいと申し出て来られたのです。」
フェリウスというウッドエルフは嬉しそうに、その事を話す。
「それと言うのは、もしかして純潔教として相談に乗ったと言う事なのか？」

リュンはセイリスに向かって聞く。純潔教に関しては敏感になっている彼である。
「はい、私個人で解決出来る物では無いと思いますので、そういう事になると思いますわ。」
つまり、セイリスはさっそくこの国で仕事を見つけたらしい。
「出来れば詳しい話を聞かせて貰えないだろうか。我々も、そこに居るセイリスと同様、純潔教と無関係では無いし、仕事の内容上、役立てる知識があるかもしれない。」
せっかくの商売の機会を逃す訳には行かぬと、どうやらリュンは自分達も売り込むつもりらしい。
「仕事の内容上ですか・・・。セイリスさんには話をするつもりでしたが、あなた方に関しては、その商売の内容というのを教えて頂かなければ、容易に教える事が出来ないのですが。何分、デリケートな問題でして。」
こちらの提案に関して、すぐに同意を貰えなかったが、それでも話を聞いて貰える状況になった。あと、リュンの交渉次第である。
「当然、私たちの仕事については話します。その仕事の内容を聞いてから、話をするかどうか決めてくださっても結構ですよ。」
だがまあ、話の上手いリュンの事であるから、成功する可能性は高いと思われる。

結局、予想通り、セイリス以外の自分達にも、この国の問題とやらを話してくれる事になった。
リュンが、この会の性質上、問題とは森林に関する事だろうという予想し、こちらの仕事内容を、植物に関して有用な物であると、少々、捻じ曲げて伝えたのが効いたらしい。
「純潔教の方と、植物に関する仕事をなさる方。その様な方々が、この時期に来てくださったのは、大変嬉しい事です。運命めいた物すら感じます。」
フェリウスの話は想像した以上に深刻な物で、まさにウッドエル

フ全体に関わる問題であった。
　エルフ種族は土地に適応して、その体質を変えていくのは周知の事実であるが、それはつまり、再び環境が戻れば、体質変化も元の状態に戻ってしまうという事である。
　他種族から見れば、便利な体質だと考えるかもしれないが、エルフ達にとって、変異した体とは一種の誇りに近い物なのである。その変異が、森林の減少によって元に戻ってしまうのは、この国のウッドエルフ達から見ると、拠り所を失ってしまう事になりかねないのだ。
「そうか、だから、この国のウッドエルフの人達は、見た目が、他のエルフと見分けが付き難いんですね。」
　セイリスも、確かこの国のウッドエルフは特徴が薄いと言っていた気がする。
「ええ、私などはまだ、その変化が弱い身ですが、だからこそ、危機感を覚え、この会を作ったのです。」
　そう言えば、フェリウスはウッドエルフとしての特徴がしっかりと有る。
「あれ？　でも、ちょっとまって下さいよ。サールマ国で森林の開拓が始まったのは結構前の事なんでしょ？なんで、それに対する体質の変化が、今になって問題になるんです？」
　それなら、そもそも森の開拓などしなければ良いのだ。
「森林開拓によって、体質が変化して行く事への懸念は当時から既に存在していました。だから、ある場所を除いて森林開拓を進め、定期的に、その場所へと滞在する事で体質を維持し続けるという事を、文化として受け入れていたのですよ。」
「ある場所、もしかしてサールマ国で唯一、森林地帯が残っているという島の事か。」
　合点がいった様に、リュンは手を叩いた。
「その通り、シクラ島という名の島で、我々にとっては聖地とすら呼んで良い程、重要な島です。」

自分達種族を確立するための場所であるのだから、そうもなるだろう。
「つまり、その島に問題が発生してしまったということですの。」
セイリスが深刻な顔をしながら続ける。彼女は、同じ体質と似た考えを持つ同種として、ウッドエルフがどの様な状況になっているのかを、薄々感づいていたのだろう。
「島に問題？　森か無くなって行ってるとか。」
それならば、自分達の技能が役に立つかもしれない。
「いえ、事態はもっと俗な状況で・・・。」
頭を抱えるフェリウスを見ると、それが、一朝一夕に解決できる物では無いと感じる。
「実は、隣国オークマが、シクラ島の領有を主張し出したのです。」

五つ目は国の間に（2）

サールマ国とオークマ国の関係とは、元々は相互依存の関係にあった。サールマ国側が森林開拓を進める上で出る木材をオークマ国側が買い取り、その対価として開拓に必要な物資や労働力がサールマ国に供給される。

一方、オークマ国側は海運業を生業としている以上、船の材質に良質な木材は必要不可欠であり、どれだけ、サールマ国側が木材を売り込もうとも、それを消費できるだけの需要がある。当然、船の総数が増えれば、オークマ国側の利潤は増える訳で、双方にとって損が無い関係が続いていたと言える。

そんな関係が崩れたのは、サールマ国側が森林開拓を完了させた時期からである。持ちつ持たれつと言っても、実際には不平等が生じていたからだ。

その不平等とは、この交易にサールマ国側の損が無い事であった。オークマ国側は木材を買う代わりに、その代金を払っていた訳だが、サールマ国は開拓業そのものが、土地の効率化を向上出来る物であり、さらに邪魔な木材を買い取る存在が居る。サールマ国側が得る利益の方が、オークマ国側よりも圧倒的に多いのだ。

それも、交易が続いている内は顕在化しない、不平等と言っても、存在する利益がそれを隠し抑えていた。

だが、サールマ国が開拓を終えた結果、オークマ側が要求し続けた木材の供給が滞る事になり、オークマ国は事の不平等にようやく気付く事となった。相互の依存では無く、自分達のみが、この関係に依存していたのだと。

「それからは、決定的に関係が悪化して行きました。それまで、順調に行っていた交流も少なくなって行き、今では、向こうは前まで と同じ量の木材を、前より安く提供しなければ、交流を再開しないとまで言ってきています。」

話を聞いた限り、フェリウスが頭を抱える理由も分かる。オークマ国の要求は、到底不可能な物だからだ。
「それでも、心情的にはオークマ側の気持ちが分かってしまいますけどね。一方的に利用されたと感じても可笑しく無いし。サールマ側は何か対策をして無かったんですか？」
アイム達は部外者である以上、どちらの国にも公平な目線で状況を見る事が出来る。そしてその目線で見れば、非はサールマ国側にあると感じる。
「交易が上手く行っている頃でも、その交易自体に相互の関係を悪化させる要因があると気が付いている方々は居たそうですが、やはり、利益が出ている状況では、見向きもされなかったらしく。」
まあ、結局はそういう物だろう。特別に悪意があった訳でもあるまい。臭い物には蓋をして置きたいのが人情だ。
「それで二つの国は、最終的にシクラ島の領有権争いにまで発展したのか。下手を打てば戦争じゃないか。」
珍しく深刻そうな表情をするリュン。
「ええ、その通りです。現在、国の方もなんとか対応しようとしているのですが、シクラ島の領有権主張自体が、オークマ国の利益のためでなく、感情論から来ている節がありまして、それもなかなか。」
「あれ？　シクラ島には木材用の森林があるから主張しているんじゃないの？」
感情論が入っていないと言えば嘘だろうが、それでもオークマ側は国家の利益を考えていると思っていた。
「国内に無い資源を確保する場合、別の国が格安で資源を輸出してくれるという状況だからこそ、その資源を利益に換える事が出来るのですわ。一方的に資源を奪った所で、生産、加工といった工程を自国だけでするコストが、これまでを上回れば、結局、奪うだけ損という事になりますの。」
歴史の知識が深い純血教徒だけあって、セイリスの話は国家の関

係に詳しい。
「つまりオークマ側は利益だけ考えれば、シクラ島を領有するのは意味があまり無いという事か。」
「ええ、オークマ国は、今現在も海運業を営む国家なのでしょう？
シクラ島を領有するという事になれば、それに加えて、林業にまで力を入れる必要がありますわ。でも、それには新たな人材や、技術を育てる必要がありますもの。オークマ国がその様な事をしているといった情報は、ありませんの？」
「そうですね、その様な事は聞いた事がございません。」
セイリスの問いに頷くフェリウス
「という事は、完璧に向こうの国家感情自体が悪化しているって事じゃないか。フェリウスさん、それは個人間同士の対応じゃあとても解決できない物だし、失礼だが、この森林を守る会とやらの力を大きく越えているんじゃないですか？」
確かに、国の代表同士の話し合いならともかく、民間人が作ったであろう組織が出来る仕事じゃないし、そもそもする責任は無いはず。
「そうですね、それは確かにその通りなのですが・・・。」
こちらの返答に俯くフェリウス。
「フェリウスさん。我々は自分の仕事はするつもりですが、あなた方の目的は何なんでしょう。悪いが、ここの会は権力を持った組織には見えないし、かと言ってサールマ国側のやり方に対しての反発から生まれた組織にしては、あなたは実に冷静だ。状況という物が分かってらっしゃる。まさか、本当に森を守るだけの会とは言わないでしょうね。」
リュンは畳み掛ける様に話し続ける。交渉では、相手を戸惑わせた方が上手くいくと考えているリュンらしい話し方だと考える。
「いえ、一応、表向きはただ、森林を守るためだけの組織なのですよ。」
「つまりその表とは違う裏があると。」

リュンはすぐさま口を入れる。話を止めるつもりは無いのだろう。あくまで、こちらを優位に置きたいのである。
「裏、そうですね。裏です。この組織にも、実に利己的な裏側があるのですよ。ただ、それを聞かせるとなると、確実にあなた方が我々に協力してくれるという補償が無ければなりません。逆に聞きますが、あなた方は私達の仕事を手伝う事に同意してくれますか？」
これ以上聞きたくば、嫌でも手伝って貰うという事だ。なるほど、交渉云々に関しては、ここらが限界なのだろう。情報が不確かな状態でも、仕事を受けるかどうか決める必要があるくらいのデメリットは、こっちで持つべきとも思える。
「それじゃあ、一つだけ良いですか。内容については詳しく言わなくてもいいです。ただ、あなた達がしている仕事について、あなた達自身、正当性のある仕事だと思ってやっていますか。」
これは絶対に外せない質問だ。これにいいえと答える様な仕事であるのなら、決して受ける訳には行かない。
「当然です。我々は自分の利益は考えてはいますが、それでも、自分の正義感に背いた覚えはありません。」
決まりである。

そして現在、アイム達は、サールマ国からオークマ国へと向かう道を歩いている。サールマ国に一泊して直ぐの事であるから、かなりの強行軍だ。
フェリウスがまずこちらに頼んできた仕事は、オークマ国へ入り、国内がどの様な状況になっているか調べる事。つまり諜報である。
「なんだか、農業から仕事がどんどん離れて行ってる気がしますね。」
確か自分は農業技術や知識を集め、売るために各地を回っているはずなのである。
「まあそのうち、それらしい仕事も来るだろ。今回はたまたまこういった仕事が回ってきただけだ。」

だと良いのだが。最近、自分の知識が役に立っているのか不安に思うことがある。
「そんな事より、森林を守る会の裏側についてだ。思った以上に根が深い物で驚いたな、あれは。」
仕事を請け負う上で、フェリウスから教えられた事である。組織の目的を知らなければ、十分な仕事は出来ないのだ。
「根が深いと言っても、構造は単純な物でしたわ。要するに両国の関係が良好だった頃に利益を得ていた方々がスポンサーになり、組織運営をしているということですから。」
つまり、森林を守る会のトップは両国間の関係を維持したい人物という訳である。
「となると、今回の仕事は、相手国の様子を見て、両国間の関係改善の糸口を探るって事かな。」
「それは宜しい事ですわね。」
ひさしぶりに嬉しそうな顔をするセイリス。彼女がサールマ国に来てから塞ぎ込んでいた原因を、自分達の仕事で解消できるかもしれないからだろう。
「そんな簡単に行けば良いけどな。」
そこに水を差す様に話すのは、当然リュンだ。
「というと？」
意味の無い事を言わない奴ではあるので、詳しく話すよう促す。
「仕事内容はオークマ国内に潜入して、二国間の改善に繋がる情報を探れという物だろ？」
「ええまあ。僕らは旅人ですからね。潜入もサールマ国人より簡単だし。情報収集だって新しい国に来たら、だいたいしている事でしょう？」
特別、難しい事も無いだろうに。
「それだけの仕事のために、組織の内情を明かすかね。実際、向こうに入国してみたら、厄介ごとが飛び込んで来る気がしてならないんだ。」

不安になりそうな話をするリュン。古今東西、嫌な予感とやらは、外れる事の方が少ないと聞くので、その様な事は言わないで欲しかった。

オークマ国への入国も、サールマ国と同様に厳しい物であった。やはり、こちらの国も隣国への警戒心から、監視を強化しているのだろう。自分達が来た側が、サールマ国からの道だったのも、その理由の一つかもしれない。

とは言っても、自分達は所詮旅人である。まさか、サールマ国内の組織から国内情勢を探るような仕事を請け負っているなど、直接見ていない限り、知る由も無い。

時間は掛かったが、仕事だと思えば何のことは無い。無事、オークマ国への入国は済んだ訳である。

入国した際のオークマ国内の風景は、どこか見覚えのある物であった。

「なんでだろうと思いましたけど、多分、ヒゼル国に似ているんですよね。」

同じ海運業を営むという点で近い文化が出来るのかもしれない。

「ヒゼルとオークマは、それぞれ大陸の北西端と東南端に位置する半島国家ですの。そのせいか、海運業を主体とする点も似ていますが、その文化自体もどこか似通った物に成っているらしいと聞いていますわ。」

セイリス自身はこの国に来た事は無いらしいが、よく聞く話だそうだ。

「それじゃあ、ヒゼル国みたいに、商船組合みたいな物があったりして。」

「いや、この国は組合が牛耳ってるんじゃなくて、開国当初に、商船業で稼いで力を付けた奴らが貴族を名乗って、国家運営をしていると聞くな。」

つまり、儲けた者勝ちな国であるという事か。

「なんというか、堅苦しそうな国って印象を持ちそうなんですけど。」
自分達を貴族と名乗っている時点で、なんとなく、嫌な印象しか持たないのである。
「そうは言うが、貴族を構成する種族が一つの種族だけって訳じゃ無いから、ヒゼル国みたいに、種族間の対立が深刻化していないって利点もあるんだがな。」
そう言えば、ヒゼル国ではシーエルフと他の種族とで、対立問題が起こっていたが、この国ではそれが無いのか。
「あと、貴族制が悪いという事になれば、サールマ国だって似たような国制ですから、同じく、悪い印象を持ってしまうという事になりますわね。」
セイリスの説明を聞いて驚くアイム。
「え、サールマ国もそうだったんだ。でも、そう言えば、あんまり窮屈には見えなかったなあ。」
サールマ国に入ってから、すぐにオークマ国に向かう事になったので、国制なんかについては、あまり知らずに通り過ぎてしまい、知る機会が無かった。
「結局、貴族だ王様だと言っても、国の方針を決める程度の役目だからな、ヒゼル国の商船組合なんか見ててもわかるだろ、いくら強力な権力を持ってたって、あちこちに良い顔しなきゃ行けない以上、そんなにその力を行使する機会なんて無いのさ。だから、国風なんてものを決めるのは、国民自身なんだろうな。」
という事は、この国の雰囲気が暗いのは、貴族がどうとかより、国民が総じて暗いのか。
「というか、本当に、暗いですね、みんな俯いている感じがするというか、お先真っ暗って雰囲気が漂ってきてますよ。サールマ国だって大概でしたが、ここはもっとだ。」
サールマ国の領土を奪おうとしている国と思っていたので、むしろ好戦的な雰囲気があるのかと思ったが、まったくの正反対であっ

た。
「何か、理由があるのかもしれませんわね・・・。」
何かとは、つまり、新たな問題があると言う事か。
「だから言ったろ、一朝一夕で出来る仕事じゃ無いってさ。」
リュンの投げやりな笑顔を見て、体がドッと疲れだすのを感じるアイムであった。

さて、どれだけ疲れて居ようと、オークマ国内の情勢を探るのが仕事であるので、やらない訳にも行かない。
「で、どうします。とりあえず、お約束で宿でも見つけますか。」
旅先での基本はやはり拠点探しから始まるのだ。
「あー、一応、フェリウスさんから、紹介された場所があるんだよ。と言っても、向こうはオークマ国と交流を絶って暫く経つから、まだあるのかどうか心配らしいんだが。」
リュンがフェリウスから預かったらしきメモ用紙を見る。内容は大まかな地図の様である。
「ここから結構近いみたいですね。行くだけ行って見ましょうよ。無くても、別にこれといって困る訳でも無いですし。」
「そうですわ。フェリウスさんの紹介された場所ですもの。悪い場所では無いと思いますの。」
エルフ同士、何か通じ合う物があるのか、セイリスはあのウッドエルフに対して、ある程度の信頼を感じているらしい。
「うーん、それもどうなのか。と、着いたぞ、ここだ。」

リュンがどこかへ歩き続けていたので、それに付いていきながら話していた訳だが、どうやら、そもそも紹介された場所へ向かっていた様だ。
だから、話している内に、その場所へ辿り着いてしまった。
「宿か何かと思ったが、どうやら違うみたいだな。」
その建物の前には、例のごとく「平和を守る会」と書かれている

看板が立て掛けられていた。何故だろう既視感がある。
「森林を守る会からの指示で、平和を守る会に向かうというのは、なんだか複雑な気分ですわね。」
確かに、というより酷く陳腐な展開に思えてきた。
「これで、扉を開けたら仲間のエルフが居たなんて展開になったら、面白いんだろうけどな。」
そこまで一緒と言う事もあるまい。何よりその仲間のエルフは既に隣に居る。
「とにかく、入ってみましょうよ。絶対、ここが紹介されている場所ですから。」
名前だけで、森林を守る会が、とりあえずここを目指せと言っている事が分かるのだ。

扉を開けて、中に入ると、そこには知り合いのエルフが。なんて展開は無かったが、変わりに紳士風の人影が見えたのは、既視感の一部に数えても良さそうな物である。
「おや、客人ですかな。」
こちらの来訪に気づいたらしく、紳士風の人影が近づいてくる。どうやら男性で、見た目の印象はエルフでは無く、人間に見えた。
「失礼します。フェリウスという方から、こちらを紹介されて来たのですが。」
リュンが口を開くと、紳士風の男は少し考えた素振りをしてから、ふと思い出したかの様に話し出した。
「ああ、フェリウスさんですか、森林を守る会の。」
男性の口振りから、この場所が間違いなく、フェリウス氏が紹介してくれた場所である事がわかった。
「ええ、その会の紹介で、オークマ国を訪れたら、この場所に来る様にと伝えられていたツリストのリュンと申すのですが。」
リュンが率先して話を続けていく。とりあえず話し合いの場で、彼が目立って話を続けるのはいつもの事であった。

「我らが会をですか・・・。もしや、御三方はサールマ国からの客人では？」
男は何故か、こちらの素性に気がついた様だ。
「ええ、その通りです。この国でサールマ国の名前を出すのは、危険な事なのではないかと思い、名乗りませんでしたが。」
現在、両国間の関係が複雑な状態である以上、誤って、サールマ国の名前を出すのは無用の騒動を引き起こす可能性がある。
「ああ、そうですね、その通りです。懸命な判断と言えるでしょう。両国の関係は今、深刻な状態にあります。」
男は深い溜息を吐きながら答えてくる。
「しかし、サールマ国に対して悪い印象をあなたは・・・えーと。」
「おや、これは失礼しました。私、人間種族のケイという名前です。」
「ああ、ケイさんはサールマ国に対して、言われるように悪い印象を持ってらっしゃらない。」
確かに。むしろ、こちらがサールマ国から来た事を知ると、少し喜びの混じった表情をしている様子であった。
「その事でしたら、私はこの会の名前と同様に、平和を愛していますから、サールマ国に対するそれも、この国の他の方々より悪くは無いのでしょう。」
「じゃあ、今は平和を守るためにどんな活動をしているんですか？」
気になったので、ケイに尋ねてみるアイム。ちなみにその質問にケイの表情が少し硬くなった様に感じる。
「それは勿論、両国間の関係を改善するための運動を、継続して行っています。しかし情勢が情勢ですので、なかなか上手く行きませんが。」
もっともな返答であったが、何か重要な事を隠しながら話している気もする。
「ケイさん。率直に言って、私達は「森林を守る会」に雇われてこ

こまで来ました。依頼内容は、オークマ国内の情報を集める事。つまり、サールマとオークマの関係を改善させる切欠となるものを探すようにと。」
「ちょっと、リュンさん？　」
本来、隠すべきである依頼内容を、突然話しだしたリュンを止めようとしたが、逆にリュンの手に遮られてしまう。
「その際にオークマ国内のこの場所を紹介されたのです。これは、この「平和を守る会」という物が私達の仕事に大いに関係のある場所と言う事でしょう？　いっその事、そちらの内心も話してもらえませんか、それがお互いの役に立つと思うのですが。」
要するにリュンは「平和を守る会」と「森林を守る会」が敵対する両国に存在しながら、裏で繋がっていると考えているのだ。
名前が似ている事からの発想という訳でも無いだろう。そもそも、このケイという人物は、両国の情報が伝わり難い状況で、「森林を守る会」のフェリウスの名前と、彼がサールマ国の人物である事を知っていた。
今回の仕事に無関係であるはずが無いのである。
「なるほど、という事はやはり、あなた方はフェリウスさんから、両国の現状をどうにかするために、オークマへとお越しになったのですね。」
ケイの顔つきが優しげな表情から、鋭い目付きになる。
「そこまで大それた物ではありませんわ。ただ、両国間が直接争う様な状況を避けるために、何か情報が欲しいとだけ。」
今まで黙っていたセイリスが話しだす。そもそも、この仕事自体、彼女が最初に見つけてきた物だと言える。
「とは言っても、「森林を守る会」も「平和を守る会」も、別にそれほど大きな組織ではありませんから、何か有益な事を行える保障は無いのですが。」
ケイの言葉には若干の嘘が混じっている。確かに会自体は大きい物では無いが、「平和を守る会」が「森林を守る会」と同じ様な組

織であるならば、国に対する影響力を少しは持っているはずなのだ。
「フェリウスさんから「森林を守る会」の内情を聞く機会がありましたわ。会のスポンサーは、両国間相互の交易によって利益を得ていた方々であると。」
「はい、その通りです。「平和を守る会」も同様ですが、それが何か。」
ケイは引き続き、話をはぐらかす。
「ああ、そっか。その事で利益を得る様な人物って言ったら、国の最初期から交易を続けている貴族達じゃないか。そりゃあ、影響力があるよね。」
実は、あまり状況を理解していなかったアイムは、ここに来て、ようやく二つの会の内情という物を理解出来た。
会は両国の友好を望んでいる。それは、別に平和主義でもなんでもなく、その状態が利となる者達が裏に居るからだ。
では、その者達とは何なのか。古今東西、平和状態で利益を多く得られるのは、その国の統治者層である。それも古くから既得権益に少しずつ根を張らす様な歴史ある貴族こそ、平和状態を望むのである。
「え、ええ、まあ、確かにそうなのですが。」
空気を読まないアイムの発言によって調子を崩したのか、あっさりと認めてしまうケイ。
「なら話が早いじゃないですか、両国間に権力を持った人達が似たような会を作ってるんだから、僕達みたいなのを雇って意思疎通しながら最悪の状況にならない様にすれば良い。」
権力の正しい使い道とは、本来そういう物だろう。
「いや、そもそも協力関係自体は険悪になる前が存在していたのですから、両国が国交を無くした後でも、暫くはある程度の情報交換が存在し続けたのです。」
「なら、なんで今はそれも無くなってるんですか？　」
わざわざ、偶然立ち寄った旅人に仕事を頼まなければならないく

らい、情報の疎通が無くなっているというのは可笑しな話である。
「つまり、両国の国民では、情報交換できない状況になったって事だろ。」
アイムの疑問に答える様にリュンがこちらを向いて話す。
「その通りです。両国間の状態が悪くなっていく中で、とある団体がオークマ国内に生まれました。その団体はいわゆる過激派という連中で、サールマ国との繋がりを持つ者はすべて反逆者だとして、暴行を加え、悪評を広めるなどをして回り、辛うじて残っていた交流もそれによって絶たれてしまいました。」
なんとも恐ろしい団体である。相手国との繋がりだけで危害を加えてくるとは。
「あれ？　ちょっと待ってくださいよ、だったら僕らも危ないじゃないですか。自警団は何をしてるんです。なんでそんな危険人物たちを放って置くんですか！」
まさか、思いがけない所からこの様な危機が迫ってくるとは。
「国内でサールマ国に対する印象が悪くなっているなら、住民自身がその団体に味方をしているのかもしれないな。自分の心の苛立ちを解消してくれる相手には、寛容になるのが人情だ。」
そんな危険思想の人情なんていらない。
「安心しろよ、俺達はオークマ国に来てからそんなに時間も経ってないし、サールマ国の名前も出してない。襲われるなんて事にはならないさ。」
リュンはそう言うが、だからと言って安心出来る物では無い。
「でも、わたくしたちが仕事をしていく過程で、その団体に目を付けられる可能性があるのでは？」
セイリスの言う事ももっともである。サールマ国のための情報収集が仕事なのだから、その団体から見れば十分に敵である。
「その件に関してもご安心を、あなた方の仕事は、恐らく、我々が集めた情報を向こうの会に渡すだけで終了しますから。」
突然、ケイがそんな事を言い出す。

「は？　どういう事ですか。」
「御三方の話を聞くに、「森林を守る会」が望んでいるのは、私達と指示されたのはそれが理由だと思われます。国内の情報をまとめた資料を作らせて頂きますので、それが出来次第、サールマ国へと帰って頂いて構いませんよ。恐らく、明日の朝までには完成するはずですので、この会館に泊まってくださって結構です。」
「平和を守る会」との再交流でしょう。真っ先にこちらへ来る様に
途端に饒舌となったケイに圧倒されるが、つまり、自分達の仕事はここまでと言う事か。
「でも、ちょっと待ってくださいよ。散々、国内情勢の不安みたいな話を聞かされて、今回の仕事はこれで終わりだから、さようならってあんまりじゃないですか！」
ずっと先にゴールがあると思っていたら、目の前にいきなりゴール線を引かれた気分だ。
「とは言っても、これ以上の仕事はあなた方に危害が及ぶ可能性がありますし、あなた方にとっては、一応、仕事が成功した部類に入るでしょうから、それほど悪い話では無いのでは？」
ケイの言う事も確かにそうなのだが、何故か納得行かない。
「リュンさんはそれで良いんですか？」
彼も自分と同様に、仕事に納得していないのでないか。そう思い声を掛ける。
「いや、確かにケイさんの言う通りだ。ここで終われる仕事なら終わっておいた方が良いだろうな。セイリスもそれで構わないな。」
「そうですわね。依頼人の意思が最優先ですもの。」
何故か彼らも、仕事がここで終わる事に同意している。アイムは納得の行かない心持ちのまま、何も言えなくなってしまった。
「ただ、我々もオークマ国に来て直ぐに、こちらの会に来たので、この国についてあまりしらない。情報集めに来たというのに、それもどうかと思うので、観光ついでに少し、周らせて貰っても良いだろうか。」

リュンは呆然とするアイムを無視して、話を続けていく。
「それは勿論構いませんよ。会の扉は夜には閉まりますので、それまでならご自由に。」
ケイの了承を得てリュンは立ち上がる。釣られて、セイリスも立ち上がり、会館から出ることになった。
「おい、何してるんだ早く行くぞ。」
ただアイムのみが立ったまま、中々動こうとしないので、リュンがその様な言葉を掛ける事となった。
不満があったのでは無い。ただ、ここで仕事が終わる事に寂しさを感じてしまったのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1807w/

ランドファーマー旅行記

2011年10月1日03時16分発行